

910.24-H3987



1200500754345

910.24

398



×
複写



始



35.11.24

910.24

H.398



鳴

長

明

蓮田善明



おもひやる心やかねてながむらむ未だ見
ぬ花のおもかげに立つ

鴨長明集

鴨長明日次

はしがき

鴨長明……………一

↓一 青 春……………三

↓二 す き……………一八

↓三 樂譜なき樂……………四

四 和歌の無益……………六

五 回天の雅遊……………七

六 かたち……………九

七 空白のきほひ……………一〇

⑧ 伊勢記……………一〇

⑨ 世……………二五

↓〇 出 離……………三

↓一 發 心……………一四

① 方 丈……………一五

② 風靈の目……………一七

③ ひ と……………一六

鴨長明年表……………一〇

あとがき……………三

はしがき

言ふまでもなく鴨長明とは、古來「方丈記」を以て普く知られてゐる詩人で、その六十餘年の生活を、平安朝末鎌倉初期の國のゆゆしき時代に生き、又最もそのきよらかに美しいなげきを高く上げた詩人である。

私は本書に長明を書いて、そこに「時代」を書き「詩人」を書いた。しかも多くの戰場歸還者が書き綴つてゐる幾多の文章の中にあつて、これは國文學者としての私の覺悟として書かれたものである。私はそのことを銜ひなく率直に記しておきたい。それが、普通の傳記の形でない、又何等の概論的でもない斯ういふものを私に書かした所以でもある。それ故讀者は必ずしも第一頁から読み始めるのでなく、どこを開き、どこから読みかゝられるも結構である。それら、私が長明を書き初めた由縁は、雑誌「文藝文化」その他に多

少うちつけに書いたことがあり、現にこの本の第一稿は、「文藝文化」に連載中のもので、八雲書林主の勧めにより此の本を編むに當つては、初對面の讀者のためにも、初稿の全部に筆を入れて加削し編み變へた。私としてはそのいづれを定稿とする意味もない。私が此の時代にこのやうに鴨長明のやうな隱棲閑居の詩人を招じ來ることは、必ずや現實迴避の時代錯誤の譏を受けたリ、或は反對に、此のやうな時代にこそ此のやうな詩人のことも却つて無用の用があるなどと、それこそ理解ありげな共鳴を以て迎へられたりするかもしれない。しかしそのやうな尤もげな何れの批評からも、更に問題は新たなものがある。若しこの時に、鴨長明がもつたあのただならぬなげきに對して、嘗て多少なりとも國人としての感動の記憶をもつ人あらば、彼がとつた要なき隱棲閑孤を暫くゆるして、請ふこの小卷を開きたまへと、云爾。

鳴

長

明

鴨長明

一 青 春

鴨長明の若い頃についての第一の記録には、人が彼を「みなしご」と稱してゐる。(無名抄・源家長日記)そして若い頃の和歌に、亡父追懐の

父みまかりてあくる年花をみてよめる

春しあればことしも花は咲きにけり散るををしみし人はいづらは

といふ歌もある。(鴨長明集)

又老後に書いた方丈記によれば、五十歳の頃に愈々心決して本當に出離した時には、「も
とより妻、子、なければ、すがたきよすがもなし」と言つてゐて、その時は全く身一つであつ

たのであつた。が、奥書によれば、三十にならぬ頃に纏められた筈の右の歌集の異本には

ものおもふ頃おさなき子をみて

そむくべきうき世にまどふ心かな子を思ふ道は哀なりけり

ものおもひ侍るころおさなき子をみて述懐のころを

おく山のまさきのかづらくりかへしゆふともたえじ絶えぬなげきは

と子どもを離れようとすることを歌つて居り、

懐舊の時子といふことを

おもひ出でて忍ぶもうしやいにしへを今つかのまに忘るべき身は

ともある。彼には實際は妻も子もあつたのである。しかるに右の歌集にはこの子をも、又恐らく妻をも捨てて、出離しようとする、その出離についての述懐の歌が、右の歌に續いて十數首並んで出てゐる。事の事情は直ちに明瞭でないが長明の心に大變憂愁がこめてゐることが、はつきり分る。全部擧げてみる。

あれば厭ふ背けば慕ふ數ならぬ身と心との中ぞゆかしき

心にもあらでなにそのふるかひはよし賤の身よ消え果てねただ

何事を憂しといふらむ大方の世のならひこそ聞かまほしけれ

うきながらすぎ野のきじの聲たてゝさをどるばかり物をこそ思へ

霜うづむ枯野によわる虫の音のこはいつまでか世に聞こゆべき

世は捨てつ身はなきものになしはてつ何をうらむる誰が歎きぞも

憂きはいかにせむとて惜しむ命ぞと人に代りてころをぞ問ふ

花ゆゑに通ひしものを吉野山心細くも思ひ立つかな

哀ともあだにいふべき歎きかとおもふか人の知らず顔なる

住みわびぬいざさは越えむ死出の山さてだに親の跡をふむべく

これを見侍りて鴨輔光

すみ佗びて急ぎな越えそ死出の山此の世に親の跡をこそふめ

と申し侍りしかば

情あらばわれ惑はずな君のみぞおやのあとふむ道はしるらむ

この一聯の述懐歌は、夫木和歌抄の「櫻ゆえ片岡山にふせる身も思ひ遂げねばあはれ親なし」ともいひ、又方丈記に

わが身父方の祖母の家を傳へて久しく彼所に住む。其後縁かけ身おとろへて、しのぶかたがたしげかりしかば、つゝに跡とむることを得ずして三十餘にして更に我心との庵を結ぶ

とも記してゐるあたりにほのめかされてゐる事情にも關聯してゐるらしいことが容易に察せられる。そしてこれは何か讀む人に一篇の小説を思はせるであらう。

右によると、何かそれは「父」とか「家」とか、「縁」「しのぶかた」とか、「身おとろへ」「數ならぬ身」「賤の身」とか、「うらむる」とかいふやうな事を語つてゐる。思ふに、早くより父方の祖母の家を繼いだものの、遂にその縁を離れて別居せねばならないやうな

事情を生じ、結果としては、窮境に陥つたといふ事を示してゐる。そのために彼は子等とも別れねばならなかつたし、更に世を背かうとし、吉野山へ隠棲を思つたり、遂には又死出の山を越えむ、と言つたりしてゐる。しかし彼の心は一決してゐるのではない。まどひ、佗び、未練に悶え歎き廻つてゐるだけである。さう思ひ立たねばならない心のうちも、「憂し」「物をこそ思へ」「よわる」「うらむる」「歎き」「住みわびぬ」といふ言葉を、繰り言してゐるが、それは勿論右の事情から惹き起される心持にちがひないけれども、もつと、自分でもはつきり説明のつかぬ混沌とした憂ひや歎きにひとり躍起になつてゐるのであるらしい。「あれば厭ふ、背けば慕ふ」さういふ、われ自らにわけの分らない、わが身とわが心との乖離した間を知りたい、とも歌つてゐる。めづらしい和歌である。「何事を憂しといふらむ大かたの世の慣ひこそ聞かまほしけれ」と、己れと世の通念との間にも疑ひがある。併し彼はその對決に與へる分別などよりも、はやくも自嘲的に「よし賤の身よ」とか「數ならぬ身」とか、霜野に弱る虫の音のやうに弱り衰へていつまで生き得るものか

とか、世も身も捨てれば恨みつらみもなげきもありはしないさとか、或はわざわざ自殺しようと言ひふらしたり、こんななやみを人のしらす顔なるとか、世に容れられないとかと突つかかつて拗けてみたりしてゐるかと思ふと、又「うきながらすぎ野の雉の聲立ててさ躍るばかり物をこそ思へ」と身の置き所ない狂鬱に陥つてゐる。

これは若い長明の、とはいへ併し、子も出来、且つは養子としてその家を嗣ぐべき境遇についての分別も出来てゐた筈の、又全く心ない青年期といふでもない歳頃にもなつてゐたらしい長明の身の上についた事であり、その時の長明の姿である。恐らくこのやうな結果が、數年後には「三十歳あまりにして更にわが心と一の庵をむすぶ」といふことになるらしいが、ここに「更に」といつてゐるのは、それ以前に既に一族との別離があり、「縁かけて」ゐたことを指すらしく思はれる。私はこのことにあまり長くかかはつてゐるやうだが、もすこし筆をついでおきたい。

彼の右のやうな言動は、鴨輔光といふ、恐らく長明と同族同年輩の、心を寄せ合ひ語り

合ひもした知己でもあらう人から、前掲の和歌のやうな忠告を受けてゐる。そんなに迄考へつめなくてもよいだらう、といふやうにその忠告は聞える。長明の取亂し加減に一寸常軌を逸した風があり、又彼が此事を歌にも方丈記にも觸れつつ而も具體的には殆んど全く書かないでゐるところ、又兒をいとほしみつつ而もその子とも別れねばならない事情であるところには、恐らく彼の養家先きで何か常軌を逸した失策があつて、それが破綻に及んだのではないかと思ふ。彼が、「うらむる」と言つてゐても、何一つ具體的に對手を責めたり或は之と争つたりしてゐるのではなく、何やら獨り相撲をとつてゐるといふ風にも見える所を見ると、この事件は、養家先きが彼に對して邪慳であつたりしたのによるのではなくて、これも、彼流の「我が心と」仕出かした事の結果ではなかつたか。どうも彼のアブノーマルな心狂ひがうかがへるやうな氣がする。大體子も妻もありながら、世間的の目からは非難され嗤はれるやうなことを爲つづけけた放蕩の果てとでもいふやうなことはなかつたか。しかも彼はそれを知つて分別はありながら妻子を狡く欺いたりしてゐるといふので

なく、「世のならひ」と自分とのけぢめの分別を知らない放蕩放埒（變な言ひ方だが）ではなかつたか。それで、いさ家を離れねばならぬと迫まられると、子を愛しんで、「おく山のまさきの葛くりかへしゆふとも絶えじ」と歎いたりしてゐるが、これも傍から見ても、もはや痴呆めいた、くだいたはごとであつたかもしれない。それかと思ふと、へんにじくなつた「父」といふものを感じる男で、これも孝行しようとか何とかいふのでなく「花を見」たりしてゐると「あはれ親なし」と思つたりするのである。いつそ死んで「親のあとをふむべく」思ふのも、この世の縫りを失ひ、この世の耻（耻といふことを方丈記では度々言つてゐる）に堪へぬ心の底に何か生きねばならぬものを熱く感じて、それを拗ねた姿で言つてゐるのである。心は、生きねばならぬと一決してゐて、言葉にはそのままに「生きたい」と言つたのでは、彼のこの世に生きやうは正しく言ひあらはせない、死にたい、と言ふことによつてのみ寧ろその本心が告げられると、長明には感じられてゐるのである。それは今これより先きを生きたることを断たれるやうに強ひられて、かへりみて「おやのあ

と」をふみ生きるべく、生命のゆかりを底深く感じ出してゐることと同じ一つの告白である。それはしかし子や父を思ふ情が厚いかいふやうな道徳的なしつかり者の人情とは自ら別で、謂はば純粹の生の最後の聲である。一口に言へば唯切なる聲である。外部からはしかし唯見苦しいものである。

さてそのやうに家を出なければならぬのに、妻のことは一言も觸れてゐない。前記のやうに方丈記に「妻子なければ」と言つてゐるが、それははるかに後の五十歳の時の場合である。

「秋の夕に女のもとへつかはす」といふ歌が、前述の同じ歌集に残つてゐるが、

忍ばむと思ひしものを夕ぐれの風のけしきにつひにまけぬる

これは妻への歌ではないであらう。一般には妻へ通ふ時の歌としても考へられないことはないけれども、長明は恐らくそのやうにして結婚したのではなく、父方の祖母の家の養子となつたので、この歌のやうな事情なしに結婚してゐるかと思ふ。ここに「忍ばむ」と

言つてゐるが、方丈記には別に「其後縁かけ、身おとろへて、忍ぶ方ぐいしげかりしかば、つひに跡とむることを得ず」ともある。「しげかりしかば」は大福光寺本では「シゲカリシカド」とある。忍ぶ方々のしげかりし事とそのための結果は同じである。「忍ぶ方々しげし」とは、今鏡・金葉和歌集にある周防内侍の有名な次の歌を心に含んでゐるのである。

家を人々にはなちて立つとて柱にかきつけ侍りける 周防内侍

住みわびて我さへのきの忍ぶ草しのぶかたがたいしげき宿かな

この和歌に因める舊屋には西行法師も人々と集まつて述懐の歌を詠んで故人を偲んだ事があり（山家集）、長明もこの舊屋のことをその歌話書「無名抄」に書いてゐる（周防内侍の家的事）。周防内侍は、老年迄宮仕へをしてゐたのであるが、右の歌はその老後に隠棲的な生活を營んで詠んだものであらうか。（後冷泉天皇崩御後一時里に籠つてはゐるが）。もとより長明の場合と同じ事を言つてゐるわけではないけれども、「家を人にはなちて立つ」といふ所は、必ずしも出家ではなくて而も一種の不即不離の出家的閑居を營むために一屋

を立てて之に住んだらしい事は、正に長明が養家と縁かけてつひに跡（大福光寺本ではヤド）とむる事を得ずして、離れた事と相似てゐる。又周防内侍がその家の柱に「住みわびて我さへのき（軒・退の意をかける）の忍ぶ草しのぶかたぐしげき宿かな」と書きつけたといふのは、いかにも様々の印象を世に残した閑秀歌人らしい餘情を言外に示してゐる。「住みわびて」とは長明も前掲の歌の中に歌つてゐるところであり、「忍ぶ」といふことも同じ歌集に「梅花誰家」といふ題の「われも今しのばむやどに梅植ゑじまだ見ぬ花の面影に立つ」、又「忍戀」といふ題で「しのぶれば音にこそたてね云々」、又「對泉戀人」に「おもひ出でて忍ぶ涙や」、又「懷舊の時子といふことを」とて「おもひ出でて忍ぶも憂しや」と歌つたりして、數多くない歌數の中でかなり目に立つ言葉である。たとひ「しのぶかたぐしげかりしかば」としても、必ずしも耐へ忍ぶべき不幸事とのみ解く必要もあるまいし、縦ひさう解いても、その中には戀のことなどに絡まつた憂さなども含んでゐたと考へてゐるい筈もなく、況や「しのぶかたぐしげかりしかど」となれば女を思ひやる實

の一つも結ばずして住み定まり得なかつた懷舊であらうに違ひない。周防内侍の場合もはや老齡の上に、單に戀ごとのみでなくて、惚ぶといふことも、その生涯の様々の跡をこめて言つてゐることであらうが、長明が前記のやうな別離を餘儀なくさせられた因由は、その若さを以て考へてみれば戀愛を多く考へていい。寧ろその方が自然である。

しかもついでに考へておきたいのは、長明が周防内侍のことを頭においてゐたのは、必ずしも老年になつて方丈記を書いた時のみでなくて、もう夙くこの若い頃すでに、和歌の手ほどきを人に受けたりしつつ妙にかういふ「住み侘び」に心惹かれてさへゐたのではなからうか。そのことは又後章に於て述べるが、とにかく一方では熱い數々の戀をし、その裏では住み侘びた孤獨を空想してゐる、さういふ青年の放蕩を私はここに想像する。三十歳前後のことと考證されてゐる「伊勢記」の歌に、

伊勢の國に侍りける時、今よりは契るべき申しける人に、みつの浦にて

我もさぞたのみはかくるいせ島やこひしき君をみつの浦なみ

と詠んでゐる。これも後に又述べるが長明の放蕩の歌であつた。とにかく「忍ぶかたぐ云々」とは少くとも彼の若い頃の思ひ人達のことを胸において言つてゐるのであると見て甚しい牽強ではない。通つた女達へ「住む」ことも出来さうなもの一つ二つではなかつたのに、やはり自分の性か運か途に住みつくこともなくなつて、それらも皆縁ないものになつてしまつて行つたといつてゐるまでではないか。又長明にとつては、思ひ返されるのは、自分の定まりつかぬ行跡の方で、女を責めるといふ心ではない。唯彼にはわが身の性と宿命的なものが感じられ、又時には何となく世がはげしく怨まれる時もあるが、要するにこれといふ事によるのでなく、彼の天質にさういふ所があつたのである。恐らく心赴けば「風のけしきにつひにまけ」たやうにして執心させられた女達もあつたりして、家と族を顧みなくて呆けてゐるうちに、世間にも家にも、我自ら容れ難いことになつてゐたのではないであらうか。或は縁を斷たれた後でも、心惹かれては女へ通つたりしたこともあつたのかもしれない。しかもその繁かりし方々も、何れも終に跡留むることを得なかつた。縁

切れて養家を追はれた後は、行く所なくなつて、「久しく」祖母の家におた事だし實家にも今更歸れないし、歸つたつてしやうもない。實際は十訓抄の言ふやうに鴨社の氏人といふことになつてゐたが、結局源家長日記の謂ふ「みなしご」であつた。吉野山へ行かうとか、死なうと考へたりしたり、どちらも果さず、又も耻さらしにも住みつぐべき所を求めて女を渡つたりした。長明のやりかねないことである。しかし決して世間の交りなどは上手に出来ないことは前にも述べた所である。源家長日記には「すべてこの長明みなしごになりて社のまじらひもせずこもり居て侍りしが」とある。

しかしこんな（これからもであるが）世間の手に負へない彼は唯の不節操な蕩兒であらうか。勿論それについて彼は辯解などしてゐないし、その通りだと十分責められていい。しかし彼自身の天質的缺陷か何か、或はもつとほかのことに夢中になつてでもゐるのか。もすこし、否これからがもつと考へてみねばならないところである。

要するにこの時代の彼は、自分の姿も世間の姿も分らない、何か自分と世間との間に隙があり、符合してゐないことに氣づき、或時はそれを「人にかはりて」己れの「心をぞ問ふ」てみ、或時は反對に「哀ともあだにいふべきなげきかと思ふか人の知らず顔なる」と己れの解釋理解を人に問はうとしてその不可能さに、ひとりもだえたり悲しんだりしてゐる。

併し彼が老後方丈記の中で、世人は名利のために己を賣つて「必ずしも情あると直すなほなるとをば愛せず」と峻評するのを見れば、彼が老後まで世情と尙ほ融和しないまま對決してゐることが分る。しかもそれは彼自身が「情あると直ほなる」ことの率直な自認に他ならないし、そこに彼自身一寸一分の偽りはないのであつて、斯ういふ老年迄烈しい心の清らかな直情が、若さの時にとるところの無分別な論理のない放蕩といふものを、私はここに想像したい。

見てもいとへなにか涙をはちもせむこれぞ戀てふこころ憂きもの
直情が身内で湧きたぎつてゐるその青春が、この肉體といふ身を持ち扱ひかねて狂ひ廻つ

てゐる迷妄である。さういふ迷妄に於ては、直情の正直といふものが肉體を用役すればするほど、却つて志と違うて、肉體は眞直にその肉體の直道をとる。精神の清らかな直情が肉體的直行として誘はれて、汚濁のデカゲンとなるのである。さういふ意味からすると、或る女に心惹かれるといふよりも、彼自身先づ「風のけしき」に誘はれるやうにひとりはかなく誘はれてゐたのであり、その汚濁を青春の直情はその直情の故にこそ何としても統御できない。汚濁と知りつつ、内面には「直ほなるを愛す」る己れの熱情に憑かれてゐるために、直情の清らかさと身體の直行の結果とが、どうどうめぐりをし、混迷焦燥し、苦惱のみはげしくて、生にも堪へ難てになる。而もその堪へ難さの底に生の熱さがしのであるのである。私は鴨長明が後年の厭世無所住の美しさを書いた方丈記を思ふ度、このやうな青春の放蕩を先づ想ふのである。

二 す き

長明が、右に述べたやうな、何か女性に關する「好き」などによつて家庭的な破綻を來して、しかもそこに並々ならぬ稀な反省と憂愁をもつやうになつてゐた、そのやうな青春の時に又、彼がひどく執心してゐたものは、和歌と管絃とであつた。これらも共に當時「好き」と呼ばれるわざであつた。「好き」とは王朝文化自身の息づきのやうなものであるが、その穿鑿は後に廻して、ともかく、人とまじはりせぬ「みなしご」の長明が、不思議なほど熱心に携つたこの二つの風流韻事について見てみたい。

長明は和歌については、俊頼の子俊恵に師事した。俊恵の死期は明確でないが、治承の頃まで歌壇的に足跡を残してゐる。家を歌林苑と稱して、長明も、その月例歌會に出席してゐた。その歌道上の意見や教訓や故事談は、長明が「無名抄」に多く書き留めてゐる。もし俊頼五十歳の子と見積つてさへ、治承四年は七十五歳に垂んとしてゐるので、大體その頃には俊恵は歿してゐたものとしても、長明の年齢は未だ廿五歳前後である。(卷末年表参照) 尙ほ俊恵の他に今一人、和歌管絃に互つての師とも友ともなり、長明の天質を知つて

常に懇ろに教へたり諭したり勵ましたりしてゐる。「故筑州」と呼ばれてゐる人物がある（無名抄）。これは「胡琴教録」といふ、略々同時代のもと思はれる琵琶の書の中にも「故筑州」として出てゐる人物と同一人であらう。この筑州が歿して故筑州と呼ばれた後に俊恵に師事したかと、一寸思つてみたが、千載和歌集に長明の歌が一首とられた時の筑州の言葉が無名抄に残つてゐるので、却つて俊恵よりも後まで生きてゐて、長明に知己の忠言を寄せてゐることが分るのである。この俊恵や筑州との和歌や管絃の交渉のほかにも、無名抄によれば、文暦二年に歿した源氏物語河内本等を以て有名な文人源光行の興行の賀茂社歌合に、「石川やせみの小川の」の歌を出して問題を起し、論壇の雄顯昭法師に認められたりしてゐるし、壽永元年にまとめられた月詣和歌集にも四首、^一遡つて安元二年に薨せられた高松女院の北面の菊合の時に「堰きかぬる涙の川の瀬を早み崩れにけりな人めつのみは」といふ戀歌を作つてゐる。この時は參會前に勝命法師にその歌を見せて意見を徴したところ、或る注意をうけて他の歌を出したといふ事情などが、記録されて存してゐる。

どにかく、「みなしこ」の長明もかういふ會には入り交つたりして、「人に知られ」つつあつたのである。まだ彼の二十歳前後であつて、詠作上の幼い所をも示してゐるが、とにかく記録的には二十歳前後に既に高松女院北面の菊合に出詠したりしてゐるので、作りはじめたのはもつと早かつたであらう。しかも彼は自ら和歌に於て「させる重代にもあらず、よみくちにもあらず、又時にとりて人にゆるされたる好士にてもなし」（千載集に一首撰入された時の述懐）と言つてゐるところを以てみれば、彼の和歌の由つて來るところは、殆ど主として彼の天性の「好き」によるものであつたといつていい。但し筑州は「そこなどは重代の家に生れて」といつて居るし、長明も「させる重代にもあらず」といつてゐる程度なので、その程度には考慮しておいていい。いくらかはその家の風として「すく」ゆかりもなかつたとはいへない。とにかく彼がいつとはなく早くから和歌を好み始めてゐたことが分り、恐らく養家と縁が切れたと思はれる頃に、最初の家集（鴨長明集）が繼められてゐるらしい。

それは彼の初心且つ亂れ心の時代の記念であつた。前掲の歌の中で、「花故に通ひしものを吉野山心ほそくも思ひ立つかな」とか「まだ見ぬ花の面影に立つ」などは、西行の「吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん」などを文學青年らしく口眞似してゐるのかもしれない。

この百餘首の小家集には、初心の幼いものと青春のデカダンを含みつゝ、彼の生涯をつらぬく疇癖な根性の感じとられるものが少くはない。一二を挙げれば、

對月忘西

朝夕に西をそむかじと思へども月待つほどはえこそ向かはね

の如きは「方丈記」の末尾の章句を思ひ當らせられるものである。(一五八頁参照)

忍 戀

待てしばしもらし初めても身の程を知るやと問はばいかゞ答へむ

不_レ被_レ知_レ人戀

うき身にはたえぬ思ひに面なれてものや思ふと問ふ人もなし

閑庭刈萱

わけてくる人なき庭のかるかやはおのれみだるゝ程ぞ見えける

戀のこゝろを

うらみやるつらさも身にぞかへりぬる君に心をかへておもへば

思_二一世_一戀

我はただ來む世の間もさもあらばあれ君だに同じ道に迷はば

これらの歌は長明を知るためには記憶しておいていい歌である。

ところで、長明の和歌への「すき」(十訓抄)ぶりといふやうな事について、まことに奇異の思ひをさせられるものがある。彼の「すき」は世の多くの「すきもの」達のやうに、佳歌を詠ませ給へと神に祈つたり、又明け暮れ工夫修業に熱心に身を入れたりして、眞面目に努力勉強したといふやうなものでなく、そのやうなことの代りに、唯、執心とのみ言

ひ得べきやうなものをのみ傳へて居り、それが又些か常の執心に異なるものであつた。

千載集には予が歌一首いれり。させる重代にもあらず、よみ口にもあらず。又時にとりて人にゆるされたる好士にてもなし。しかるを一首にても入れるを「いみじき面目なり」とよろこび侍りしを、故筑州ききて「ただなほざりに言はるゝかと思ふ程に、度々になりぬ。誠に思ひてのたまふ事にこそ。さるにてはこの道に必ず冥加おはすべき人なり。そのゆゑは、道理はしかあれど、人のしか思ふ事は有りがたきわざ也。此集を見れば、させることなき人々皆十首、七八首、四五首入れるたぐひ多かり。かれらを見る時は、いかばかり、心やましく思はるらむと推しはかるに、あまりさへ斯く悦ばるゝ、いみじきことなり。道を尊ぶには、先づ心をうるはしく使ふにある也。今の世の人は皆しかあらず。身の程よりも心高くおごり、かまびすしきいきどほりをむねとむすびて、事にふれてあやまち多かり。いま思ひ合せられよ。」となん申されし。まことに此の道の冥加身の程に過ぎたり。古き人の言へること、必ず故あり（無名抄）

長明の悦びやうは人を疑はせて仲々信じさせない位である。そんなにまで長明が嬉しいと言つて廻つてゐるのは、謙遜などと感心される唯の美談などではない。筑州さへもまだ然う美談風にみてゐるところがある。千載集は撰者俊成の言ふ所では、作品第一主義で人柄は第二としたらしい（古來風體抄）。それで「させることなき人々」の歌も割合に入されたりしたわけである。長明もその頃はまだ同様、させることなき一人であつたに違ひない。そして俊成の撰集方針にかかつて一首採られたのに違ひない。「兼載雜談」によれば師の基俊と反對の俊頼の歌を多く入れたことについても俊成は「俊頼はにくけれど歌はにくからず」と言つたといふ。尤も顯昭は俊成を偏頗ありといつてゐるが、これは反對派の顯昭自身の言ふことで分らない。とにかくその撰入された歌といふのは、

隔海路戀といへる心をよめる

思ひあまりうちぬる宵の幻も浪路をわけてゆき通ひけり

といふ、莫迦げた幼稚なものである。長明が一體に莫迦げた歌を作ることには就ては後に又

述べることがあるが、他から見たら取るに足らぬ事に人を訝らせるほど無性によることで夢中になつてゐるところが、これからも述べる彼の性根を現はしてゐて面白いのである。これは彼の三十歳餘りの頃のことである。

次に後年、四十五歳餘りの頃のことになるが、後鳥羽院の和歌所の寄人に召された時の様子も、これに似て躍如としてゐる。即ち、

此長明みなしごになりて、社のまじらひもせず、こもりゐて侍りしが、歌のことにより北面へ参り、やがて和歌所の寄人になりて後、常の和歌の會に歌まゐらせなどすれば罷り出づることなし。夜晝奉公怠らず。(源家長日記)

長明が後鳥羽院の御知遇を喜び、彼又熱心であるとは言へ、この長明の様子は、和歌所開闔の源家長の目に、一種奇異なまでに映つてゐる。ついでにも一つ、後年の逸話を。

新古今えらばれし時、この歌(せみの小川の歌)入れられたり。(中略)すべてこのたびの集に十首入り侍りし。是過分の面目なるうちにも、此歌の入りて侍るが、生死の餘

執ともなるばかり嬉しく侍るなり。但あはれ無益の事かな。(無名抄)

以て長明の和歌に於ける好きの一斑を知ることができる。これは前述のやうに他の「すきびと」の好きとは非常に特異なものである。彼の好きはもはや好きといふよりも、斯ういふ好きの道に於てのみやつと己を他に結びつけ得て、それに全心得りついてゐるといつた有様が見られる。それにしても右の執心は常に餘りに極度であり、「但あはれ無益の事かな」とは、その極度の好きの告白に自ら疲れてしまつてゐるかの感さへ起させるものがある。

* * *

さてこのやうに和歌に執心してゐる傍らに、音楽に對する執心の奇異さも、それを偲ぶ逸話を傳へられてゐる。もともと音楽のこと故、和歌のやうに後に形跡の残るものはないが、それが又却つて或は長明の特異な性に向いてゐたのではないかとさへ思はれる。

彼の音楽に關しての興味については、「無名抄」、「發心集」、「方丈記」等の自著の記事か

ら間接に推されるところも少くないが、「十訓抄」にも、「近比、鴨の社の氏人に菊大夫長明といふ者ありけり。和歌管絃の道に人に知られたりけり。(中略)かの庵(方丈)にも折琴つぎ琵琶などを伴へりけり。念佛のひまぐには糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ」と記されてある。方丈記にも、その庵の座右に、「和歌・管絃・往生要集ごときの抄物をいれたり。傍に琴・琵琶をのく一張をたつ。いはゆるをり琴つぎ琵琶これなり」とあり、又同文中に「若し餘興あればしばしば松のひびきに秋風樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝は是つたなければ、人の耳を悦ばしめむとはならず。ひとりしらべ獨詠じてみづから心をやしなふばかりなり。」と管絃に托してその閑居の風情をも語つてゐる。更に、前引の、「それ人の友とある者は、富めるをたうとみ、ねむごろなるをさきとす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。ただ絲竹花月を友とせむにはしかじ」とは、彼の絲竹音樂を玩ぶところが、如何なる胸奥からのものであるかの秘密をも伺はしめるものである。

長明が音樂を習ひ始めたのはいつの頃からであつたか、中原有安について琵琶を習つたが、有安は揚眞操迄教へて残りはゆるさずしてうせにけりと、「文机談」といふ樂書にある。故筑州が長明の管絃の友でもあつたことは前に述べた通りである。然るにこの「長明と聞えしすきもの」に後年果然「祕曲づくし」といふ破天荒の事が出来したのである。この事件は長明の好き心のほどを躍如と現したものとて興味深い。即ち文机談に、

扱、此の有安には、鴨長明と聞えしすき者も習ひ侍りけり。わづかに揚眞操迄請取て残りは許さずして亡せにけり。

長明は和歌の道さへ聞えければ世上の名人(琵琶の)にぞ侍りける。すきのあまりにや、或時世上に聞え高き人々を數多語らひめぐり、賀茂の奥なる所にて祕曲づくしといふ事をぞ始めける。大納言經通卿、中將敦通朝臣、三品實俊卿、中納言感(盛カ)兼卿、右馬頭資時入道もおはしけり。「足柄」謠ひ給ひけり。此外もあまた人々おはしけり。樂所には景賢景基も侍りける。算篋の小調子、笙の笛の入調、笛の荒序、箏の調子す

べて残る事なし。まことに斯様にしつとも侍りなんとぞ覺えける。願主の長明、年頃思ひけるには猶こよなく勝りて覺えけるは、感に堪へかねて、琵琶の啄木と云ひける曲を數反彈けり。何とはしらず面白き事言やる方なし。我も人もあらぬ世界に生れ、知らぬ國に來たりぬる心地して、耳を驚し目を聳てずといふ事なし。まことにしても斯かる事に逢ましはらくは何かせんとぞ聞えける。

所がこの事が、木工頭藤原孝道（文机談の筆者の師孝時の父）の耳に入り、事を後鳥羽院に訴へ出た。啄木の曲の如き尊貴すべき曲を、廣座に於て而も「凡夫下傍の仁として、身に傳はらざる祕曲を偽りて、しかも貴所高人の奥儀をはかり奉る事は是重き犯罪也。すみやかに糺さるべしと憤り奏しければ、長明に御尋ね有り」とある。然るにこの時の、長明の勅答が又實に破天荒のものである。曰く、

「然ること候き。長明人間に生を請けて、絃歌の好士達各々たしなむ所皆淺智なりといへども、諸道の奥曲、朝暮是を庶幾するに堪へず。臨終の妄念とも罷成ぬべく侍り

しかば、とかくひけいをめぐらして貴賤を勧め、其道々の棟梁を選び語らひ申して、會合の事は候しかども、啄木の曲に於いては、未だ師説候はねば、終に是を仕る事候はず。但さしもの千載の一會に心強くして止み候なん事も且は無念に覺え候て、揚眞の曲を啄木に模したる事は候き。みづからかくろてを絶て他の白手を得たる事、浮華の言その科有といへども、法意の糺す所いかでか重科には準ぜられ候べき。道にふける心ざしのせつなる事唯雲泥異なりといへども、皇化の太聖をめぐらして叡察を下しましますべし。」君も世の科には准じ思召されざりける上に、人々も申けるは、此事まことに世の奸惡にはまさるべし、朝憐あるべき物を、などつぶやく輩も侍りけれども、道の狼藉、向後の爲め斷絶し難き由、孝道強く奏聞仕りければ、是に堪へずして終に（下略）

この事件が如何に長明の好きの程を表はし、又それが實は世間の意表に出た突拍子もない無法な傍若無人の振舞であつたかといふことは、次章に詳しく當時の例に照して説明す

るが、とにかく長明が單獨で祕曲づくしなどといふ會同を主催して、興に誘はるるや習ひもせぬ祕曲をまんまと演奏し、會同者をこの世とも思へぬ感動にひき入れたりしてゐる、とさう書いてゐる文机談の筆者、或はそれを筆者に語り傳へた人が、實はすべて長明を責めた孝道の側の人であることを考へ合せると、一層に面白い。併し、この事は全くあり得べからざる放埒な非行であつて、後鳥羽院すら道のために御處斷のやむなきに至つたやうな事件であつた。長明も亦た既にその行爲について客觀的には非行であることは自ら認めてゐた。しかるに仲々それだけには屈せずして、厚顔に強辯しようとしてゐるのである。その強辯の理由とする所は實に、唯自分が好きの餘りに爲したことである、といふに盡きてゐるに至つては、辯明にならない辯明である。長明の「すき」が、ただ純真率直いかなる世の通念をも動搖させる底のはげしい何らかをもつてゐたものであつたことは、さすがに後鳥羽院と御側近とをも動かしてゐるところを以てみても察せられる。

但し、この祕曲づくしの事は、學者の通説の如く文治二年長明三十歳前後の伊勢旅行の

前に起つたことなどではない。ついでに二三の證據について言へば、この逸話の中に出てくる人物の生歿任官活動期等を調査してみると、随分時代の食ひちがつた人物が混ぜ合はされてゐて、それは必ずしも當てにならないものだが、せめて主要人物だけは信じてよいとすれば、孝道は嘉禎三年に七十三歳を以て終つてゐる(文机談)から、長明よりも後まで生きてゐたので、考證の上に差支へはないが、長明に揚眞操まで教へて歿した中原有安は建久二年三月三日の若宮社歌合に見えてゐる位であるから、それだけでも文治二年から五年後になる。文脈から察しても、やはり後鳥羽院にも相當にお認めを蒙つた後のことであると思はれる。

ともあれ、後年このやうな放埒な事件を出來した長明の管絃への好きの程がどのやうなものであつたか、従つて遡つて若い日の管絃の好きも、戀や和歌の好きから併せてその趣を類推することができるであらう。

* *

す き

しかるに、このいみじき好きものたる長明の書いてゐるものの中に、戀愛や藝能のほかにも、更にも一つの「好き」が書かれてゐる。それは世の「名利」に心を染めず、之を潔癖に厭ふといふ厭世を指して言つてゐるのである。例へば、發心集の「侍従大納言幼少時止驗者改請事」の中に、

……此の君は、幼くよりかゝる心をもち給ひて、君に仕ふまつり、人に交はるにつけても、事にふれつつ情ふかく優なる名をとめ給へるなり。惣ていみじきすき人にて、世の濁に心を染めず、妹脊の間に愛執淺き人なりければ、後世も罪あさくこそ見えられ。

又、「寶日上人詠和歌爲行事」の中に、

つとめ(佛道勤行)は功と志とによる業なれば、必ずしも是をあだなりと思ふべきにあらず。中にもすきと云ふは、人の交を好まず、身の沈めるをも愁へず、花咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふにつけて常に心を澄まして、世の濁に染まぬを事とすれば、

おのづから生滅のことはりも顯れ、名利の餘執盡きぬべし。

これ又長明の「すき」の心懷の一つである。例の「罪なくして罪をかうぶりて配所の月を見ばや」と願つた王朝の文人中納言源顯基のことも、發心集に

中納言顯基は大納言俊賢の息、後一條の御所に時めかし仕へ給ひて、若うより司位につけ恨なかりけれど、心は此の世の榮を好まず、深く佛道を願ひ、菩提をのぞむ思のみあり。つねの言草には、彼の樂天の詩に「古墓何世人。不知姓與名。化爲路傍土。年々春草生ひたり」と云ふ事を口つけ給へり。いといみじきすき人にして、朝夕琵琶をひきつゝ、「罪なくして罪をかうぶりて配所の月を見ばや」となん願はれける。彼の後一條崩れましくたりける時、なげき給ふさまことわりにも過ぎたり。(中略)やがて家を出で給ふ。その年頃の上公達袖をひかへて別を悲しみけれど更にためらふ心なかりけり。横川にのぼりて、かしらをおろして籠り給へりける時、上東門院より問はせ給ひたりければ

世を捨て、宿を出でにし身なれども猶戀しきは昔なりけり

とぞきこえける。後には大原にすみて、二心なく行ひ給ひけるを、時の一人尊く聞き給ひて、しのびつゝ彼の室に渡り給ひて對面し給へる事ありけり。宵より御物語など聞えて曉に及ぶまで、此の世の事一ことばも云ひ交ぜ給はず。

とある。これらの潔癖な厭離者達を「すき人」と呼ぶことは必ずしも長明のみのしたことではなく、王朝人の呼び慣ひ來つた所であらうが、如上の人々を敬愛してやまぬ長明自ら又同じ好き人の列に入る人物であつたことは、發心集、方丈記を讀む人には明かすぎることであらう。前に述べた所の、かの周防内侍が「家を人々にはなちて立つとて柱に」和歌をかきつけた「住み侘び」的な風流に、若い長明が心を惹かれてゐたこともここに思ひ合せてよい。はげしい戀か何ぞに心を奪はれてありながら、いちはやく愛執を斷つことを思つたりしてゐるのである。それは戀に對してのみならず、「生死の障りともなる」ばかりに執愛した和歌や管絃に對しても、その愛執の傍らに已に「あはれ無益の事かな」と思つた

りするのである。而も單にそれを佛教風に、「すき」も「解脱の門出に侍るべし」(發心集)といふにとどまらざるのみならず、方丈記の末尾には佛者の態度を反撥しようとして、激越して居る。或は前掲のやうに「朝夕に西をそむかじと思へども月待つほどはえこそ向かはね」、月待つ雅心の故に西の空を必ずしも、といふ。

彼に於ける閑居は佛教的厭世とちがつたものを養ふところであつた。それを如何に言葉に現はしていいか長明は苦しんで、方丈記では激越のはてに「不請の阿彌陀佛兩三遍申してやみぬ」とだけ書いてゐる。(第十二章參照) このやうな理のつけ難い或るものを抱懐して彼は悶々してゐるやうである。前引の文中にも、「愛執淺き人」といふ直前にはそれと反するかの如き「事にふれつゝ情ふかく」などと言つてゐる。「名利の餘執」を放擲せんとして而も「名利の餘執」を放つべき詠歌の事に於ては、その和歌が勅撰集に選び入れられたといつて「過分の面目」を感じて「生死の餘執となる」と言つてゐる。管絃の藝術を、嚴肅なるべき其の法度は之を逸脱冒瀆して、而も妄執の如く愛してゐる。「佛の人を教へ給

ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも科とす。閑寂に着するも障なるべし。如何、要なきたのしみをのべてあたら時をすぐさむ。」とも言つてゐる。實は「要なきたのしみ」こそ長明の執して離れ難かつた「すき」であつたのである。この事は長明の正體を衝く問題であつて、後章に漸を以て述べるところである。ただ、人は直ちに矛盾などといふ便利のいい言葉で批評などしないがいい。又みだりにその矛盾に、救ひの手など出したりしようとしながいい。「あれば厭ふ背けば慕ふ數ならぬ身と心との中ぞゆかしき」このやうな身悶えと憂愁とをそのままに見るがよい。但、長明はその「方丈記」の中にその隠棲をひそかに叙して云ふ、「ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり」と。又閑居の生活を叙して曰く、「是養生なるべし」と。養生！

* *

因みに、右について思ひ合されるのは、「すく」の語義である。所謂「好く」は、好色、藝能及び右のやうに閑寂の心のごときをいつて、ほど「みやび」と同内容であるが、今一

つ「すく」とは、大言海に他動四段の「食」を擧げ、(、點筆者)

「好^いき^きテ食^クフ意カ、物ヲ喉ニ透^スシ通ス義カ」進ミ食フ。クラフ。ハム。マブ。皇極紀、

四年六月「以^レ水送^ニ飯、恐^レ而反吐^ス」字類抄「糝、スク、吞也」宇津保物語、貴宮「穀

ヲ斷チ、鹽、斷チテ、木實、松ノ葉ヲすきテ」同、嵯峨院「先ヅ、湯參レトテ、云云、

物取リテ、すかせ給へバ、エすかせ給ハズ、云云、物一口ト勸メ奉リ給へバ、すき給

ヒツ」源、五、若紫「サルベキ物作りテ、すかせ奉ル」曾我物語、五、巢父許由事「首

陽山ニ入り、蕨ヲ折リテすきケルト、申傳へサブラヒケリ」播磨風土記「穴禾郡安師

里、本名、須加里、大神喰^ニ於此處、故曰^ニ須加^コ」

尙ほ雅言集覽には右の例のほか幾つかの例を擧げてゐる中に、字鏡に糝糝糝糝、精米也伊比須久、又赤染集の「ありながら死ぬるけしきはこのために尋めしくすりをすかすなりけり」を擧げてゐるが興味ふかい。

平安朝に至つて、文人風雅の徒の間に急速に又さかんになつた「好^いき^き」とは、右の語の

天皇親ら起たしめ給ふはげましのことぶれであつた。「かひは斯くありけるものを佗はて、死ぬる命をすくひやはせぬ」(竹取物語)とは正に諧謔であつた。考證は獨斷がちの私の特に拙とするところで、右は唯「すき」について牽強の餘談を試みてみたにすぎない。

三 樂譜なき樂

さて右に長明の若い日の生活とその中に育つてきてゐる「すき」の諸相についていささか述べてきたのであるが、その「すき」も決して並々ではなかつたことも、少しく言ひ添へてきた。併しそのことは更に明らかにされねばならない。私はここに例の「祕曲づくし」の事を讀者の前に解き分けてみたい。「祕曲づくし」に於ける長明の所爲が、如何に世の常法に違ひ非行に屬するものであつたか、いかにひどく突飛放埒輕率であつたか、それは當時の樂家一般の心得態度と比較してみてもその甚しさに驚かれるのである。長明の所行を咎め立て、後鳥羽院の御處斷を迫つてやまなかつた藤原孝道にも寧ろその點十分以上の理

由があつた。「胡琴教録」「文机談」等を讀んでみれば、當時の音曲家が如何に敬慎鄭重であつたか察するに餘りある。

長明が教へを受けた樂所預の中原有安は、世にいみじき明伶輩出した後白河院の時の好士の中でも最も重い一人で、笛箏琵琶等の名手であり、二條院は有安を屢々御推稱になつたりしてゐるが、その一例として、二條院の御前にて管絃有りし時、箏や琵琶の取扱ひ殊に慎重を極めた有安の心配りが院の御目にとまつたといふやうなこともあつた。

又藤原孝道は、高倉院や妙音院太政大臣師長の愛顧を蒙つてゐるが、天性狷介なところもあつて、嘗て若い頃藤原博業が妙音院の前で琵琶を演奏するのをその昔のをかしさに忍び笑ひをやめず妙音院からひどく叱責されたこともある。後鳥羽院に對しても、院が能のない定輔を師と立てられ、定輔が當道の灌頂をとげた時、ひたすらに憤つて院に難じ奉り、又この定輔が啄木を彈する由を聞くや三十餘日絶食して憤つたり、院の御琵琶を惡罵したりもしてゐる。院は彼の舊勞を賞してそれらを笑ひ捨て給うたが、ともかくも仲々人に譲

らぬ剛情者ではある。が、それだけに又道に入つては激しいところがあつた。嘗て承元五年正月十九日の朝覲に、名器玄上の琵琶を院が遊ばされた時、孝道は豫てより玄上の修理手入を承つて勿論懇勉に修理手をくたして致したのみならず、其間といふものは精進潔齋して、荒菰を敷き注連繩を引いて之をなし、いよ／＼絃をかけ柱をつけるや、御遊の始まる時まで東の對の樂器室の内で之を抱き温めてゐるうちに、夜更けて人も少くなつた時、彼は「南無玄上、々々」と數百遍稱へ奉つて目を開くと、玄上の靈が顯はれて見えたので、祈請文を作つて院へまゐらせたといふ、さうした誠心祕器を護つたことが文机談に記されてゐる。又その子の孝時に對して骨髓に徹する修業をつけたことも同書に詳しい。或は、承久の兵亂の後、加賀法橋圓慶といふ數寄の僧が修理大夫の使者として孝道を訪れたついでに、孝道父子の音楽を懇望したことがあつたが、奏樂進むにつれ、その妙手に誘はれて、圓慶はつい知らず／＼微聲を以て孝道父子に合せて唱つてゐた。すると孝道は圓慶を見返つて睨みつけること一再でなかつたけれども、圓慶は氣附かずして止めなかつたので、遂

に孝道は、「何と存じ誰がゆるしにて催馬樂などをば自由に仕うまつるぞ。」と大音聲に口角泡をとばしつつ「公家の重んじ給ふ曲なれば源藤二つの流をはなれて常に侮り歌ふ人なし。況や地下の房たちが口入れすべき曲にあらず。孝道らが唯今仕ればとて斯様には候か。返す／＼狼藉なり。たしかに罷り立て／＼」と怒鳴りつけたので、圓慶法橋は舌を巻いて放々の態で歸つた。その後圓慶は改めて孝道に入門したが、これについて文机談の著者隆圓も「情この事を思ふに一旦は孝道が非愛に似たれども、又道を守る習ひは尤も斯かるべしといふ人もありけり」と記してゐる。右は「祕曲づくし」に關係ある人の二三の例をとつてみたのであるが、ほとんどの當時の音曲に對する慎重嚴正なる態度を見ることが出来る。

又長明が奏したといふ揚眞操や啄木の曲は、ともに祕曲三曲の一たるもので（樂家録）、文机談によれば、揚眞操から、啄木・石上流泉の二曲へと學び到るものゝやうに説いてゐる。胡琴教録によれば、

大凡琵琶の曲、大略ならふ處多し。然るに祕樂といへども催馬樂に如かず。催馬樂を

祕すといへども搔合に如かず。搔合を祕すといへども手には如かず。手を祕すといへ

ども三曲には如かず。大概かくの如く、（中略）又云、琵琶曲祕藏の事。かくに准じて

これをいふ。啄木准師子。石上流泉。揚眞操（准皇帝廟風）將律音陳大娘三手。及祕藏手等。

准師子。蘇合四帖。玉樹。柳花苑。桃李花。次手祕搔合等。准勇氣勝破。銀輝。露花樂等。

とある。文机談に長明は「わすかに揚眞操迄請取て、残は（有安が）ゆるさずして亡せにけり。」とあるのを以て見れば、揚眞操も祕曲の一つであるけれども、尙ほ石上流泉と啄木の二曲は更に高いものであつたことは明かである。

さて、啄木については、胡琴教録に「予問云、もし貴所にて啄木をひく時、御前の諸人を追出だすべきか。師説答云、もとも然るべき也。」とある。他の二曲の時も必ず人拂ひをせられる、況や啄木に於いては云々、と記されてゐる。それは然し、その彈奏の「故實を見、とられるからであるといつてゐるけれども、とにかく濫りにすべからざるは勿論、その尊重祕藏せられた程度は推して知られる。傳授また祕重慎嚴を極めてゐた。

これに對して長明の爲した所が如何に型破りであり、到底許すべからざる惡魔的な放埒
 輕率大膽な所業であつたかは明かであらう。(二九頁以下参照) 孝道が訴へてゐる非難は一
 として當つてゐないものはないことを我々は認めざるを得ない。又長明が「啄木と云ひけ
 る曲を數、反彈けり」といふのも甚しい異例で、例へば信西入道邸の管絃會に或人揚眞操を
 彈き滿座感涙を催した時、山城前司親平が今一度と所望した際、主の信西入道が眞向から
 反對して、「いかでか然る事あるべきや。我なからん時はさもあらばあれ。生きて侍らん
 限りは斯かる事な聞せ給ひそと云へり。依て一度にて止めにけり。」とある程である。(胡
 琴教録)又、長明の如き不埒者に誘はれて會同した人々を戒めてゐる言葉としても、そのま
 まに受取れる言葉に、次のやうなものもある。

云、管絃者いとしもなき者に相交る事を相構へてのがるべきや。然の如き人に一列に
 成立ぬれば藝能もはいしれぬ身も漸々に放埒仕也。能々用意すべし。もし又去難くて
 交居たれども打解くべからず。如_レ然の業物は祕曲などはおのづから習ひ得たるを斯

くなんと吹き弾く事のあるなり。たとひ主人の仰せなりとも可_レ然者忘れたるよしを
 申て、與_レ彼不可_レ合彈_一なり。何況於_三私所_一乎。

又云、管絃者は裝束をしつし、その振舞をしつべきなり。樂人などは沙汰に及ばず。
 たゞ人の管絃の道にひかれて所々に行きて放埒仕たるが多也。しかの如きなど申なら
 はれぬれば一列のやうになりて漸々に悪しきことになる也。物を好んでは、面目を正
 し名をあげ身を立てる事こそ本意なれ。悪しくしつれば身も人ならずなりぬ。藝能も賤
 しくもちなされて諸人に被_レ笑。おこんの事也。

又長明の所業をそのまゝ難じ戒めてゐるかの感を覚えしめる言葉に次のやうなのがある。
 云、習ふ譜においては假令きき得るきありといふとも専ら樂の元の譜を破るべからざ
 る也。

又云、給事禪門(信西入道)談云、譜に向はずして曲を教ふるはすなはち師の心にいら
 ざるなりといへり。われ小年の頃ある人にあひあふて蘇合四帖を傳へ受く。禪門此よ

しをきゝて問ていはく、受習はむ時、譜を開くやいなや。答へていはく、譜に向はずして空にこれを傳ふ。禪門云、然らば聞に及ばず。

もつとも藤原孝時は、先に述べたやうに、後鳥羽院には高倉院ほどに重用せられなかつた不満を含んで旁々後鳥羽院にいやがらせをしてゐるところもあり、又長明を教へた中原有安も、孝道の祖父から誤解を受けて破門された藤原博業の弟子でもあるそのために（文机談）、師承關係に於て根にもつ所もないとは言へないけれども、それを考慮の外においても、長明の爲した祕曲づくしの顛末は通念を以て十分に非議せらるべきことであつたことは、右に述べ來つた事によつても明瞭すぎることであつた。

しかるに、それにもかかゝはらず、先きには祕曲づくしの會に於て長明の演奏を聽いて身も世もなく感に入つた人々があり、又後には彼を辯護しようとする人々がある。それは何故であらう。又彼がともかくも揚眞操までも習得したとはいへ、習ひもせぬ啄木曲をやつてのけ、而も満座を息を吞んで感歎させたといふ腕前の奇異なる達者さは言ふまでもな

いが、その腕は彼が習練を重ねて自得したといふやうなものでなく、揚眞操をやつてゐるうちに「感にたへかね」、この千載の一会に「已み候なん事も且は無念に覺え」て、一氣呵成にやつてしまつたのである。而も彼はその輕率を自認しながら、「道にふける心ざしの切なる事」を楯に赦罪を請願してゐるのである。後鳥羽院もこれには御心中に御共鳴のふしもあつたらしく記されてゐる。

それは實に彼の並々ならぬ「好き」の一事のなした事にほかならない。この好きが彼を琵琶の名手ともしてゐたことは文机房隆圓がすでに書いてゐたが、又實にこの好きが啄木の祕曲をまんまと仕出かせ、人々をしてその以ての外の暴舉を恐れさせるよりも、感に入つて聴きとれさせ、「我も人もあらぬ世界に生れ、しらぬ國にきたりぬる心地して耳を驚かし目をそば立て」（目をそば立てといふのは修辭でなく、前述のやうに啄木の曲はその手に故實があつて「啄木を見る」といふやうにも言はれてゐた）させたのである。これは結果として不思議なことであつた。誰にでもやつて見よといつても誰にもは出來ない放れ

業である。それではどうして長明のやうな輕率がこれを爲し得たかといふことを、次に考へねばならない。「和歌の道さへ聞えければ世上の名人にてぞ侍りける」といふ、名人論だけでは理解できないことである。

ところが、ここに面白いことは、長明の仕出かしたその仕方も亦た、祕傳の中の一ふしに當つてゐることである。即ち胡琴教録に次のやうな説も見られる。

管絃者はその心まことに好かずとも好色を習ふべき也。その曲もよく聞ゆる也。

このやうな好色の「好き」については前述第一章の如くであるから附言を要しまい。

管絃者は立ち出づるよりよく爲てんかといふ見ゆべき也。

これは長明が琵琶を把り上げた時の氣ほひぶりをまさまさと想像させるものである。

然るべき會は此度ばかりと思ふべき也。

これは、長明が「さしもの千載の一會に心強くして止み候なん事も且は無念」とてやつてのけたそのことを言つてゐるものと見ていい。

殿下仰せに曰、當世に管絃のかぶとすべき人大方なきなり。藤井中納言定能こそ重代なり。且つは物よく習ひたる人なり。尤もその人たるべけれども無下に上手がらのなき人也。一日、中宮御方にて御遊びありき。ひそかに聞けば、かの卿云「のべたる樂は一返、急なる物は三返にて有べしと云々」このやう、おほきにうけざる事也。管絃と麻左とはかねて定め思ふべからず。時に臨みて興に入りて、いみじく興すれど興なくなれば之を略す。然らば自然面白き曲いできたれば數返もしてん。無レ興は一返にてもその曲の有やうによるべき也。かねて式をつくること、専ら道を知らざるに似たりと云々。此仰せ尤も然るべし。

この主旨も長明が興に入つて啄木の曲を數反やつたことそのままである。

又云、絃者常に音律を心にかくべきなり。以他爲主。以自絃爲客。仍て常に何レ調、常にきゝあはすべきなり。ゆめく我絃を本とすべからず。自絃の音にのみ着しぬれば我はあしからず覺ゆれど他の耳には極めて聞にくき也。

これも業わざより先きに音楽の世界に素捷く飛入つて、それに憑つかれ誘はれて、自絃は第二として彈奏してゐるらしい長明にふさはしい所である。

私は右に両面から長明のふしぎな仕方を明かにしてみた。彼は奔放放埒に仕遂げてゐる。さうせずにはゐられない餘りに彼は一途にやつてのける。そのやうな彼を阻むことはできない。又長明を我が強いと評する人もあり誠にさうであるが、彼の我は、自絃を主にするのでなく、却つて「以他爲主」であつて、音曲の世界そのものに誘はれとびこんでしまつて、自分の振舞を用心してゐたりすることの全く出来ない傍若無人さである。その點では、ものよく習ひ格にのみ固着してゐると非難された定能中納言と全く對蹠の極端さである。それ故見事に爲しとげてゐるとは言へ、それはまるでその時夢中にやつてゐること、後には何も残るべきものでもなく、到底輕率の謗りを否み得ないのである。實に淺薄空白なのである。彼が、いつも何かを狂熱して行つた後に残る薄つぺらさがこゝにもある。「秘曲づくし」の時も、彼は勅問を蒙つて初めて驚いて、しかもそれを強辯する。しか七強辯

しながら自らそれが「浮華」であることに氣付き初める。そして院が彼に朝憐を垂れ給ふらしい氣はひに出合ふと、もはや強辯してゐる自分のしらしらさに氣づき、却つてすつかり自分の底(淺い)まで見抜かれた氣がして、居堪れなくなる。彼は居場所がない氣がしてこそそと人の目からのがれ去る。さういふ所が文机談のその後の記事に讀まれる。

彼にはもと人の間に交らふべき我といふものもない。そして謂はば、樂譜なき音楽、さういふものが長明であつた。それは、嘗て寂蓮が顯昭に對して顯昭流の歌などは、「たゞ筆さしぬらしていと疾く書きてん」と嘯してみせたやうな才や、又「勅句百首、一時之間詠之」とか「賦百字百首、一時半詠之」(拾玉集)といふ如き慈圓のやうな才だけになつた、そんな才技に似てゐるが、それでさへもない。才といふほどの我もない。彼は己をそれによつて印すべき才能もなく、唯、しかし誘はれてゐる。(誘はれてゐる、とは親鸞がその大乘の信仰をこの言葉を以て述べたことがある)彼はみなしごでありながら、又歌の會といふやうな、彼を誘ふやうなものを必要とし、又自ら求めた。矛盾するやうな言ひ方だが、

さういふものゝ介添へや雰圍氣に誘はれてやつと形をとつて出てくるやうなそんなものである。「みなしごになりて社のまじらひもせずこもりゐて侍りし」(家長日記)長明が、しきりに會に出入して廻つてゐるのはそのためであつた。さういふことによつてのみ形を取り得るそんな弱いものである。しかしそれは純粹といふものゝ弱さとはげしさである。そして若し形をとり得る機に觸れるやそれは狂熱的に激しく一氣呵成に直下に形を捉へてしまふ。その勢のやうなものには却つて周圍の方が逆に誘はれる位である。そして一氣に矢のやうに捉へたその形は、威勢の方が形以上にはるかに強く見事で、跡そのものはとりとめないものである。その場合の雰圍氣を白熱的に緊張させて支配するが、それが過ぎた後には、突嗟に捉へられて居るだけで厚味も確さも整序もない徒勞の形のみが残つてゐるのである。それ故寧ろそれは作品などよりも歌合の座に於ける氣ほひがすぐれて居る。即ち會といふものゝ雰圍氣、人々の内には喪はれながらも、その會の底にけ流れ出ようとする詩のながれに、いちはやく誘はれて氣ほひ立つやうに興奮して一氣呵成に形へそれを捉へ

ようとする長明に、人々は緊張し瞠目して、彼等もその興奮について詩へ誘はれる、さうして世に知られたる「すきもの」の名を高くする。恐らく彼は和歌よりは跡の残らない音楽の方がすぐれてゐるであらう。しかし音楽も、長明には譜を残さない音楽であるといつた方がふさはしい。方丈記に「桂の風葉をならず夕には潯陽の江を想ひやりて源都督のがれをならふ。若し餘興あればしばく松のひよきに秋風樂をたぐへ、水の音に流泉曲をあやつる。藝は是つたなければ……」といふのは蓋し彼の眞風景の一端を語り得てゐるのであらう。然り、樂譜なき樂とは長明を譬喩するにふさはしいものであらう。

けれども、この、長明の仕事は、骨法なき人或は歌に熟しない未成品を作る人が、心足らず詞又足らずして熱心のみ先走りしてゐるといふやうなものと違ふ。長明の氣ほひ立つた興奮はそのやうなありふれたものでなかつたことは例證の數々を擧げてきたから、改めて長明の天分を言ひ立てることもあるまい。それでは、古今和歌集の序に紀貫之が稀代の詩人在原業平を評して、「その心あまりて詞たらず」と言つたやうな意味であらうか。私

は長明を業平へ聯想すること屢々であるが、併し、業平の場合は、なほ文藝文化の回復興隆期に心餘つたところの裕なものがとつてゐるかたちであつた。長明は正にその對蹠をなすであらう。長明の場合は、心餘るものではなくて詞ないのである。足らぬといふよりも詞も無いといつた方が當る。言ひ換へるならば、長明は詩の極光のみをすばやく眞直に矢のやうに見てしまつてゐるだけである。詩人は、普通その極光を見るために、或は見るものゝ装ひとして、それぞれに己を心廣く體胖かに養ひ満し、或はその満ちたる太平の表情として靜謐や躍動や、艶なる羞ひや美しい倫理のつゞしみや、いちらしい拗ねぶりや街ひや滑稽を示したりする。然るに長明に於てはそのやうな手だても反應表情もない。詩の極光を一氣に見抜いてしまつてゐるそれだけである。それは餘りに逸く詩神の郷家を見て踏み込んでしまつてゐるので、それを見る手だてや、その手だての豊かな羞らひなどを表情してゐる裕さへないのである。人間のとるべき詩の形など忽々に濟し崩しにされてしまつてゐるのである。併し彼の齒嚙みは又そこにある。餘りに詩の奥極に直行して踏み込んでゐる

ための悔いである。人間としてもつと躊躇ひ、もつと温い血を以て、のどかに或は切々と歌ふべきところが、彼に於てはその興奮の迷りに似合はず、唯砂を嚙むやうな索漠とした瘦せた形をしか成さないとところに彼のいらだちがある。彼は何か形を成すものを見出すや饑ゑたる狼のやうな蒼光りする目をむいてその形にとびかゝる。しかしこのやうな扱ひ方では人間の温い和いだ美しい形といふものは捉へられない。やはり餘りに貪ることとびつかれた言葉は、結局その跡に陋く汚い骨を残すのみである。長明が誰にもすぐれて敏く詩の奥極を一氣に見出で踏み込んでゐるといふ稀らしさは、又同時に彼の最大の不幸であつた。しかしこのやうな畸異さは、彼が時代の請子として生れ享けてゐた運命にほかならない。

時代とは結局このやうに人間を必死に踊らせて人間にそこに死ぬことを強ひて些かの餘裕も與へようとしなないのである。しかし若し現代のやうにやゝもすると評論家といふ人々が、己を恃み己を誇つて時代を論じたり、時代を己の力で踊らせようとしかけたりする

と、時代は忽ち冷然としてそつぽを向き、人はその時代が向けてゐる無表情な面に対つてひとり空轉してゐることに氣づくであらう。時代といふものは、ともかくも誘ふものではない、その誘ひに身を浸す者に宿つて活きるものであり、しかもそれを忘れて騙る者を忽ち跳ねつけて空轉させ、彼をして彼自らを腐り敗らせるものである。長明は「おとろへ」る世の誘ひに己を浸してその住處いよいよ狭く、わづかに生きる藝能のつくり得たるかたち益々淺く極まつて、激越のみ深く孤獨のみはげしく極まりつゝ、それが時代の彼への天命であるところの酷しさから一步も退かなかつた、めの不幸を、つぶさに閱歷しなければならなかつた。しかしそこに彼の孤獨な自負があつた。

四 和歌の無益

右に於て管絃に於ける長明を見たのであるが、次に和歌について見てみたい。前に長明の和歌に關するすきぶりについても既に多少述べたが、更に重ねて考へてみたい。

一般に好き人びとの間でよくあつたらしいが、長明にも「自讃」「自嘆」といふことがある。しかしそれも亦他の自讃(他の自讃とは多く自分の代表作を示すといつた程のものが多く)と一種異つてゐる。その例を無名抄の歌話の中から拾つてみる。

千載集に「隔海路戀」の一首が入つて無性に喜んだので、故筑州から「さるにてはこの道にかならず冥加おはすべき人なり」と、その「うるはし」い心を讃められたといふ話は既に前に紹介した。

次に、これも前に一寸觸れた「せみの小河の事」を擧げてみる。源光行の興行の賀茂社歌合に、長明は、月の歌に「石川やせみの小川の清ければ月も流をたづねてぞすむ」といふ歌を詠んだ。判者の師光入道は「斯かる小川やはある」と一蹴して負とした。しかし長明は「思ふ所ありてよみ」出したものだつたので心に収まらなかつたが、この歌合の師光の判は、一般にも受け容れ難い所が多かつたので、改めて顯昭法師に判を委任することになつた。さて顯昭は長明の歌を見て「石川も、せみの小川のこともきき及ばない。但し一

首面白く續けられてゐる、斯ういふ小川があるのか、その處の者に尋ねて後に決しよう」とそのまま判は預りとなつた。その後長明が逢つた時、せみの小川とは鴨川の異名であり、當社の縁起に載つてゐると告げたので、顯昭は驚いて、この歌を難ぜなくて幸ひであつた、この歌は全く「老の功」である、と讚めた。ところが事は之を以て終らず、鴨社の禰宜祐兼が嫉視的に之を難じて、かやうの事はいみじからむ晴の會か國王大臣の御前にてこそ詠むべきで、かゝる褻事けつじに詠めるは無念なることなりと言つたりした。併しそのうちに隆信朝臣や顯昭もその歌に詠むやうになつた。すると祐兼が又「長明はいみじく詠み出したと思つてゐるが、そのうちに誰が先きに詠んだやら誰も知るものはなくて紛れてしまふだらう」と語つた。然るに新古今集に長明の此の歌が撰入されたのである。長明はここに於て「いと人も知らぬことなるを、とり申す人などの侍りけるにや。」と喜び、「すべてこのたびの集に十首入りて侍るが、生死の餘執ともなるばかりうれしく侍るなり。但あはれ無益の事かな。」と言つてゐる。

次に、矢張りこれと似たことで、「榎の葉井の事」の自讃がある。正治二年土御門内大臣家の月例の影供歌合に、「古寺月」といふ題に

古りにける豊浦とよらの寺の榎の葉井に猶しら玉を残す月かけ

と詠んで出した。俊成がこれをきいて、「やさしくも仕うまつれるかな。入道（俊成自身のこと）が然るべからむ時取り出でむと思ふ給へつるを、かなしく先ぜられにたり」と頻に感歎したといふのである。「これは催馬樂の詞なれば誰も知りたれど、是よりさきには詠める事もみえず。其後こそ冷泉中將（定家）詠まれて侍りしか」と長明は述べてゐる。右の二話は人に先走りした事の自讃である。それを長明は思ふところありて詠みたるものといつてゐる。

その他又「艶書に古歌書く事」「歌の半臂の句の事」等も自作歌に關してではないけれども一種の自讃であつて、共に人に認められた話であり、一種の捷敏ていびんさの自讃である。

も一つ彼の得意の思ひ出となつてゐる例を加へてみよう。それは「會の歌にすがたわか

つ事」に述べられてゐることである。それは明月記にも見えてゐる建仁二年に院御所に行はれた所謂三體和歌の會である。院から六首の歌を、春夏はふとおほきに、秋冬はほそくからび、戀旅はえんにやさしく詠むべき由、もし思ふやうに詠み得ずば、その山ありの儘に申せよ、歌のさましれるほど試さんとの仰せによるものであつた。當時御所には「心にくからぬ程の人をばもとより召されず」それ〴〵當代一流の顔觸れであつたが、辭退申し上げる者多く、その座に連なつた者はたゞ良經、慈圓、定家、家隆、寂蓮と長明「わづかに六人」であつた。長明は、「ふとくおほきなる歌」として「雲誘ふ天つ春風かほる也高間の山の花さかりかも」「打ちはぶき今もなかなん郭公卯の花月夜盛ふけ行く」以下、「ほそくからびたる歌」「えんにやさしき歌」各詠進したのである。この時長明は寂蓮について或事を稱揚した後に、「人の徳をほめんとするほどに我がため面目ありしたびの事を長々と書きつゞけて侍る。をかしく。されどこの文（無名抄）の得分に自讃少々まぜても、いかゞ侍らん。」と氣まりわるげに、併し得意さを押へ難く書いてゐる。

これらの「石川やせみの小川」「豊浦の寺の榎の葉井」「三體和歌」等といふやうな事が、彼が人を出し抜き、又は面目を施した自讃で、これは例へば俊成が「夕されば野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」を自讃とし、俊惠が「三吉野の山かきくもり雪ふれば麓の里はうち時雨つつ」を自讃としたのなどは全く趣を異にしてゐる。しかも彼は、「思ふ所ありて詠み」出したと言つたりしてゐる。たとひ歌合といふ流行の中に於てとは言へ、彼の詠歌の狙ひ所が見えるやうな氣がする。建春門院北面歌合にも出詠して「めづらし」として勝を得た話を記してゐる。（同上）而も更に長明は直ぐその後「あはれ無益の事かな」とひとりごとを洩らすのである。この「無益」の自讃は、在原業平にも紀貫之にも、俊成にも、およそ文化成熟の人を貫く、まことに詩人の心底の自信であるが、俊成以後は絶望への傾斜が表面にきびしいのである。

尤も彼の歌話書なる無名抄には、和歌の觀念に就て、右と反對の實直な考へを示すやうな言説も見える。師の俊惠の説などを敷衍する時などである。又彼自身もとより一般の作

歌の通説も心得てゐる。しかし、そのやうな言説の間からも彼の眞面目は隠れなく現れてくるのである。

初期の知友であつた故筑州が、彼に懇々と戒めてゐる中に「歌よみ立て爲給ひそ」といふことがある。(「不可立歌仙之由教訓事」) 當て込み式の作り立てや歌枕秀句などで人の感歎を買ひ名を得んとするのを戒めたのである。これは必ずしも當時の一般の風潮から長明を護らうとして戒めたのではない。「其許などは左様な事をせずとも、天分自ら現はれて、世に認められる人なれば、決して斯様な眞似をせず、むしろ其許たちのやうなる人は、できるだけ人に知られぬやうにして、さし出る歌會にはあれは誰だらうなどと言はるゝ程にして、しかも心にくゝ思はれたるがよきなり。」と懇ろに立ち入つて忠言を重ねてゐる。これは故筑州が「歌の道其身に堪たる」長明の天分を知り、その天才的な詠みくちを用ひて、こゝかしこの會に「へつらひ」歩いて名をあげて喜びさうなのを、ひどく氣づかつてゐるのである。長明が左様な會に列らなつて「心には面白くすすましく覺ゆとも、必ず所

をきらひて、やうやうしき人に言はれんと思はるべきぞ」と忠告し、自然におだやかに好むやうにと、勸めてゐる。これは、長明が、事實前述の自讃のやうに、秀句好みや當て込みや、さういふものの成功を喜んでゐることや、又あまりさういふ意味の考へ過ぎの歌を師の俊惠から訂正されたり(「歌案じ過して失と成る事」)してゐるなどにも思ひ合せて、これらの裏に、長明の面影を伺ふことができる。俊惠に入門した時の俊惠の最初の言葉も、「歌はきはめたる故實の侍るなり。我をまことに師とたのまれば此の事をたがへらるな。そこはかならず末の世の歌仙にいまそかるべきうへにかやうの契をなさるれば申し侍るなり。あなかしこゝ、我人にゆるさるゝ程になりたり共、證得して我は氣色したる歌、よみ給ふな」とて、戒めてゐる。(「歌人の證得すべからざる事」) 筑州、俊惠共に、長明の或る危惧すべき天分を認めてした忠告であつた。以て長明の印象の一端を知ることもできる。

長明は、しかしこれらの忠告を別に拒否はせず一應受けとつて、自分も一かど宗匠風に、

題のこと、つづけがらのこと、故實あること、(しかし無名抄の「取名所様事」「取古歌事」などの故實談は、その前の「俊恵がすがたをさたする事」の連続で俊恵の説を踏んでゐる) 歌會の狼藉あるまじきこととか、和歌風體史などを説いたりしてゐる。けれども長明は、さうした一般的方面のことは適當に俊恵の説をとり又受賣りして間に合はせてゐる。俊恵といふ人は俊成とやゝ張り合つた形で、結局俊成の後を追つてゐるといふ以上に餘り出てゐない歌人であつた。俊成が俊恵を評した言葉に、「俊恵は當世の上手なり。されど俊頼(俊恵の父)には猶及びがたし。俊頼は思ひいたらぬくまもなく一方ならずよめるが、ちかちかも及ばぬなり。」といふ批評は先づ當つてゐるといつていいであらう。後鳥羽院も「俊恵法師おだしき様に侍り」と評し給うた。俊頼の革新的獨斷的な詩人の風貌は俊恵にはもはや認められないで故實家になつてゐたらしい。長明自身は、そのやうな俊恵に入門して學ぶところあつたとはいへ、彼の志は、やはり俊恵を越えて俊恵の父俊頼、更に經信、或は曾丹等の詩人の魂に通つてゐたことが無名抄によつて知られる。

その心持をかなり明確に語つてゐるのに、和泉式部と赤染衛門との勝劣を論じた條がある。長明は、和泉式部が道德的非難のためにその當代には劣して考へられたのであるが、併し和泉式部はまことの上手であるから、後々撰集にもその歌が多數選入されてゐると認め、又曾根好忠の如き、その當時には「人數にもあらず、圓融院の子日ゆきひの御幸に推參をさへして、をこの名をあげたる」異端者として有名であるが、その好忠の歌は「やんことなきもの」であると言つてゐる。すべてそれらは、眞に好ける者のことであつたのである。そのやうな「すき」と「志の深さ」を以て長明を惹きつけてゐるのは、前記のほかに、宮内卿、小侍従、賴政、道因などであり、俊頼と反對に、基俊などを「めづらしからぬ」人として意地悪いばかりにこき下ろし、俊成もそのとばかりを受けたりしてゐるが、その心の中には師の俊恵の物足りなさも間接に言ひこめられてゐる所がある。

長明の歌作の源泉はいつも、「すき」のはげしさにある。彼は「すき」の形づくる世界のくさぐさの材料に執して、故實にも秀句にも、何のくれ彼のくれの事々物々にも、「すき」

を立て得るものあれば、性急に、噪狂的に心を結びつけて、そこに、歌を仕立てようとす。彼は例へば、「古歌を取る事」に於て、「古歌をぬすむをひとつの故實とばかりしりて」取ることや、唯型の如くとることを難じて、古歌をとるにはむしろ「いかにもあらはにとるべし」といふ如きである。そして「今こんとつまや契りし長月の在明の月にを鹿なくなり」といふやうな輕薄露骨な本歌取りの歌をつくる。

それはなるほど「いかにもあらは」な歌を作つて、顔をつき出して見せてゐるやうな歌である。これは先の「自讃」の事を思ひ出させるであらう。又方丈記とその粉本として擧げられてゐる「池亭記」との関係にもこの癖はある。とにかくその顔にはもはや古歌など書いてなくて、又長明の作品さへも書いてなくて、長明の顔だけが目をむいて突き出されてゐるのである。いはば「すき」といふより外に作品などないところへ返つてしまつてゐるのである。この歌には歌は無い、といふ詭辯みたいなものである。或は、古の「すき」豊かな歌を見るとその口まねを思ひきりがむしろやうな仕方で眞似て、ほくほくと酔つたや

うに満悦して居れたといふやうな歌である。本歌取といふことは、二條良基の「近來風體抄」を以て言へば、昔は稀にして後鳥羽院のところほより盛になつたといはれてゐるその中にも、長明のは到底生じつかの取り様ではない。

右の歌に對する批評が残つてゐるが、又自ら長明の本領を暗示する一例として面白い。これは御所の歌合の時の詠出であるが、判者は誰であつたか、とにかく「此の歌はことがらやさしとて勝」つたのである。しかし直ぐ定家がそれを難じて、素性法師の原作歌にまゐる寫しのやうな甚しさを咎めてゐる。もし定家の「毎月抄」の言葉を以て言へば、此のやうに「全ながらとられ」た原作者は、「歿して後其人の夢に見えて我歌返せと泣く／＼悲しみ」訴へるかもしれないのである。右の二人の批評は、共に適評であるが、唯定家が、このやうな、模倣といふよりも寧ろ、傍若無人に和歌を踏み破つてしまつたものに對して我慢ならなかつたといふこと、即ち長明の仕業が明かであり、又同時に、定家ならぬその時の判者も此の歌が素性法師の名歌を露骨すぎる程に取つてゐることを萬々承知してゐた

筈だのに而も此の歌を披講されるや勝ちとさせられたそのことが、何か自然長明の詠み口の消息を語る一つの資料となつてゐるのが面白いのである。

ともかくも、思ふに長明に於ては、實際は古歌も故實も何も、彼の中味などに一つもなり得ないのである。しかるに西行法師などはあのやうに世を捨てた、そのことを最も獨自風に歌ひながらも、一首として王朝和歌的なものを以て豊かに満ちてゐないものはない。

山里は秋の末にぞ思ひ知るかなしかりけりこがらしの音

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里

山里は人來させじと思はねどとはるることぞうとくなりゆく

花にそむ心のいかで残りけむ捨てはててきと思ふわが身に

有り合せて引いてみても、西行の歌は王朝の詩情から出ようとして一步も出てゐないし、否寧ろそれが唯宮廷を去つて、孤獨の中に、ひとり王朝の心を温めてゐる感が深いのである。しかるに長明になると、前掲の歌のやうに、殆ど一首全部を、王朝の古歌の言葉を以

て埋めて身替りのやうに作り立ててゐながら、もはや中味は唯空疎寒淺である。しかし西行にも次のやうな有名な實話が山家集にある。時代はかういふ所にも見られる。

寂蓮、人々すすめて百首の歌よませ侍りけるに、いなび侍りて熊野にま

うでける道に、夢に、何事も衰へ行けど此道こそ世の末に變らぬものはあ

れ、なほこの歌よむべき由、別當湛快、三位俊成に申すと見侍りて、お

どろきながら此歌をいそぎ詠み出して遣はしける奥に書きつけ侍りける

すゑの世にこの情のみ變らずと見し夢なくばよそに聞かまし

この、末の世の、歌が歌にならず、歌を詠むに難い崩壊が、西行にも迫つて來てゐたのである。しかし尙ほ西行の日にはまだひとり守つて歌ひ得る内實がつながり得てゐた。俊成も、出家はしなかつたけれども、西行と同じものを感じてゐた。右の西行の夢の中に、俊成があらはれて、「此道こそ世の末に變らぬもの」と諭されてゐるところを見るなど、この知己の二詩人が、運命を共にしてゐるさまが鮮かに浮き出てゐる。

俊成にも、不思議に右の西行のやうな夢が傳へられてゐる。

俊成卿老後になりて、さても朝暮歌をのみよみゐて更に當來のつとめもなし。かくては後生いかならむとなげきて、住吉の御社に一七日こもりて此ことをなげきて、もし歌はいたづら事ならば今より此道をさしをきて、一向に後生のつとめをすべしと祈念有りしかば、七日に満する夜、夢中に明神現じたまひて、和歌佛道全く二なしとしめしたまひしかば、さて此道の外、別して佛道もとむべからずとて、いよいよ此道を重き事にしたまひしなり。(正徹物語)

俊成が千載集を撰ぶ時、西行は歌を送つて

花ならぬ言の葉なれどおのづから色もやあると君拾はなん

と歌ひ、俊成之に返して

世を捨てゝ入りにし道の言の葉ぞ哀も深き色は見えける

と歌つてゐる。心を同じくしたこの詩人が消えなむとする詩心を信賴し合ひ温め合はうと

していたはり合つてゐる姿が偲ばれる。後鳥羽院もこの二詩人には殊に御回想が深かつたらしい。御口傳に「釋阿(俊成)はやさしく、ゑんに、心もふかく、あはれなる所もありき。殊に愚意に庶幾するすがたなり。西行は、おもしろくて、しかもこゝろに殊にふかくあはれなる、ありがたく、出來しがたきかたともに相兼てみゆ。生得の歌人とおぼゆ」とは、正に王朝的歌人の仕立てであることを示してゐる。但、俊成は西行に後れて宮廷の内に残つて王朝和歌を守つた故に、その發想は出家してしまつた西行よりも苦しいものがあつた。そして却つてその歌は乾燥し來りつつあつた。

俊成の子定家も、毎月抄に

元久頃、住吉參籠の時、汝月あきらかなりと、冥の靈夢を感じ侍りしによりて、家風にそなへんために、明月記を草しをきて侍る事、身には過分のわざとぞ思給ふる。

と前二者に似た夢を見た。そして前二者よりも和歌への自信ありげに見える。しかし定家に至つては、「汝月あきらかなり」とは、心安んじた覺悟ではない。彼が後々家風にそなへ

んために、あの大部の日記を晩年まで書き続ける決心をせねばならなかつた心底には、父俊成以上に運命の危惧が迫つてゐたといはなければならぬ。「世くだり人の心おとりて、たけもをよばず、ことばいやしくなりゆく。いはむや近き世の人は、たゞ思ひえたる風情を三十字にいひつゞけむことをさきとして、さらにすがたことばのおもむきをしらす。これによりて末の世のうたは、田夫の花のかげを去り、商人の鮮衣をぬげるがごとし」「おやのをしへとては、歌をひろく見、遠く聞く道にあらず、心よりいでてみづからさとものならとばかりぞ申侍りしかど、それをまことなりけりとまで、たどりしることも侍らず」(近代秀歌)といふのが彼の本音であらう。

五 回天の雅遊

長明は無名抄の「近代歌躰事」の中で、當代の歌を語るために、和歌史を縷々と語つてゐるが、遂に己自身の詠作について述べ及んでゐる中に、次のやうに言つてゐる。

人のことはしらす、身にとりては、中比の人々あまたさし集りて侍りし會につらなりし人の歌どもを聞きしに、我が思ひよらぬ風情はいと少かりき。わがつづけたりつるよりは、是はよかりけりなど思ほゆる事こそ有りしかど、聊も心のめぐらぬ事は有りがたくなん侍りし。

しかるを御所(院の)の御會につかうまつりしには、ふつと思ひもよらぬ事をのみ人ごとによまれしかば、このみちは、はやそこもなく、きはもなきことになりけりとおそいしくこそおぼえ侍りしか。

これは長明が自分自身を見抜かうとして、苦勞して書いてゐる文章の一部分であるが、和歌といふものの負うてゐる過去の豊かな内實がもはや些しも中味となり得ないで、王朝末期詩人達の釋切れようとする最期の息の中に、幻のやうに、吐息として一時に吐き出されてゐる和歌の、「おそろし」い風光が、誰にも増して鮮かに彼の目に映つてゐるのである。

私は、後鳥羽院が王朝文壇の最期を、必死に支へようと遊ばされた、もの狂ほしいばか

りの御執心と御激越とを、お思ひ申し上げるに堪へないものがある。王朝文壇の成熟はいふ迄もなく延喜天曆を経て、所謂後宮女房作家の活躍し、公任の新撰髓腦が書かれた時代を以て言つていい。延喜の帝の御宏志は遂にそれをひらいたのである。王朝文化は藤原氏の極盛と支持とを除外しては考へられないけれども、それはあくまで皇位の莊嚴じやうげん以上ではなかつたといつていい。もとより藤原氏は榮華を恣まにして、その最榮者道長の極めたものは、例へば法成寺の如き、「榮華物語」の傳ふる所、もし今日その遺跡が残り得たとしたら絢爛無比のものがあつたらうけれど、その法成寺の法要に於ても道長の盛儀は帝のそれには遂に勝らなかつた由を傳へてゐる。私が新撰髓腦を言ふのは、この髓腦のやうな（前例はあるにしても）出現といふことが、文壇的成熟を證してゐる一つと思ふからである。公任は拾遺和歌集に對して拾遺抄を私撰し、これが時の人の弄びともなり、又「ちかき代の人の歌よむ風體、おほくはたゞ拾遺抄の歌をこひねがふ」（古來風體抄）と俊成が言つてゐる。而もついでに同じく俊成の説を借れば、後拾遺和歌集には作家は溢るゝ如く、風

體は「すこしさきく」の撰集に見合はするにはたけのたちくだり」たるものとなり初めてゐる。定家が寛平以往をまねぶといふのも意味がある。この裏には道長を頂點として自壞を始めた藤原氏の、經綸節度を失つた精神の頽廢が伺はれ、しかしそれと同時に藤原氏を抑へて院政による王政復古の活潑な精神が興り、歌壇にも新世代の生新の氣が芽生え、白河法皇以後勅撰の事も頻りではあつたが、この變動期に擡頭した動亂勢力とも言ふべき地下武家が、思ひの外に唯藤原氏と取つて替つた形となつて、殊に、平清盛が藤原氏を模倣して一切を投じて頽廢へ急がしめた、極度に度を失した變態的文華と、將軍的權力（藤原道長にも此の萌芽があつた）を以てする未曾有の暴逆（平家物語はそのやうな末季的な「例なき」暴逆を數へ立てゝゐる）とは、武士を養ひ給うた皇室御自身をまで此の暴風の中に巻き込み、擬藤原的文化の頽廢崩滅と共に、王朝文化は根のゆるんだ大木の倒るゝが如くに終焉の緒についてゐた。

かういふ終焉の運命に立つて天皇方は一つには暴逆者への天誅、一つにはみやびたる王

朝文化の精神の防護と創造に氣ほひ立ち給うたのである。

後鳥羽天皇は、後白河法皇の平家滅亡御成功後、一旦はとにかく天下に事利いで動亂に
けががついたかに見えた時、法皇の御寵愛をうけて、御年四歳にて即位遊ばされ、「法皇
かくれさせ給ひにし後（建久三年、但し同年頼朝幕府を開く）は、帝偏に世をしろしめして四
方の海なみ靜に、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民やすくして普き御うつくしみの浪秋津
島のほかまで流れ、しげき御惠筑波山のかげよりも深し」とは増鏡の文飾であるが、とも
かくも小康が訪れた間に、早熟の御成長を遊ばされつつあつたのである。しかし頼朝に尊
皇の志あり「日本は神國なり」との表白もしたが、武家の基礎は又この間に固まつて、「地
頭職にわが家の武士どもをなし集め」「日本國の衰ふる初はこれよりなるべし」と同じく
増鏡の作者が記して居る。天皇の幕府に對する御憎悪は早くも萌してゐた。寧ろあはれに
「山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも」と院に對して詠じ奉つたこと
もあつた實朝は、兄に次で討たれ、關東調伏のための最勝四天王院も一旦壞ち給うたが、

それらの陰に於ける北條氏の僭上は甚しく露骨に表面化して來たのであつた。しかもなほ
「奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん」（承元二年住吉御歌合）とは、尙
ほ後鳥羽院のおほどかな御自信であつた。

院の御精神の中には、かの萬葉集大の厚富雄偉なものがあつた。地下民間の聲も交はり、
女流文人達をも心して集められ、（家長日記）傍らに長弦の梓の弓の音も響き、大化改新の
前夜のやうなはかりごと御抱負さへその中には含まれてゐたといつていい。これは唯の
御奨励や一個の御もの好きなどでは全くない。

天皇は十九歳を以て御讓位、不世出の御天分と不拔の御志を中心に、「御心ゆく限り世
をひびかして遊びをのみぞ」し給うた。水無瀬宮の御雅遊を初め、「艶にをかし」き様々は
諸資料の豊富に物語つてゐるところである。建仁の千五百番歌合には「おさまれりなほも
たえせじ敷島や大和しまねも動きなき世ぞ」と判詞の御製があり、元久二年三月二十六日
新古今和歌集竟宴に、院の御製は「いそのかみふるきを今にならべ來し昔の跡をまたたづ

ねつつ」といふのであつた。新古今といふ命名にも経緯があつたが、要するところは「延喜の昔思しよそへられて」古今和歌集へ迫らんとする御意は溢れてゐる。この撰集には院親ら度を越える迄の御心用ひがあつたし、一應の御撰定後も御修撰は止まず、遂に承久の後、隱岐に御遠島の後まで御精撰を止め給はなかつたのである。その御精撰本は今日に形を存してゐる。院の御雅心はひとり和歌の上のみではなく、恰も王朝文化が御一身に一時に花開いた觀があつた。和歌、故實、管絃、蹴鞠、相劍、鍛刀、武技、弓馬に互る多藝多能の院の下に集る文雅藝能の人も夥しく、「たとひ何ばかりの事のいたづらわざも、事一つに極めたる人の共事にひかれて、こよなき御恵ども」賜りたる旨を家長日記に傳へてゐる。その後鳥羽院の藝能壇は前後無比といふも過ぎることはない。中に歌壇の盛況は全く空前であつた。建仁元年の千五百番歌合、和歌所の再興、元久二年に一應成立した新古今和歌集の編纂等、その一つをとつてさへ悉く白熱の光を感じしめられるものである。院を中心に歌壇の醗酵して行く經過、やがてそれが新古今集撰集へ動いて行く過程は源家長日記にま

ざまざと描かれてゐる。連歌が盛んになり、有心・無心の、柿本・栗本の衆が競詠したのも此の御代である。

さて新古今集竟宴の年の六月十五日の水無瀬宮の詩歌合に於ける院の御製は、有名な

見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕は秋となに思ひけん

といふのであつた。この幽艶豪壯とも評し上げたいほどの御觀遊には、院の率ゐ給ふ文壇の精神が擧げて籠められてゐたし、それは總じて院の偉大な御抱負の象徴でもあつた。茲には、

夕べは秋となに思ひけん

と、舊い文壇へ勝らんとし、變革をさへ迫らんとし給ふ創造の御氣魄が籠められてある。併し何を變革し給はうとするのであらうか。實は何をも變革などしない、親しく身を置き給ふ歴史の上から言へば、唯々王朝精神そのものの高揚といふほかの何ものでもない。

見わたせば山もとかすむ水無瀬川……

王者の御精神を己に負うての御身構へである。「見わたせば」といふ言葉は必ずしも帝王の御用語に限らないけれど、上古來の「國見」の傳統をもち、至尊の御詞として殊に増して大らかに、力と廣さと厚みと重さをもつ、品格高い歌詞である。この壯大な御身構へに對して展開する「山もとかすむ水無瀬川」とは、もはや何らの描寫などをしない、おほやうさの中に、燦々たる美神の幽艶なる息吹きが熱く傳はつてゐる。それは天平佛の充溢した熱い息吹に似て更に、「花をめで、鳥をうらやみ、かすみをあはれば、露をかなしぶ云々」(古今和歌集序)と述べた古今和歌集の詩人の流麗な詩情を併せて、黄金の響きを以てのべひろげられたと言つてもいい。さういふ王朝の詩情の統流、ここ水無瀬川にうち注ぎ來り、かすみと立ち渡つてゐる氣はひもひたくとうかゞはれる。しかし若し又、唯に王朝の傳統を言ふのみならば、倭成あたりの歌を以て飾れば足りる。唯昔に倣つて「夕べは秋」ぞと踏襲して歌ひ續けて足りることである。それを「夕べは秋となに思ひけん」と覆して、しかも尙ほそれは何らの變革ではなく、たとひ秋夕の哀愁寂寥も、まことは春光の王

40.03774
36.

朝の詩心から逸脱してはゐない。而もやはり「夕べは秋と何思ひけん」と風雅の奥底を衝かうとし給うた所に、私は何か魂がその意匠を脱いであらはにとび出し始めたやうな驚きに打たれるのである。もはや唯におほやかなる御發想でない。院に切迫した或る運命の豫感、王朝發想の極限への昂然たる決心と共にうたた哀れのしみるものを覺えさせられる。すでに「見わたせば山もとかすむ水無瀬川」と春光のどかな發想が、下句「夕べは」と意表を破つて轉じてくるところに、私は卒然と日暮の哀感の一時に漲りかかるのを覺える。そしておほどかにひろびろと大觀された心景は、そのまま又忽ち、見渡せど風光茫茫として見透し難く霞に籠れるたゆたひへ引き入れられてくるのを否みがたい。

王朝の美の精神を最極に收約發想して幽艶豪壯なる雅遊の心と、終焉の運命感の前にその美を最極に放つたかの如き哀感とを、表裏相轉じつつ一つに含むこの御歌が、新古今和歌集竟宴の後、同じ年に詠ぜられてあることは、一種の思ひなき能はぬものであり、王朝文壇の最期を負ひ給うて最も哀しく熱く愛執し給うた後鳥羽院の御製として殊に思ひ深く

拜される。不拔高邁な御精神は、嘗てない文壇の盛觀を打ち樹て給うたけれども、それは却つて昔の日の、延喜の時代の文壇興隆の生新さではなく、又道長時代の唯に榮華に満ち足りた望月の如きのどかなのでもない。もはや文壇は霞みにこもつてゐるといつてもいい。しかも愛惜し給ふ院の御夢は、霞の中に一入深くこめられてゐる。もはや此の日きりと、その日その時の雅遊が惜しみ且つ盡されてゐるやうである。限り無く熱い、そして精髓になつてしまつた美しさが、その自らの味ひの限りを自ら味ひ盡さうとしてゐる。夕べは秋となに思ひけんとの強ひたる誇りと、その中に嬌々とひゞき渡るものは、却つて春の誇りの人へのみ哀しからうとするものである。しかしかの王朝の怨情などではない。或は終焉せんとしてよみ返りくる若さへの愛執でさへあらう。これは形を異にしながらも、俊成や定家の中にも激しく見出されるところである。

院の、文壇への過度の御愛執は前掲のほか到る所に伺はれるが、新古今和歌集の撰集に於けるその御身の入れ方は、撰者等の甚しい反感をさへ咬るほどであつた。「水無瀬山わ

がふる里は荒れぬらんまがきは野らと人も通はで」と詠ませ給ふ今ははや遠島隱岐の御孤棲の御境涯の中にも、尙も昔日の文壇の記念品たる新古今和歌集を御手放たず繰り返し精撰し給うて、「あらためみがけるはずれたるべし。あまのうきはしのむかしをきゝわたり、やへがきの雲のいろにそまむともがら、これをふかきまどにひらきつたへて、はるかなる世にのこせとなり」など御執心し給うた御跋文は、單に和歌への御愛着といふよりも、昔日の文壇追憶の御妄執のごときものを感じしめられる。

この王朝文壇の終幕が下りた時、詩人達はどうなつてゐたか。畏くも後鳥羽院は事志と違ひ給うたとは言へ、王者として嘗てない御恥辱（増鏡、新鳥もり）のうち孤島の寒寂に詩魂を悲憤して抱き給うたし、定家は父俊成や西行等が王朝文壇の最後を守らうとしたやさしさなどはもはや生れながらにして持ち得ない（後鳥羽院御口傳）、時代に堪へ得ぬ痼癖を以て、何か夙くから後鳥羽院文壇の文運を透視してゐる激しさ（その激しさには彼自身身に苦しみを覺えつつ）で、院に反撥申し上げてさへゐた。院御遷幸後の定家の冷徹さと、

呆けたやうに連歌に心を遣つたり、ひとり心に食ひ込んだやうな有心體和歌の提唱など、和歌の終焉の整理をしてゐたとも言ひ得る。院はさうした定家の上にも、はるかに高く弘い萬葉新生ともいふべき運命の責任を以てやさしく臨まれてあるが、定家の表情に對して食ひ入るやうな眼を注いでゐられる（後鳥羽院御口傳）ところには、常に定家の冷血とか院の寛大とかといつてゐられない、同時代を生ききる詩魂の切り結んだ凄まじさを感じしめられる。これに比すると前世代の俊成西行の苦しみには未だ思ひのどめて居れるものがあつた。併しやはり、西行は文壇に戀々として居り得たとは言へ、出離を行ふることによつて、生得の詩人のこの時代にとるべき身振を示して居り、大原三寂はもとよりであつた。俊成の如きも、言つてみればあれ以上にどうともならない王朝文壇に唯命長く、併し精根を盡し果して奉仕してゐたのであつた。總じて王朝文壇の運命はどの詩人の胸にもはつきりと聞え、その運命を覺悟し、復讐を誓ひつつ、そして異常な決心を痛味覺えるまでに強ひられてゐたのであつた。俊成や定家のやうな弱根（古來風體抄、近代秀歌）を些かも漏らす

まいとされてゐた院の（後鳥羽院御口傳）中にも、この決心の異常さは息苦しいまで何はれる。はつきり言へば、文壇人には文壇がその生命を托し己を成育する所であると共に、その文壇への訣別の決心が夫々に、厳しく必要であつたのである。その決心した身に於て和歌があやしいまでに光芒を放つたのであつた。鴨長明の決心もはつきりとここにかかつてゐた。

しかし長明のとつただならぬ發心と行動と言ふ前に、私は更に遡つて夙く文壇の成熟を代表する源氏物語そのものの中にもひそんでゐる、一つの決心を既に見出すことができるのである。光源氏といふ如き王朝文化の髓から生れ出で成熟を遂げた物語構想が果された後、作者が、更に宇治十帖を書いた事は様々の疑ひを醸してゐるが、私は宇治十帖の特異さを一度は疑ひつつ、遂に浮舟といふ女主人公の不思議な姿を知るに及んで、私は斷じて源氏前篇作者の同筆なることを信じた。その詳論は他に記したいが、浮舟といふ若い女性は、遂に戀も命も過去も未來もすべてを一擲し拒否して、都離れた小野の里に、形

を尼形に變へて、(しかし決して道心者でもない)ひたすらに緘黙を守つてゐる、といふところで源氏物語は擱筆されてゐる。人は前篇の構想の記憶や、浮舟に絡んでゐる薫大將や匂宮といふ男達にまだ何やら前篇の餘情をのみ酌んで、浮舟をもそのやうに色づけて見ようとしてゐるが、浮舟の眞姿はさういふ目差(まざ)の一切を、身を以て拒絶しきつてゐる。さういふ孤獨の浮舟が將來どうなるか、作者は屢々そのことに觸れて案じつつ遂に浮舟の意固地なまでの行動に關し、作者自らそれ以上筆を加へ得ずして筆を擱いてゐる。このもはや何ものでもないといふ不思議な人間(後で西行や鴨長明にそれを見る)としての浮舟の現出は、前篇に王朝の髓心を構想し得た作家にして初めていちやく捉へ得たところで、即ちここには、王朝文化の最成熟と共にその權勢の極が自壞の傾斜を起因してさへもゐる藤原道長的なものを考へる時、詩人のいちはやい暗示の深さがある。又かの更級日記が、あの心醉措かざる王朝文學世界への詩人の興(き)ざめからのひそかな回想録として記された、一種の詩心の抄録であつたことも、注意されていい。これらの作家達の決心は、一つには延

喜の古今和歌集の詩人達の上昇的な決心を滿帆に孕みつつ、而も詩人の斷絶を己れに決心する覺悟の如きものを語つてゐる。所謂歴史的事件が漸次時代の變移を示す前に、詩人は夙くも時運を己れに感取して、表現してゐるのである。勿論、源氏物語出でて、この作家のひそかに抱いた決心を知らぬ阿流者達は、續々と無數の物語作品を書いて、物語世界の盛榮に加はつてゐると思ひ込んでゐたらうし、又定家の後裔が宗匠めいて今の世の歌は寛平以往にもいたく勝劣なしなどのどかなことを考へて展覽會式の歌作法を得々と述べてゐる(爲家「詠歌一體」)如き、既にその時代を過ぎて取り残されてゐることを氣づかぬうつけ者の間の抜けた、しかも合理主義的文壇といふものは、何時の代にも存するのである。しかし詩人(私のいふ)達は、たとひ如何に自ら口に永遠への祭文を唱へようとも、自分で自分の最期を見きつて、己の身にかけて詩を行じてゐるのである。文學は又これだけの決心と行とを怠る者をば遠慮なく食ひ荒して過ぎ去るのである。文學史といふもの、總じて歴史といふもの、唯年代を追うて連なる筋道を求めて記して纏めたりしてゐると、そ

れは文學が食ひ荒して捨てた残滓だけであつて、詩人は文學史家の目などからは遁れて地獄か天國かをさまようてゐるのである。

長明の詩人的決心は、もはや文學史家が主要資料として取り上げる慣ひにしてゐる和歌の作詠などにはなかつた。そして後鳥羽院の御詩魂との深い默契がその中にあつたのである。長明には後鳥羽院のあの盛大な歌壇すらも、「ふつと思ひもよらぬ事をのみ、人毎に詠まれ」たとしか見えてゐない。そして彼自身夜晝奉公怠らなかつたその華やかな歌會を、「はやそこもなくきはもなきことになりけり」と見てゐる。事實、後に正徹は「風あらしきもとあらの小萩袖にみて更行月にをる白露」といふ定家の戀歌を「此歌はふつと我身を題の心になしてよみたれば、待といはねどもまつ心きこえたり」といつてゐる。(正徹物語) 併し長明の述懐は長明自身の、運命への劫せきえを示してゐる。私は長明ががたがた顛へてゐる心の底の姿を想像する。長明はこのことを述べた後、その自ら見出した己の世界の空しさに堪へかねるが如くに、その文章につゞけて、恰も一筋の蘂を掴まんとするかのや

うに、歌作の心得や何やを述べてゐるが、その一つ一つがもはや取りとめのないところへ行つてしまつてゐる。すなはちこのやうな「ふつと思ひもよらぬことを」詠むのは、骨法ある人の境に入り峠を越えてのち有るべきことであるなどといつてみたり、それすら猶爲外せば聞きにくき事多く、況や覺束ない人間の歌はかたはらいたい歌となるか、或は又詠まんとするほどに果ては身づからも心得ず、無心所着の歌となる、といつたりしてゐる。これは余りに末の世の歌を見極めてしまつた果てに自らも一度歌を何とかして食ひとめておかうとする辯護である。しかし事實は長明のそんな辯護によつてどうなるものではない。又、當時歌壇の誰もがそれに縋ることによつて歌運を信じてゐようとしてゐた「幽玄」といふことについても、「幽玄などと先づ名をきくよりはやまどひぬべし」と人のもてはやす幽玄にも長明はもはや信じも便乗もしない。

そして結局彼が最後に何か心中信するごとく興奮の口調を以て述べてゐるのは、たゞ「心ざし」といふことであつた。長明は「ふかき心ざしをつくし」といふところに、漸くかす

かに何か救ひを見出し得てゐる。しかし「こころざし」とは豊かな肉につつまれて言つてゐる言葉でなく、肉など剥けてしまつて、魂だけが顔をつき出して吹き曝されてゐる言葉である。實ははや意匠も何もなくなつて、「こころざし」などといふものだけをいたはつてゐるにすぎないのである。しかし私はふとここで「匹夫不可奪志也」を思ひ出したりして戸惑したりするのである。

六 かたち

それでは長明自身の和歌とはいかなるものであらう。前にも初期の和歌や若干の自讃歌を掲げたことがあるが、茲に年代の明かな、正治二年、即ち和歌所寄人に召される前年、再度百首和歌に、仰せに従つて長明も奉つた各題五首二十題の歌がある。先づ第一首から少し引いてみる。

霞

春風のはらひもあへぬ嶺の雪をまづ消つものは霞なりけり

これは、もはやこれ以上しやうのない退屈な歌である。而もそれだけにこけ嚇しなつづけぶりを見ることはできよう。

はれやらぬ心の空の朝霞雪げをこめて春めきにけり

同じである。「はれやらぬ心の空の春霞」又次の歌の「心もかすむ」など、長明の好んで用ひる言ひ廻しであると共に、長明の心の中のどうともならぬ退屈が、この持つて廻つた言葉の下で欠呻を嚙みしめてゐるといつたものを感じさせる。

故郷にかよふながめの道とちて心もかすむ春の山すみ

益々念の入つただけのものである。西行などの流でもなく、唯の一般流でも満足しない珍しい持つて廻りである。

鶯

鶯もきてとがむなり梅の花たちよるばかりありし袂を

萬葉末期以來の文人の歌を見てきた人にはかうした歌が、和歌の成れの果ての感を催させることを否みえまい。

花

まがへ來てあらぬ梢を見つるかな雲こそ花のしるべなりけれ
これも同じ。次の歌などは萬葉集の沙彌滿誓の「世のなかを何にたとへむ朝びらきこぎゆく船の跡なきがごと」の本歌を知つて讀む人を啞然たらしめるであらう。

これもまたなににたとへむ朝ぼらけ花ふく風の跡のしら波

五月雨

とにかく月に心ぞなぐさまぬ鏡捨山のさみだれのころ

雪

越えぬべく雪の白波たつた山ひかりはよはに消えむものかは

これらの歌を見てみると、長明が、本心などなくて、古歌を踏み汚しながら何やら汚い氣

持がする位輕薄に「歌よみ立て」てゐるのが感じられる。

草 花

小萩原花にも色やうつるらむ物思ふ袖の露のゆきずり

王朝風の大らかな趣向などでなくて、そんなものの地を拂つて失はれてしまつた跡に無理にも模造品を作り立てようとするとき、つさが長明の歌の身上である。

前に擧げた二十歳代の頃の、あの形ない憂さに物思ひ狂つたやうな歌の後が、こんな形の歌になつてきてゐるのである。それは、混沌の後に落ちつきが來、又は形が整つてきたといふべきやうなものでなくて、實はあの若い時には混沌の姿を以ても尙ほ持たうと希望され得てゐたものが、跡もないものになつて、唯或勢で、歌になる言葉といふやうなものを捉へると、其の鬼も角も「形」であるものに執つ着き、しがみついて、離すまいとして、鬼も角も何か歌のやうなものに仕立てようとする、或はそれを歌と信じて置かうとする、さういふ空しい徒らだけが是等の歌をやつと支へてゐるといつたやうなものである。この

やうな歌ひ立てが彼の「こころさし」のせいぜいの表現である。
尤も右の百首歌の中にも、

暮

山がつの野がひの道になれにけりおのが心とかへる春駒
賤の男が山路をいづるおとすなり爪木の下に睦語りして

山路

夕されば山路にわびぬわけのぼる雲よりおくに瀧つせの音
有明の月だに見えずなりにけりひはらが下にみねの通ひち

などは僅少ながら王朝和歌の水準に並ぶものであらう。もう一首、同じき正治二年の院當座歌合に

枯野朝

見るままにかつ消えてゆく月の色を枯野の末に残すあさ霜

など。しかし斯うした詠出は、彼の歌の中に、自讃ともなつてゐないし、又それ以上發展もしてゐない。新古今和歌集には例の「石川やせみの小川」の歌をはじめ十首撰入されて、長明も「すべてこのたびの集に十首入り侍りし、是過分の面目」(無名抄)と言つてゐる。試みにその歌を見るに、

秋の歌とてよみ侍りける

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞ我からの露の夕暮 (巻第四秋歌上)

月前松風

ながむれば千々にも思ふ月に又我身ひとつの嶺の松風 (同)

八月十五日夜和歌所の歌合に海邊秋月といふことを

松島や鹽くむあまの秋の袖月はもの思ふならひのみかは (同)

釋中夕といふ心を

枕とていづれの草に契るらむゆくをかぎりの野べの夕暮 (巻第十釋旅歌)

かたち

詩を歌にあはせ侍りしに山路秋行といへることを

袖にしも月かかれとは契りおかず涙はしるやうつこの山こえ (同)

題しらす

頼めおく人もながらの山にだにさ夜ふけぬれば松風の聲 (卷第十三 戀歌三)

題しらす

ながめてもあはれと思へ大かたの空だに悲し秋の夕ぐれ (卷第十四 戀歌四)

和歌所歌合に深山曉月といふことを

夜もすがらひとりみ山の槇の葉に曇るもすめるありあけの月 (卷第十六 雜歌上)

身の望みかなひ侍らで社のまじらひもせで籠りて侍りけるに葵をみてよめる

見ればまづいと涙ぞもろ葛いかに契りてかけ離れけむ (卷第十八 雜歌下)

鴨社歌合とて人々よみ侍りけるに、月を

石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ (卷第十九 神祇歌)

新古今撰入歌は「兼載雜談」には、他の公卿諸大夫は五百首千首づつ出されたのに長明はたゞ十二首出したのがそのまゝ十二首ながら入つたといつてゐるのに従へば、現存者の歌は凡て自薦の中から爲されたもののやうに見えるが、さうばかりでもなく自薦以外からもその人の歌の選び取られるといふ場合もなかつたとは言へまい。しかし、ともかく長明が僅か十二首しか自薦しなかつたのは心あつてのことでもあらうし、又一々の歌が傾向相似てゐるのも偶然ではない氣がする。しかし何といつても他の著名歌人の歌數に比しては甚しく少く、又兎も角も十首も撰入されてゐる當代の歌人として春の歌に一首もないといふことは新古今集中における影は益々薄く、武田博士刊の隱岐本新古今集の各歌の上に書入れられてゐる撰者名を相當に信じてよいとすれば、右十首のうち「ながむれば」が五人（異本四人）、「見ればまづ」が三人（異本四人）、「松島や」が異本に三人、「夜もすがら」が二人、「枕とて」「頼めおく」「石川や」が一人、「袖にしも」「ながめても」の二首は撰者名が無い。後鳥羽院御一人の御撰入であらうか。尙ほ、「秋風の」「頼めおく」の二首は隱岐に

於て後鳥羽院によつて除かれてゐる。概して言へば落窶たるものである。そして一首として前掲の「暮」「山路」「枯野朝」等に見えたやうな歌の筋はなく、十首が中の四首は字餘り歌であり、他の歌も何だか字餘り歌でもあるかのやうな節調を感じさせる、何やら調べ（當時の歌壇の生命とした）に乗つて居れない、といふより、調べを迂り越えた長明の顔が、一語一句に汚く濁つて寫し出て、到底歌などになりやうもない呼吸だけはげしくたたかつてゐる。これがあれほどに將來を期待され、自讃し、歌壇にもその位置を重く認められもしてゐた長明の、その活動期に連なつて撰ばれた新古今集撰入歌とは、誠に奇妙な結果であらう。因みに後鳥羽院の御口傳の中に、當代の歌人評があつて、和歌所に列した人々の御批評がある中に、長明のことは全く見えてゐない。和歌所を辭した後も長明を惜んで更に出仕をすすめ給ひ、傳説としても方丈庵を再度御訪らひにもなつた院のその歌人評の中に見えないことは、一考を費すに値しよう。ほど當代の長明に對する批評といふものは、十訓抄や文机談のやうに、「すきもの」とか、「和歌の道に聞え」とかいふやうなもの

ので、作品や天分才能を具體的に指して批評しようとする、そこからつい脱してしまつてゐるといふやうなものではなかつたらうか。

七 空白のきほひ

同じく當代に聞えた「すきもの」の頼政の如きは、歌の修業者であつた。頼政は王朝の遺産を、有るものとして信じきつてゐた。それ故、傳へられてゐるやうに、頼政は「心の底まで歌になりかへりて」常住坐臥の間にも和歌を忘れず和歌を習ひ和歌を以て生活を充たさうとしてゐた。それが可能であると信じきつてそんな境涯を愛惜し勉強してゐたのである。身の成る果てを覺つたのは頼政が自害する最期に於てであつた。この信頼、疾づくに底もなきものになつてゐる文學を知らずに、深く信じ得てゐる愚直なばかりの信頼の熱さに觸れて、流石に同座の歌人達も心あたたまるものと呼び戻され、我しらす誘はれもして、頼政がゐる座ではついで歌の一つも出来てくると俊成さへ言ふことにもなつたのであ

る。(無名抄)

長明の「すき」は、恐らく此の頼政に似て、しかも、まるで異ふものであつた。それはかの「祕曲づくし」の場合の彼の醸成してゐる雰圍氣を考へ、また歌會などで勝歌をとつて行きつつ而も後に残つた形はまるで中味がなく空々しいのに、人に「いみじきすきもの」とされてゐるところを考へて、さういへる。たしかに長明も彼が同席すれば何か人々を誘ひ驅つて率ゐて行く所があつた。けれども、若し頼政の場合が歌の詠まれる前に用意を積むすきであるとしたら、長明のは反對に、それはすでに用意される中味などによるのでなく、唯「誘ふ」だけといつたやうな、ものない勢ひだけのきほひである。「かたち」に渴いたきほひで、傍の人々をも誘ひ込み、或は妙な言ひ方だが、歌が出来上つて後に、突然異常なすきに人を驚かすのである。ふつと歌になつて形として現はれ、その歌を形作つてゐる、突飛なばかりどきつい効果の言葉や、その突飛さを「心ありて」顔に熱中してすいてみせ、うれしくてひとりではくほくと得意げに一方ならず悦に入つてゐるといふ様子を見

て、はじめて人々は變に感じ入らされることがあるのである。その歌の言葉が形に出る迄はそれ程まで期待して工夫してゐるのではないが、誘はれでもするかやうにふつと言葉を吐く。これは突飛な詠作法であつた。彼の上滑つて奇妙な中味の薄い薄つべらな、言葉だけのモザイクのやうな歌は、しかしその座に於ては非常に強烈な長明のすきぶりに支へられて、何か憑いたやうなものを感じさせ、人はその歌の出で來たる前から長明が歌を深く用意し自信してゐたかとも思ふであらう。しかしそれは違ふのである。それ故、その熱風のやうな雰圍氣が冷めた後に作品だけについて批評をしようとする、長明の作品といふものは唯あつてなく形の滓のやうに見え、批評がしにくいのである。彼は歌の題について「かならず心ざしをふかくよむべし」といひ、「歌はただ同じ言葉なれども、つづけがら、いひがらにて、よくもあしくも聞ゆる也」といふのだが、そこまで至らない未熟さよりも、さういふ用意を踏み越えて行く凄まじさが、このやうな詠作となるのであつた。それは歌の中味となるもの(題意)、それを宿す言葉(つづけがら、いひがら)が衰弱して、そ

れに熱した詩人が捷敏なだけそれだけ、題意や言ひがらの上は上滑りして徒勞して激越してのみゐるやうなものである。そしてそれは一長明の狂癖などだけではなく、正しく末季の文化そのものの終焉的現象の代表であり、長明はかゝる時代の請し子だったのである。

彼が和歌所出仕以前に出入した諸歌會の會衆の歌が、如何に、も早中味もなく又才能の出づべき餘地もないものとなつてしまつてゐたか、また、御所に出仕後も、いかに「底もなく極もなき」發想を以て歌詠がされてゐたか、前引のやうに、彼の目はそれを洞察してゐた。多くの歌人たちが無性に執心に、得意に充ち足りた自信をもち、努力もし才能も見せ得ると思つて歌を作つてゐるその文壇を、長明はそこに同座しつつ、螢光板に骨を寫し見るやうに、見透してしまつてゐた。何たる文壇の像であらう。而も長明はその素漠たる眼を敢て閉ぢようともしない。彼はあくまでそこに同座し、その文壇に最もそつくりな歌を作つて、熱狂し執心してゐる。彼は他の歌人達と敢て抗はうともしない。その人々のやうに同じやうに、否その先走りをして作詠してゐる。長明は世に重んぜられた。しかも

まるで重んぜられてゐないといふ、二つの評價を占めてゐる。それは長明の、謂はばとつと行きすぎて先手を打つた發想ぶりのものつ秘密である。その先廻りは、當代の詩人達の赴くところを最も洞察して爲してゐるところであり、呀と目を睜らせるやうなところがあり、定家なども長明にはしてやられてゐること屢々である。しかしその時すぎてよくよく目を据ゑて見れば、長明の殘してゐる歌の形はまことに身すぼらしく、薄す汚い一片の反古の如きものである。價值などつけようとすれば、形らしい形をなしてゐないのである。

このやうな長明とは何であらうか。通例の心やさしい詩人でさへもあるまい。そして又私は彼を一人の人間といふよりは、唯そのまま時代だといひたい。しかしこのやうに、唯そのまま時代であるやうな人間が詩人でなくて何であらう。そしてこのやうな詩人が肉も衣裳もなくなつた文學を抱へて、たゞ「ふかきところさしをつくし」などといつてゐるのである。かの「祕曲づくし」の時の、辯明にならない辯明の言葉も實に「道にふける心さしの切なること」といふのであつた。これ、人の、藝術内容として認めることの出来ない、

無法の、素淡たる詭辯的心景であつた。さういふ空な心から、歌詠みでもない素人の歌を認めたり（「思ひの心に餘る時自然讀るゝ事」）、何でも無い幼い少女の歌評を、その評當れりと思つたり（「歌仙にあらざれども難をしる事」）してゐる。さういふ時彼は歌を「ことわりをさきとして耳近き道なれば」と言ふ。この「ことわりを先き」とするといふことは徳川時代にこんなことを言ひ出した田安宗武の説や、故實的なことわりなどは、雲泥に相違してゐるのであつて、長明のは、耳近く素人幼者の心にもある「心」といふに等しいやうである。さういふ心は、もはやいい意味にも悪い意味にも「名にながれたる歌よみ」の「歌」といふべきものでなくなつてゐるものである。豊田正子や野澤富美子のものである。あれが文學であるか、否文學でなんか無いであらう。否、彼女のみでなくて普通に文壇的に作家として通り、又文學的作品として通つてゐる物も數多すぎる位である。文學者は何故その區別がつかないのであらう、又何故その果てに彼女等の物を一寸手にとつたりして見るのであらう。あんな物を一寸でも手に取上げてみたりする寂しさといふものがあ

る。ただ文學が底をついたといへば足りる。文學は花散り、その梢端に渴してゐる、それだけが文學である時代である。而もこのやうな文學喪失の時代に豊田正子や野澤富美子のやうなものが、白紙的な美しさを呈して現はれて來るのである。しかしあれは文學の空白といふやうなものである。長明が深くそれに信をおいてゐるわけではない。文學に渴して邊播し足搔いてゐるところには寧ろ、長明のやうな空撃する「こころざし」と文學の彼方に跳び越えた發想などがあらう。唯、若し強ひて長明に彼が信をおく人を擧げさせたら、かの眞當な素直な歌人の家隆を擧げたかもしれないと私は思つたりする。家隆は後鳥羽院も最も信用してゐられた。それは道德的な人柄からばかりではない。「禪門被申云、此の仁未來の歌仙たるべし。見參のたびに難儀などいふことをばいはず。いつも歌よむべきまさいき心はいかにと侍るべきぞといふことをとふとて、被感」（井蛙抄）。このやうな家隆の正直さといふものは、詩の道にもありたいことで、これは頼政のやうな勉強家でもなく定家のやうな天才でもなく、長明のやうな時代のとりことなつてゐるのでもなく、詩がそ

の本に於て眞當であるやうに、そのままに眞當な詩人である。後鳥羽院が「歌にたりかへりたるさまかひがひしく」(御口傳)と評され、定家等の如く早熟でなく、しかもその詠歌四萬首と傳へられ、全く詩がその本に於て眞當なるものであることの消息を告げる役を果してゐるやうなものである。彼自身言つてゐることも、例へば「歌は不思議に候ふなり。きと打見るに面白く悪しからず覺え候へども、次の日又々見候へばゆゆしく見さめのし候」(土御門天皇に上る文)とあるのは、決して事の裏面を剝ぎ出したりしてゐるのでなく、唯詩の眞當さをそのままに消息してゐるのである。これは長明の目をむいた「ころざし」などと相反し又相一致するものである。

八 伊勢記

長明は三十餘歳都をはなれて伊勢に旅行した。現存するその時の歌文を以て如何に想像しても目的の定かならぬ奇異な旅であるが、私は更にその時の、まじめな歌などうちすて

て、何やらふざけがましい戯歌を作つたり、連歌を弄んだりしてゐるのを見て、この旅ほどにしやうのないものに爲されてゐる旅の例を他にしらないのである。或は祖母の家を離れ、幾多の戀にも心とまることを得ず遂に庵を結んだといふ、その前の佗びしい旅であつたかもしれない。しかも讀者はその旅の記が伊勢物語の東下りなどを思はせ、また土佐日記の文章をかすかに思ひ連らせるものをもつてゐることに氣づくであらう。

いせへくだりけるに、野路うちすぎて、いしべ河原といふところにて友まつ

ほどに風のいたくふけば、馬よりおりて、よもぎの中によりふして

よこ田やま石部河原は蓬生に秋かぜさむみ都こひしみ

いせへくだりけるに、おふのゝ原すぎて分けゆくに、はしあり、名をみだれ

橋といふ

はなすゝきおほのいはらのみだれば、あきの心にたぐへてぞ行く

濱村といふ所を過ぎ待りけるにこのほどはあさけのこほりと云ふ、濱の行く

さきに見ゆるは日永と人の云ふ所也といふをききてよめる

行き詫びぬいさ濱村に立ち寄りむ朝氣過ぐるは日永なりけり

宮川の末わたりに水ののぼるに流るゝ様に見ゆるを、爰はいづくかと云ふ、

などかく水はのぼるぞといへば、ある人鹽のさすとて水さかのぼるなり、爰

はみそかせとなん申すといふをききて

さか鹽はみそかせませせてさし登るすを過ぎて行く人に問はばや

伊勢旅行の歌は凡そ此の體である。これほどのおどけた旅の歌は、在原業平の場合の感傷とも、紀貫之が都へ歸る土佐からの船中で愉しく詠んだのとも異なる。業平は都を諷してなげき泣き、貫之は亡兒への思ひに土佐への心残りは断ち難い中にも彼の留守中益々興隆してきたであらう和歌のみやこへ歸る、たのしい期待が包みきれない。彼は送別の宴に上下童まで酔ひしれて「一文、字をだに知らぬ者が、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ」と見えたり、舟子が「み舟よりおほせたぶなり、朝北の出で來ぬさきに綱手はや引け」と言ふのが三十

一字の歌に覺えたりしてゐる。能因、西行の徒の旅にも此の様なおどけはない。長明の伊勢遊行の變な戯け歌は何であらう。「都こひしみ」「ふるさとの大原山やいかならむ二見の浦のけさの初雪」などの歌も稀にあるが、實際些かも「みやこ」への心などない。ただしやうことなしに行きすぎてゐるといつたやうな旅である。そして謂はば和歌のくづれを一握りづつ置いてゐるやうなものである。この伊勢行の和歌の中には殆ど各首に地名などが詠みこまれてゐるが、もとより今までの和歌に詠み慣はれた歌枕といふのでもなく、それかとして、このやうに濫詠してはそれが新たな歌枕とならう筈のものでもない。又今更に新しい歌枕を創り出づる時代でもない。しかも長明はひとり歌枕の假説に耽つてゐる。そして執拗なほど地名を片端から詠み上げる興味にひとり興じてゐる。中味はなくて地名だけが確かな憑りどころとなつてゐる、そんな地名に一心に歌を作り立ててゐる。これは王朝期の和歌から何やら氣遣い詠作である。しかも前述のやうに、王朝和歌の始祖たる業平や貫之と一味通するものをもつてゐる。そして寧ろ長明の和歌は三十一字の歌型をもつた

非常に俳諧連歌めいた戯けたものとなつてゐることに氣づくのである。事實「菟玖波集」に出てゐる連歌に「林崎間ではいかゞ歸るべき」とある發句は、長明の詠と考證されてゐて、それを認めていい。その句意は、正に長明の心ぶりである。

長明はこの旅では伊勢から熊野に廻つたらしい。この伊勢熊野への旅は古來祖靈への熱願を以て詣でられた所であるし、後鳥羽院は熊野だけで二十數回詣で給うてゐる。しかし長明のこの旅には凡そ敬虔なものとは認め難い。しかも私はこのしやうことなしに地名だけを拾ひ歩き、徒然だけを見つめて歩いてゐるかのやうでありながら、彼が尙ほこの伊勢熊野あたりをさまようてゐるのを興ふかく見るのである。

此の旅中詠み續けて現在拾集されてゐる和歌三十餘首ある。その中に一首眞面目ともつかぬ、又戯れだけでもつかぬ戀の歌があつたことも、前に述べたことがある。すべて言へば頽廢である、放埒である。放蕩すべきものをさへ喪つた、さういふ輕薄である。彼は、此頃の歌にたくみ出された幽玄なんかでも、何も彼も、すでに古今和歌集に出てゐるのだ、

古今集にはされごと歌などまで洩らさずのせてゐるから、誰も古今集から一步も出ることには出來ないのだと、「近代歌躰事」の中で言つてゐる。自己辯護である。

この伊勢行の中にまた次のやうな詞書と三首の歌がある。

ゆきつきてみれば、さるほどなる板屋のをかしげに住みなせるに、いろ／＼の前裁ども盛りすぎたれど、よしある人のあたりと見えたり。時雨などいふばかりにはあらで、霧れ間なかりければ、いたづらに籠りゐたるなぐさめがてら、せんざいなる花色々ひとふさづゝとりならべてみるついでに、三種のすしきといふこと人の語りしをおもひいで、こゝろみによめる

日を経つゝいとどますほの花薄たもとたゆげに人まねくらし

このもの倦んじはた蕭索たる心の中に何か美しいものが彼を招いてゐるその秘密を見のがしてはならない。又この旅中作に「菊を作る」長歌が一首ある。寫傳の間に斷簡となつたか、未完の句を以て終つてゐる。

ぬれてほす 露の白玉 おく山の 幾千歳とも しら菊は 草の
あるじと なりながら よろづの花の をとゝにて いとど匂ひ
を のべにみつ 秋の千草の 色を無み うらさびしかる この
頃も 若紫に 庭を染め

といふのである。美しい豊かなものになりかけて、さうなることの徒勞に筆を投げたやうに私には思はれてならない。何がなし遠い萬葉の赤人や家持を想起させられたりまでするのである。定家はこのやうな徒勞を尙ほ捨てずに歌に盛つた。「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空」など。併しリアルを越えてふつと詠み出されたおもかげの歌である。しかし老後の定家はそのやうな歌も遂に餘技になつて、連歌をしきりに弄んだのである。連歌とはどんな精神であらう。私は長明と連歌について後に少しく述べることもあらうと思つてゐる。

九世

長明は誰にも増してあらはに時代に悪かれてゐた。そしてせめて戯れてゐたりした。俊成、西行、定家、式子内親王、建禮門院右京大夫等、想ひ出でてくれば時代の強ひるものが詩人達にとつて痛ましからぬはない。後鳥羽院は申すに長い。これまで國文學史家が、俊成達について文學を講じ得たのは、まだ「ものゝあはれ」とか「幽玄」とか「有心」とかと論じてたのしんで居れた、太平と言はうか何と言はうか、とにかくそんなことで文學が心慰まれてゐたその時、後鳥羽院について言はれなかつたのは、到底院の御運命の激しさに學者が目を開けるに堪へ得なかつたのである。後鳥羽院の雄渾な御詩心を説き觸れたのは今日の詩人保田與重郎氏であつた。しかし私は何か發見したり掘出したたりすることが學者の誇りになつたやうな、同様な意味の名譽を以て保田氏を考へることは出来ない。後鳥羽院の御詩心を、保田氏でさへ雄大を以て述べてゐる。保田氏にも何か怖ろしく堪へ難

いものが、もしはつきり氏がそれを言つてしまへば保田氏の慟哭が忽ち永遠の深淵に向つて続けられて止まないといふやうな、そんなものが保田氏の腸はつたの中に潜んで居り、その故にこそ今日後鳥羽院を語つてゐられるのではないであらうか。何れにせよ、私は、至尊に全てをこめて日本の正論を仰ぎ奉るものである。私の述べるところはいざななく僅かに長明を述べることによつて十萬由旬の高き至尊を仰ぎ奉るの微志にほかならない。長明についても亦た學者には、長明は佛教的厭世隱逸を弄び、その文學的才能必ずしも一流ならずと評せらるるにとどまり、彼の貧小薄淺の姿を直視するに堪へた者又殆ど皆無といふも過言でなかつた。

長明は、己の魂の露はに透き出でた傷心を、漸く和歌管絃になぐさめようとしてゐるらしいが、到底さういふ風流韻事に耽り得てゐたとは思へないほど凄まじい時代に身をさらしてゐた。彼が「ものゝ心をしれりし」頃より、見るにも「心憂き」「濁惡の世」に處して、「世にしたがへば身くるし、従はねば狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなるわ

さをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも心をやすむべき」(方丈記)と、世と己と相食ひ入り相憑いてなげいてゐる。特に感じ易い三十餘歳の頃までに次々と閲歴したその澆季の姿が、もの狂ほしい激越と寫實とを以て方丈記に描かれてゐる。それは後年その方丈の庵の座右から離さなかつた「往生要集」の大文第一厭離穢土篇の空想を現實にしたものであつた。即ち安元三年の都の大火、治承四年の大麿風、及び福原遷都による平安京の廢墟化、養和元年に始まる二ヶ年の大飢饉、元暦二年の大地震。略々長明二十餘歳から三十歳前後に亙る十年間の中の事である。その間にも嘗ての蘇我氏の暴逆を再び繰返すかの如き平家の興隆と滅亡とを、末世の淺ましく狂つた人間の姿として悉くに見とどけ、又その間、堂上家と新興武門、共に何れ劣らぬ唯權勢慾の奴隸となつた有様を「まのあたり」に見た。

しかし長明は方丈記に於て、あの平家の没落といふ事件は一筆も記してゐない。平家物語の描くあの激しい顯著な運命を何故長明は記さないか。彼はそれと同じ頃の天災地變と、

王朝文化を一舉に崩壊せしめようとした清盛の暴力的に強行した福原遷都とについては、筆を盡して描き歎いてゐる。平家物語の方では、長明の書いたかの天變地異を方丈記の文章を模して書いてゐるが(颯風・内裏炎上)この天變地異を平家滅亡を意味しての豫言的な「さとし」であると長明は世上の噂を以て叙べてゐる。さる筆法を以てすれば、平家物語の批評は正に方丈記が間接に示唆して爲したものと云へる。にも拘らず長明は平家の滅亡には一顧も與へてゐないのである。(發心集の方では平家の滅亡を見て「世の中目前に跡かたなくあだなりしに心を發し」た佛性坊のことも一寸出てゐるが)長明にとつては平家が働いた暴逆に對しては黙止し難くてその爲す所を執拗に見届けてゐるけれども、平家が殆ど世を占めた事實に拘らず、平家を「世」とは言はなかつた。彼の「世」は、もつと深く、もつと大いなる「世」、或は直接な「世」であつた。一武門の興亡などでなく、彼は歎きを「民の愁ひ」と言つてゐる。實に單に世局の外に離れてゐたのではなく、「民」の心を以て彼は愁ひてゐた。このことは隱遁厭世した一孤獨詩人の心をひらいてゐるものとして、後に述べ

るやうに注意すべきものであるが、ともかくも長明に於ける「世」は、實は遁れ難く共に天を戴く世である故にこそ、彼は、この世の極まれる姿を、次に述べるやうに養和の年の飢死者四萬二千三百餘と一々に實踏したりしてゐるのである。この嚴肅な現實に比すれば、平家の滅亡などは二次的なものであつた。定家も亦、治承四年に「世上亂逆追討、雖_レ滿_レ耳不_レ注_レ之、紅旗征伐非_ニ吾事_一」と明月記に記して白眼視してゐる。しかしそれは長明が「民」の愁ひを以てしたものとは異なるのである。長明がその孤獨の中に「民の愁」として大いなる國の歎きを歎いた心は、畏くも後鳥羽院の、「奥山のおどろが下も」との王者の心を以て國の愁ひを叙べ給うた宸慮に相對し奉るものであらう。私は詩人のこのやうな憂國の爲方が、偶々平家物語の作者によつて、平家の暴逆に對する痛烈なる豫言的批評の文辭として借用されたり、或は又後に述べるやうに、不屈な隱士詩人達の心を傳つて、遂に徳川時代に國學者の正統の精神へまで注ぎゆくものでさへあつたことを、うなづくものである。

そのやうな詩人が「まのあたりに見」たといふやうな光景といふものは、その光景がすでに世の果てを見てゐるのであり、又それを見る目も、もはやガラスのやうに寒々と透いてしまつて、底もなく寥々たるものである。その見た光景に對して佛教的末世無常觀などといふカメラを用意してみようとしても、實はそれさへ、あてのないことなのである。そのやうな觀念で一應だけでも整理して、自ら救つて居れるやうなものではなかつた。彼の目はこの世のおとろへ行く有様の極みを食ひ入るやうに追求してやまない。

養和の飢饉は二年目には飢饉に加ふるに疫病さへうち添ひ、「さまざまに跡かたなし」といふに盡きる程であつたが、

はてには笠うち着、足ひきつつみ、よろしき姿したる者、ひたすらに家毎に乞歩りく。斯く佗びしれたる者ども、歩りくかと思れば、即ち仆れ伏しぬ。築地のつら、道のほとりに飢死ぬるものたぐひ數もしらす。取り捨つるわざもしらねば、くさき香世界に満て、變り行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。況や川原などには馬

車の行交ふ道だになし。あやしき賤山がつも力盡きて、薪にさへ乏しくなり行けば、頼む方なき人は、みづからが家をこぼちて市に出て賣る。一人が持ち出でたる價、一日が命にだに及ばすとぞ。あやしき事は、薪の中にあかき丹つき、箔など所々に見ゆる木相ひ交はりけるを、尋ねれば、すべき方なき者、古寺に到りて佛をぬすみ、堂の物の具を壊り取りて、割り碎けるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなむ見侍りき。

と。斯くて數知らず死ぬる事を悲しんで、仁和寺の隆曉法印といふ僧が、死者の首の見ゆる毎にその額に「阿」字を書いて往生の結縁としたりしたことがあつたが、長明はこの事實に不思議な行動をしてゐる。それは次のやうに記されてゐる。

その數(飢死者)を知らむとて、四五兩月を數へたりければ、京のうち一條よりは南、九條より北、京極より西、朱雀よりは東の路のほとりなる頭、すべて四萬二千三百あまりなんありける。況やその前後に死ぬる者多く、又河原白河西の京もろくの邊地

などを加へて言はば、際限も有べからず。いかに況や七道諸國をや。

私は死者の数のことを社會學的に言つたりするのではない。長明が、車馬の行交ひも困難なほどに死に仆れ、「臭き香世界にみち」たる中に、目を蔽ふばかりの見ぐるしいさまさまの死骸を、二ヶ月の間熱心に一つ二つ三つと數へて廻つてゐることを言ひたいのである。それを二ヶ月數へつづけて四萬二千三百餘などと數へ上げてゐることを言ふのである。

長明はその閱歷した災厄をそのはるかな三十年乃至四十年後の筆録に於て右のやうに實にリアルに描叙してゐる。火の燃える工合、風の工合、地震、等も、今さながら目に見るごとき、鮮かすぎる描寫である。今一例を引けば、

吹迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら煙を地に吹きつけたり。空には灰をふき立てたれば、日の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる炎、飛ぶが如くして、一二町を越えつつ移り行く。

これは安元三年の大火の叙述の一部である。このやうな記録を覺書にしてでも保存してゐたものであらうか。さうではあるまい。このリアリズムは自然主義のリアリズムのやうな對象主義的な描寫とは異なる。客觀的に置き据ゑて、己れ又主觀を撥無して寫實しようなどといふことではない。唯切なる歎きをする者のみのなす一種ののがれがたきリアリズムである。ガラスのやうに透明にももの影を透映する詩人の心に消えがたい姿をとどめてゐる跡形である。文化の「形」を喪つて行く傷心のかたちであると言ふことができる。彼はその描かれてゐるものに全く執着してゐる。彼が死體を四萬二千三百餘と數へて廻つたのは嘘かもしれない。そんな、誰も思ひもしない恐ろしい興味など、見えすいた一片の虚言であらう——と、さう否定してみるによつて、長明のしてゐる剋明なそして無用な踏査の怕しさが本當に分るやうである。それは、のがれられない運命を自ら數へてゐるだけである。こんなにはげしく鮮明剋明に「世」を感じとつては常人は正氣であるに堪へないであらう。人は若し知つてもそれから面を背けるだらう。憂愁といふさへ時として人を時代

から面を背けしめる手段となり得よう。が、もしそんなものがあつたらまだ長明は助かり得てゐるだらう。そしてこんな凄まじい所業には堪へ得なかつたであらう。然るに長明は唯執念く、何するともなく、もとより政府から依頼されたりしたのでもなく、見届けて廻つてゐる。某僧のやうに供養のためでもない。前掲の引用の中に傍點を附しておいた、「丹つき箔など所々に見ゆる木相交はりけるを尋ねれば」と長明の顔が、佛をさへ割り碎いてゐる廢壞の極みの所へ、まじまじと出されてゐる。福原の新都にも見に行つてゐる。この形もなく跡もなきものとなつて行く時代の相そのものが彼の相であり形であつた。四萬二千三百餘といふ數字が彼自らのしるしであつた。彼自身の告白であつた。ここから彼自身解き放されないのである。その運命を負うてゐるのである。そしてたまたま彼が發する批評めいた言葉とは所謂批評家などが賢しらに、その時代に食ひ入りもせず憑かれもせず、對象的に尤もなる批評といふ如き手の込んだことを試みて空轉してゐる如きものではなくて、唯見届け、なげくそれだけのためである。觀念や道理はそれを言葉の中にとり

入れてゐるけれど、もしさういふ教理や思想に彼が頼り得て、それに住し得たならば、彼はあるやうな厭世などしなかつた。それらの論理や觀念は、又彼の大きななげきの中に、唯そのなげきを假りに現はすだけの小さな役目しか果してゐない。勿論あの時代に觀念された佛教教理とても大きく深いものであることは言ふまでもない。しかし長明の痛ましい詩心は更にそれに對してさへ遂に放埒であつた。方丈記冒頭の「行く川のながれは絶えずしてしかもとの水にあらず、淀みにうかぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまる事なし」といふ言葉にもそれは言ひ得よう。この一見佛教的無常觀をそのままに叙述したやうな言葉は、無常觀以上に、どうしやうもないほど跡形ない己と時代との悲しい告白である。彼が遂に佛教の信徒であり得なかつた態度は、佛教的厭世の閑居をさへ倦み厭ひ反撥して、遣り所のない心情を吐露した方丈記の末尾の文章に鮮かである。しかしそのやうな歎きの發想は決して單に世の哀れさ、悲惨への歎きのみから生れるものではないからである。もしかの惻隱の情の如きから生れる歎きのみならば、將又慈悲心の如きから生れ

る歎きのみならば、その歎きも始末し易かつた。そのやうな歎きは突き詰めて言へば自分で目を蔽うてゐることもできる歎きである。といつたからとて孔子や釋迦のこころを小さく量つてゐるのではない。むしろ私はそれを極大にまで量つてゐるのであるが、私の言ふ心は、目を蔽うてゐることの出来る心の極といふのである。量ることの出来る極大だといふのである。孔子や釋迦の言ふ「極」とか「無量」とかはさういふ意味の「大」を表現してゐるまでである。日本人はその「大」におどろきもしたが、それとは異つたまことを見失ひはしなかつた。それは寧ろ小さく、素直なものである。それだけに又「救ひ」や同情などさへない、又従つて「救ふ」ことも出来ない、そんな素朴なものである。

長明は歎きに溺れてゐる。殆どその歎きに先づ憑かれてゐるもののやうである。それに憑かれて無用に屍體を算へ世の様を見届けてゐるだけである。これはリアル以上の怖ろしいことである。リアルに拘りないことである。それ故「目もあてられぬ事」を「まのあたり」に見てゐるのである。しかももう一つ、長明が自分で目を蔽ふことも出来ず、又見ぬ

ふりをして居れない、直接に彼をつき動かすものがある。それは惻隱の情や慈悲心よりもつと素撲で眞率なもので、本當はここまでそれが出てしまつては、人間の情でもなくなつてしまつてはゐないかと思へるほど、純粹なものである。即ち

いとあはれなる事も侍き。さがたき妻男もちたるものは、其の思ひ益りて深き者、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身をば次になして、ひとをいたはしく思ふあひだに、稀々得たる食ひものをも彼に譲るによりてなり。されば親、子ある者は、定まれることにて親ぞ先立ちける。又母の命盡きたるを知らずして、いとけなき子の尙ほ乳を吸ひつつ臥せるなどもありけり。

この倫理は言葉に拘つて言へば倫理などではない。人情でさへない。たまたま人としてそれは人情とかいふことにもなり倫理といふことにもなるが、到底人間の名義のものでなくて神のものであるといふに近い。長明が知つてしまつてゐるのは、そんなものであつた。それは反對には、かの佛像を割つて薪として市に賣ることにさへなる。少しも異なるもので

はない。長明の目はそれを見てゐる。彼自身はそれ故人情家にも盗人にもなれない。彼が「たゞ絲竹花月を友とせむにはしかず」といひ、「ひとり調べひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり」とか「念佛ものうく讀經まめならぬ時は、みづから休み、みづから怠る。さまざまる人もなく又恥づべき人もなし」と述べたりしてゐるのは、人情家にも盗賊にもなれない、神を見てしまつてゐる（不幸な）人間のやり場のない生活としてである。彼の二十歳から三十歳迄の閱歷は、彼に彼の住む時代をそのやうに證明して見せた。蓋し「住む」といふことも、古代の人達にとつて單なる家屋以上に、男が女の許に「住む」と言はれた傳統をひいてゐるもので、生命をこの世（「世」といふことも男女の仲を古代の人は言つてみた）に托してみようとしてゐる、まじめなものが、かか思はれてゐたといつていい。そのやうに住むべく求めた「世」が、そこもなくきはもなくなつて、一舉に唯その奥處の神にぶつかつてしまへば、人間の世は末である。

しらす、生れ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、假の宿り、

誰が爲めにか心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。その主とすみかあるじと無常をあらそふさま、いはゞ朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花しほみて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つ事なし。

しかも長明はこのやうに、人の世にあるべきものが次ぎ次ぎと焼け失せ、崩れ失せ、亡び失せて行く様を見、而も又そのやうなあぢきなき事を見て人の心の新たになることもあるかと見しに、「月日重なり、年經にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし」といふ言語道斷の頽廢を見、さういふ人々の心に残つて存してゐるのは唯「權」と「富」とへの念々の拘はれよりほかないと見とどけてしまつては、長明が、いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも心をやすむべきと絶望の中に渴望して神を見てしまふのは必然のことであつた。「狂へるに似たり」とは彼が、神を見てしまつての、人間としての羞らへる自嘲であり、憤激であらう。

しかしこれは、漢土の詩人屈原の反抗的な詩心と似て、大いにこころ異なるところがあ

る。屈原は「放たレタル」人として江潭に彷徨し、行く／＼澤畔に吟じ、その顔色憔悴し形容枯槁し、漁父之を認めて、その故を問へば、屈原答へて曰ふ「舉世皆濁り我獨り清む、衆人皆酔ひ、我獨り醒めたり、是を以て放たれたり。」漁父曰く「聖人は物に凝滞せず、能く世と推移す。世人皆濁らば何ぞ其泥をにこして其波を揚げざる。衆人皆酔はば何ぞ其糟をくらひて其醜をすすらざる。何故に深く思ひ高く舉りて自ら放たしむることを爲すや。」屈原曰く「吾聞く、新に沐する者は必ず冠を弾き、新に浴する者は必ず衣を振ふと。いづくんぞ能く身の察々たるを以て物の汶々たるを受けんや。寧ろ湘流に赴き江魚の腹中に葬られむ。又安ぞ能く皓々の白きを以て世俗塵埃を蒙らむや。」ここに於て漁父莞爾として笑つて櫂を鼓して歌ひつつ去りて復た與に言はず。「滄浪の水清まば以て吾纓を濯ぐべし。滄浪の水濁らば以て吾足を濯ぐべし——」

この漁父の歌は屈原の自嘲である。その自嘲は遂に世と妥協し得なかつた高踏清節の詩人屈原の、却つて世俗への嘲笑ともなつてゐる。そして遂に湘流に赴いて江魚の腹中に身

を葬つた屈原の自嘲は美しいけれども、長明の如く、謂はば世皆濁らばその濁泥の中に己自ら共に身を以て泥をにこし、衆人皆酔はば共にその濁酒をすすすが如きやうな詩人の純粹さもあり得る。しかし長明が時代をその身自らに見届けたやうなのは、漁父の所謂「聖人」の「物に凝滞せずして能く世と推移す」といひ、又「滄浪の水清まば以て吾纓を濯ぐべし、滄浪の水濁らば以て吾足を濯ぐべし」といふにひとしいものであらうか。長明はこのやうな和光同塵的な妥協の類廢はきびしく厭ふのである。彼は屈原の如く汨羅に投じて自殺したのでもなく、寧ろ世の類廢を己の身にそのままに現じつつ、而もまた、世に馴れて清らかさを泥中に委したのでもなく、世を厭ふこと何人にもまさつてはげしかつたのである。屈原の自嘲は「放たれたる」詩人としてあるが、長明は放逐されたのではない。自ら放逐を己に課して御所を辭し、「住處無さ」の中に身を置いたのは、王朝の衰へをそのままに身自らに描いたのであつて、併し自ら放つたその孤獨は、寧ろ「民」の心の中にあつての神の、明神の光りを仰がむと渴してゐる。さういふ、渴して、神の光りをあまりにあらはに見る

者の羞らひ、つつしめるものの激越として、「狂へるに似たり」と自らいふのである。そしてこの詩人の自嘲といふよりも羞らへる風狂の中に、屈原のやうな一方的な反撥的絶望的亡命的な死の代りに、やがて誰にもまして文化の美しい復活をひそかに養生してゐるのである。そのことはこの後に又述べるところがあらう。

一〇 出 離

建仁元年、後鳥羽院の文壇は益々白熱して七月には千五百番歌合が催され、その二十七日には和歌所が再興され、十一月新古今和歌集撰進の院宣が下つた。長明は地下から選ばれて和歌所の寄人となり、この頃を中心に、歌合にその名を残してゐるものが目立つてきてゐる。建仁三年には俊成のために「此世の面目をきはめはてせんとおぼしめし」て九十賀を和歌所に於て御催しがあり、それにも長明は列して詠歌してゐる。「久方の雲に榮行く古き跡を猶わけのぼる末ぞはるけき」。元久二年には新古今集が一應編撰を了りその

竟宴が催されたが、その時は長明の列席した記録も和歌もないし、同年の五辻殿詩歌合に出席したほか、跡を絶つてゐる。前掲のやうに、新古今集のために人は五百首千首と自薦する中に、長明はひとり自歌僅かに十二首のみ奉つてそのまま撰入されたといふ兼載雑談の記事は、自ら無名抄に「すべてこのたびの集に十首入り侍りし、是過分の面目」といふのと異なるが、とにかく現在新古今集に残る十首（九七頁参照）は彼の和歌所致仕後の歌と思はれるものはないので、他の人とはちがつた態度も、決して致仕後の態度とのみはいへない。しかしもし兼載雑談の記事を事実とすれば、既に何か彼の中に和歌所に對して訣別の用意がされつゝあつたやうにも思へる。少くとも嘗て晝夜奉公怠らなかつたといふ事と、餘程の變化が認められる。われわれはこの二つの態度の中間に、長明が院の文壇を、「そこもなくきはもなし」と見たことを、挟んでみなければならぬ。俊成九十賀の時の、前引の和歌が、勿論賀祝の心を歌つてゐるとはいへ、その中に長明の例の口ぐせの「跡」といふ言葉が出てきてゐるのに、矢張さうかといふ感を覚え、或る不吉な豫感のやうなものをも

私は覺える。

さてその頃長明の身の上に思ひがけない事が訪れてきた。それは河合社の禰宜の後任に後鳥羽院が長明をといふ御内意を洩らしたまうたのである。長明はこの由洩れ聞いて「よるこびの涙せきとめがたき氣色」(家長日記)であつた。然るにこれは賀茂祐兼の横槍によつてその子祐頼に渡つてしまつた。祐兼の言ひ分の中に「長明が年はたけたりといへども身をえうなきものに思へるにや社の奉公日あさし」といふことがあり、源家長もそのことを肯定して「長明は身のりきはまれる事はなし、たゞ和歌のことゆへに召しいだされたりしことを空しくなく果てじと思召いたりし事一也」といつてゐる。恐らく事實であらう。併し院は長明を氣の毒に思召して、氏社を官社に昇格してその禰宜としようとの御心遣ひもあつて、それには祐兼も賛成したが、長明は顧みず「住み佗びぬげにや太山の槇の葉に曇るといひし月を見るべき」以下十五首の歌を奉つて大原に隱遁してしまつたのである。尙ほ右の歌は彼が和歌所出仕の初の「よもすがら獨りみやまの槇の葉に曇るもすめる有明の

月」といふ歌に對して詠じた訣別の意である。そしてこの出離は方丈記にいふ「五十の春を迎へて家を出、世をそむけり。本より妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず。何に付けてか執をとどめん。むなしく大原山の雲にふして云々」といふ時のことであらう。

この折の院の御懇情に對する長明の頑さは、家長の目にも「さほどこはごはしき心なれば、萬づ打消つ心地してぞ覺え侍りし」と映つてゐる。十訓抄には寧ろ次のやうに記してゐるが、共に長明の容子が髣髴としてゐる。

近比、鴨の社の氏人に菊大夫長明といふ者ありけり。和歌管絃の道人に知られたりけり。社司を望みけるが、かなはざりければ、世を恨みて出家して後、同じく先き立ちて世をそむける人の許へ言ひやりける。

いづくより人は入りけむ眞葛原秋かぜ吹きし道よりぞ來し

(中略)

その後もとのごとく和歌所の寄人にて候ふべき由を後鳥羽院より仰せられければ

沈みにき今さら和歌の浦波に寄せばや寄らんあまの捨て舟

と申して終に籠り居てやみにけり。世をも人も恨みけるほどならば、かくこそあらまほしけれ。

○家長も別に次のやうにも記してゐる。

鴨長明がのぞみとげざりしぞ先の世の事とのみ聞侍し。

即ち長明の宿命であるといふのである。又

あまりけちゑんなる心哉(註、愛想ないの意)とおぼえしかど、さきの世にかゝるよすがにひかれて、まことの道におもむくべき契のかゝりけるよと、此世の夢思ひ合せられしならんかし。

と、ここにも長明の宿世かといつてゐる。さて後日のこと家長は思ひがけず長明と對面したことがある。その時長明はそれかとも見えぬほどに瘠せ衰へてゐたが、云ふには「世を

うらめしと思ひ侍らざらましかば、うき世の間ははるけす侍りなまし。これぞまことの朝恩にて侍るかな」

右の諸記事を読み來り、且つは長明がその若い日からの閱歷を思ひ合せて、この出離隱遁が彼にとつてのがれがたい必然をもつことを誰も感ずるであらう。嘗て青春の日に「風のけしきにつひにまけぬる」と風に誘はれて放蕩して身を要なきものとした長明が、和歌管絃の「すき」の道に、或る「かたち」を求めて入りつつも、その「すき」にも「隱棲」の心は既に用意されてゐたし、又樂譜なき音楽を奏する彼の詠歌が風のやうに人を掠めて誘ひ、それによつてたま／＼認められて和歌所に出仕するに至つたとはいへ、その盛大な文壇をそこのなきものと見てしまつてゐる彼の道が、遂にここに來ることは自然でさへある。いづくより人は入りけむ眞葛原秋かぜ吹きし道よりぞ來し、惻々と迫るものがある。彼がたとひ爾宜になり得てゐたとしても、恐らくそれは必ず躓きを待つてゐたであらう。祐兼や家長の評する通りである。

然るにわれわれは又この反面に、長明が、院の御内意を洩れきいて喜びの涙せき止めがたき氣色が見えたといふことを不審に思ふであらう。いやわれわれは、更に遡つて、社のまじらひもせずもつてゐた、みなし、この長明が、歌の會などに交り廻り、或は遂に和歌所に出仕すれば、罷り出づることもなく夜晝奉公怠らなかつた、常軌を逸した奇態の狂熱ぶりを思ひ出でるであらうし、或はこの隠遁後さへも亦その閑居に執して、自らその執心を反省して、その妄執に己をもてあましてゐる(方丈記)ことを思ひ合せてもいい。否彼の生涯を通觀して、いかに彼があらゆる瞬間に「形」「跡」に渴くが如く拘泥してゐるかを思ひ返すべきである。その「形」を求め「跡」を留めんとする、言ひ換へれば表現を求めんとする、妄執のやうな、氣違ひみて度を失した執心は、しかし、その都度「形無さ」「跡無さ」へ滑り落ち走り抜けることになりつつ、益々節度を失つて足掻いてゐるのである。歌合に於ける勝負、撰集への自歌の撰入などについてのあの喜びやうは既に、「形」もつ者の自重を失つて、取りとめのないことであつた。「あはれ無益の事かな」とは、西行俊成等が和

歌の道絶ゆるかと夢に占つたりして未だ和歌に縋りつき得てゐたのに比して、もはや、足掻きついてもその中から早や形無さをふつと嗅いでしまつてゐるなげきである。

みなしごであつた長明が和歌所に召されたのも、後鳥羽院の御恩遇にあひ奉つて、何かすがり得べき「跡」をとらへ得たといふ感得であつて、さうなると他人のやうに色々周囲を思ひ憚つたりすることはない。常軌を逸して有頂點になり、單純に院に信頼し奉り、奉公申し上げて、甘えて傲るばかりの夢中ともなり得るのが長明であつた。例の三體和歌を召された時の自信ぶりなどにはそのやうな無邪氣に傲つた風さへ見える。そしてその調子に乗ると、大方の人のしりごみするやうな、明月記の所謂「さしもの大事」の三體和歌もやつてのけ得たりするのである。然るにそのやうな信頼をさせるほどの盛大な院の御文壇が、彼の目の底には、そこもなくきはもないものに映つてゐる凄じさである。それでも、院の河合社禰宜のことについて御恩頼の内意あるや、又何かそこに跡形を留め得ることといふ氣がし、その狂喜又人を驚かせてゐる。

長明が河合社の禰宜になりそこねた時、恐らくは誰にも益して恨めしと思つたであらう。禰宜などになつて安定の自信もないものが、ふとそんな安定的なものを示されたりすると、自分も本氣に安定したがつてゐる氣になつてそのことを思ひ詰めてみたりしたのである。それは着實な考へではない。普通の人ならそれほど本氣になどならなくて安住するを普通とし、爲すことといへば策謀とその成功の北叟笑みであり、たとひ一度位失望しても仲々それで憤激したりする事などは大人氣ない拙策として、恨み顔などなるべくせず、又の機會を狙つたりするであらう。定家など明月記によれば誠にその點で辛抱強いものがあつた。しかしそれが普通の人の人生に對する自信であらう。家長が長明の辛抱氣のなさを非難してゐるのも尤もである。然し長明自身にとつてみれば、自信などなくせに有頂點になつてみてゐたりしたことがはつきり自分で分り、自分の身上しんじやうも覺られれば、にがい自嘲よりほか何があらう。院の重ねての懇ろな御志などを承れば尙更面を上げ得ぬ耻しさを覺えたであらう。その羞しさの中には何か己の中から或は世の底の底から噴き上げてくる怒り恨

みのやうなものを感じたであらう。そして嘗て青春の日に「さおどるばかり物をこそ思へ」と歌つた、捉へやうなき、形とめ得ない苦くるいぐるしみが彼をつつみつ、形なき寒々とした流の中へ彼を誘ふ。——「いづくより人は入りけむ眞葛原秋かぜ吹きし道よりぞ來し。」しかしその要なき中のみ、清らかな眞情がひとりあたためられるのであつた。それは長明にとつて家長の所謂「さきの世」からの宿命のごときものであつた。後に家長が會つた時、このことこそまことの朝恩であると述べたといふ、これを皮肉ときき或は悟りすました言葉ときき、その何れも思ひ足りないであらう。この言葉は全く唯長明の本心を言つてゐるにすぎない。たとその中には、もうさうなるよりなりやうのない自分の身上がやや羞らはれつつ言はれてゐる。同時にそのやうな激しい逆遇を、おほけなくも朝恩なりと言つて、正直その通りだと謝し奉つて自ら深くうなづいてゐるところには、深い默契がなくてはならぬ。結局言へば、繰返して言ふことになるが、長明は院にこそ彼の萬一のそして最大の「形」への契りを期して信じ奉らうとしてゐたのである。たとひもはや心眼の底では院の文壇を形

なきものと見透してゐても、そのやうな寥々寞々たる時代の委ゆゑに、それを尙ほ厚く護らうとはげみ給ふ聖主へ彼も亦必死に縋り奉らうとしたか。その點ではこの聖主と長明とが最も時代を知り抜き合ひ、默契し合つてゐたとも言へるであらう。定家などはその酷しさに似ずまだうろろしたところがあり、例の住吉參籠に「汝月明かなり」との靈夢を見たり、それによつて「家風にそなへんため」に明月記の如き類稀な日乗記録を作つたりして自分の中から縋るものを見出さうとしてゐるが、それは唯彼を愈々ヒステリックにするに過ぎないものであつた。

さて長明の出離して入つた隱遁生活そのものは、世間に珍しいことではなかつた。言ふ迄もなく主としては佛教的出家である。しかるに長明のそれは、出家修行による安心立命や往生の欣求よりも、言はば唯隱遁厭世への「發心」の一念にあつた。このことは長明の詩心を言ふ上に最も重要なことである。

一一 發心

長明の閑居への隱遁後、その歿時に近い頃までに座右に書き溜めたものらしい説話集に「發心集」といふのがある。この書など、長明としては餘程心靜めて書き溜めようとしたものであらうが、詩心の清嚴さ自ら溢れるものである。凡そ彼が隱遁後に著述したものに、和歌に關する「無名抄」とこの「發心集」と「方丈記」がある。此のほかに「ひとり詠じてみづからこころを養ふばかり」の和歌があるが、それはおのづから詠みおのづから詠み忘れたものであらう。實際としても歌數が多かつたとは思へない。無名抄は彼の強ひて形求めた日の記念を書き溜めた追懐のやうなものであり、發心集は彼の隱棲への發心を諸々の世上の説話に移して眺めつゝいたはつたやうなものであるともいへよう。「方丈記」は言ふまでもなく自敘的にその運命と方丈の庵に於ける閑居の眞髓を敍べたものである。

さてその發心集はこの時期前後に輩出した説話集殊に佛教説話集の一つとして普通數へ

られ、佛教文學などとして取扱はれてゐる、といふよりも片附けられてゐるものである。成程その殆ど全部佛教的材料である。そして當時の佛教思想を反映して往生談なども少からず輯録されてその色の濃いものである。然しこの書の眞面目は往生といふよりは矢張發心といふことを必至に第一義的にとらへてゐるところにある。その序文にも、先づ往生を求むる心を述べ、その方便として説話を以て述べるとの旨趣を形の如く記した後、次のやうに結んでゐる。

今此を云ふに天竺震旦の傳へ聞く事は遠ければ書かず。佛菩薩の因縁は分にたへざれば是を残せり。唯我が國の人の耳近きを先として承る言の葉をのみ注す。されば定めて謬は多く實は少からん。若し又ふたたび問ふに便なきをば、所の名人の名をしるさず。いはゞ雲をとり風をむすべるが如し。誰人か是を用ゐん。しかあれど人信ぜよとにもあらねば、必ずしもたしかなる跡を尋ねず、道のほとりのあだ言の中に我が一念の發心を樂しむばかりにやといへり。

長明らしい文章のやり方であるが、ともかく「發心」を旨趣とした點、當時輩出した他の因縁とか往生とか修行とか高僧行傳とかを以て集録したものと一寸異つて特に一種の印象なきを得ない。

即ちこの説話集の特色とする所は、佛教的な教理や有難い法話や往生極樂の話などのやうに何か一種の内容といふやうなもののある話でなく、唯一つの決心のみを語つた、それ以外の愛嬌の乏しいものである。長明が座右に置いてゐた惠心僧都の往生要集などは地獄極樂を人間の空想の極限まで豊かに絢爛と描ききつてゐるが、發心集はあまりに貧しいばかりのリアルの清らかさで、時々そのリアルは矢張かの方丈記の場合のやうに自然主義的對象主義的描寫のリアリズムでなく唯切なる歎きをする者のみの見る跡形としての不思議な美しさを描き出してゐる。私は餘り注意されてゐないこの發心集がもつと人に讀まれることを希望する。これは決して佛教説話集などと思つて讀むべきでなく、これだけで見事な恐らく隨一の詩學書である。その一二の話をここに引掲する。

平等供奉離山趣異州事

中比、山（叡山）に平等供奉と云うてやむことなき人ありけり。即ち天台眞言の祖師也。或時、隱所に在けるが、俄に世の無常を悟る心起つて、何として斯くはかなき世に名利にのみほだされて厭ふべき身を惜しみつゝ空しく明し暮す處ぞと思ふに、過ぎにし方も悔しく、年來の柄も疎ましく覺えければ、更に立歸るべき心地もせず。白衣にて足駄さしはきけるままに、衣などだに着ず、何地ともなく出でて西の坂を下りて京の方へ下りぬ。いづくに行き止るべしとも覺えざりければ行かるゝに任せて淀の方へまどひ歩き、下り船の有りけるに乗らんとす。

船頭が怪しむのを強ひて乗り、遂に舟の便にて伊豫に至り、その國で乞食してゐた。たまたま弟子の阿闍梨が、此國の國守の邸へ下つて祈禱などしてゐる所へ、平等供奉が來て物を乞ふを見て、阿闍梨はわが師と知り、轉び出て泣き縋つて引上げるのを、供奉は

詞少なにて強ひて暇を請ひて去りにけり。云ふばかりもなくて麻の衣やうの物用意し

て有る處を尋ねけるに、ふつと尋ね合はず。はてには國の者どもに仰せて山林至らぬくまなく踏み求めけれども合はで、其のままに跡をくらうして終に行末も知らず成りにけり。其後はるかに程經て、人も通はぬ深山の奥の清き水のあるところに死人の有ると山人の語りけるに怪しく覺えて尋ね行きて見れば、此法師西に向ひて合掌してゐたりけり。いと哀に貴く覺えて阿闍梨泣くゝとかくの事どもしける。今も昔も實に心を發せる人はかやうに古郷をはなれて見ず知らぬ處にていさぎよく名利をば捨てて失する也。菩薩の無生忍を得たるすら、もと見たる人の前にては神通をあらはす事難しと云へり。

これは學徳を極めた僧が、その極めて持つてゐる筈のもの空しさをふつと覺るや、一切をすて、只管その元の世界に背きつゞけたといふだけの、發心の清嚴さを物語つてゐるものである。それが、人知らぬ深山の奥の清い水のほとりに、西に向いて合掌して果ててゐるといふ、些かの感傷もない、而もリアルな底をついて進る美しい風光を語つてゐる。

次に、「讃州源大夫俄發心往生事」といふのは――。

讃岐國に源大夫といふ者があつて、これは左様の者の常として佛法の名だに知らず生類を殺し人を亡ぼすより外の事もない有様なので遠近怖れざるはなかつた。或時狩の歸途、佛を供養する家の前を通りかゝり聽聞者の集まつてゐるのを見て「何わざをすれば人は多かるぞ」と郎等に問へば、供養の由を答へた。すると「いでや興あり。未だ見ぬ事ぞ」とて馬より下りて裝束の儘中を分けて入り、庭も狭しとゐた人々は是を情なしと見るく胸つぶれて開いて通すその人の肩を乗り越えて導師の傍に近く來て事の心を問ふのであつた。僧は怖しながら説法を中止して阿彌陀佛の御誓ひの頼もしき事、極樂のたのしき事、此世の苦惱、無常の有様などをこまやかに語り聞かせた。すると此の男言ふやう、「いとくゝいみじき事にこそ、さらば我法師になりて其の佛のおはしまさん方へ參らんと思ふに、道を知らず。心を致して呼び奉らんと思ふに、答へ給ひなんや」と問ふ。「誠に深く心を發し給はば必ず答へ給ふべし」と答ふれば、「さらば我を唯今法師になせ」と言ふ。僧もあ

きれて答へやうなくしてゐると、郎等も寄り來つて「今日は物騒しく侍り。歸り給ひてその用意して出家し給はゞよろしからん」と言へば、腹を立て「己れが計らひにて我が思ひ立ちたる事をばいかで妨げんとするぞ」とて眼を怒らし太刀を引廻すので、怖れ戦いて立ち退いた。大方今日の願主を初めとして會衆者は色を失つてしまつた。源太夫は尙ほ近く居寄つて「唯今頭を剃れ。剃らばは悪しかりなん」と頻りに責めるので、僧は遁るべき方もなくわなゝくゝ法師になした。衣袈裟うち着て是より西さまに向いて聲のかぎり南無阿彌陀佛と申して行く。是を聞く人は涙を流して憐んだ。かくしつづつ日を経て遙かに行きくゝて末に山寺があつた。その僧が怪しんで問へば、しかくゝと有りの儘に語るをきいて貴む事限りもなく「さても物欲しくおはすらん」とて乾飯を些か包んで取らせると「露もの食はん心なし。唯佛の答へ給はん迄は山林海川なりとも命の絶えんを限りにて行かんと思ふ心のみ深くて其の外には何事も覺えず」と言つて尙ほ西をさして呼ばひ行く。彼の寺の僧の一人が、跡を尋ねつゝ行き見れば、遙かの西の海際にさし出でたる山の端の岩の

上に居て、語るには「此處にて阿彌陀佛の答へ給へば待ち奉るなり」と言つて聲を上げて呼び奉る。誠に西の海にかすかに御聲がきこえてきた。聞き給ふのであらう。「今ははや歸り給ひね。さて七日ばかり過ぎて又おはして我がなりたらん姿様を見給へ」と言ふので僧は泣く／＼歸つたが、その後言ひし如く日を経てその寺の僧あまた誘うて尋ねて行けば、元の所に露も變らず掌を合せつつ西に向つて眠つたやうにしてゐる。舌の先から青い蓮の花一房生ひ出でてゐた。各々佛の如く拜んで此の花を取つて國守に取らせたのを持ち上つて關白頼通に奉つた。「功積める事無けれども一筋に憑み奉る心深かりければ往生する事またかくの如し」と長明は結んでゐる。

これは積める功もなく又これ迄犯せる罪の懺悔さへない、唯決心一つ、それによつて一切世界が裏返しに轉廻して素直ほに清らかである。而も所謂近代の厭世の暗さなどなく澄んでゐる。「いかに心澄みけることぞ、羨しくなむ」と、郁芳門院の侍が武藏野の草花に圍まれて隠棲してゐる所へ西行が行き合せた話の後に記してゐる。これも西行の抒情を越

えてしまつてゐる清嚴な世界を書いてゐるものである。ここに至つてはなげきといふものさへない。恐らくは人が普通に西行などを考へて、詩情を最終的にまで保持してゐると思つてゐる人には、これらの話の詩想は餘りに清嚴すぎて文藝の世界を踏越えてゐると見えるかもしれない。若し此のやうな境涯を和歌に詠んだりするならば、或は長明が「世の末には物ぐるひとも言ひつべけれども」と辯解を加へてゐる増賀上人が、臨終に聖衆の來迎を見て悦んで歌つたといふ

みつはさす八十^{ヤソヂ}あまりの老の波くらげの骨にあひにけるかな

といふやうな狂歌めいたものになり終るか、或は、長明は遂に一度も觸れてゐないが、畏多いけれど土御門院の清澄明徹の御製を學ぐべきであらうか。

いすず川たえせぬ水の水上も清き流をてらさざらめや

長くも阿波の御謫居中の御製である。

庭の面の土さへさくる夏の日にひとりつゆけきひめゆりの花

因みに土御門院は「萬の事もいでぬ御本性にて人々集めてわざとあるさまをば好ませ給は」なかつた(増鏡)のである。或は後鳥羽院の彼方へ越えて居給うたのかとも拜される。

しかしこのやうな清嚴に厭離し或は踏み越え極まつた彼方、即ち普通の文藝などのありやうなく乾いた境涯にも、一種の清らかな美が咲き出でてゐるのである。そこにも「遊び」があり、「すき」がある。寧ろ此の清嚴な世界の美を知つては再び世に歸れないものである。それは「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ」と詠じた西行のまだ知ることの出来なかつたものである。この西行の歌さへ此の發心集の世界に比してはあたゝかすぎる位である。即ち西行はまだ吉野山の花に一つの京みやこを見出してゐるのである。しかし發心集の發心のきびしさの中には實は極樂さへ描かれてゐるわけではない。世には背き而して又往くべき世界も、例へば往生要集のやうにそれ以上に想ひ描かれてゐるわけではない。讃州の源太夫に答へた佛の聲はあまりにかすかである。それは唯發心の聲を呼びつゞける源太夫の聲自らのこだまにすぎないか、錯覺のやうなものである。嚴としてあ

るのは、發心といふそれ自身空々寂々たる人なつかしげのない一つである。此の物語集の中に書き交ぜられてある「すき人」の物語——例の顯基の中納言の物語を初め、笛筆筆篋琴鼓琵琶等の管絃、及び和歌、碁、舞、草木魚鳥、水瓶、異性等に至る「すき」の物語も此の類である。何らの功利もなく欲心もなく、而もそこまで俗慾を撥つては、「人間」とか「生活」とかいふことも無い。さういふ極まつた直率な決心の中にだけ不思議に今は人間の底の底の美しさが孤獨にも狂ほしく残つてゐるのである。それ故それは宗教的満足としての往生といふことを讃歎するよりもその満足への入口で羞らはしげに逡巡してゐる。即ちそれは一方では世の名利への清嚴なる厭離であると共に、一方では、當然その厭離穢土の思想が志すべき、往生への願求でもなくて、唯謂はば「一念の發心を樂しむばかりなり」である。同じく發心集の序文の中に「かゝれば事にふれて我が心のはかなく愚なる事を顧みて、彼の佛の教のままに心を許さずして此の度生死をはなれて疾く淨土に生れん事、喩へば牧士の荒れたる駒を隨へて遠き境に至るが如し。但此の心に強弱あり淺深あり。且自

心をはかるに、善を背くにも非ず、惡を離るゝにも非ず。風の前の草のなびき安きが如し。又浪の上の月の静まりがたきに似たり」と言ふのも、宗教的完成へ行き着くのを本能的に逡巡してゐる微妙な心持が語られてゐる。さうして彼は更に言ふ「今智者の云ふ(中略)所説妙なれども、得る所は益すくなき哉。此により短き心を顧みて殊更に深き法を求めず」

長明は名利の世を厭離するためには已むを得ず佛教の教説理法を借りて以て説くより外に方法を知らないのだけれども、その底には教理説法等は信じない魂をもつてやゝ激してさへゐるやうである。「佛菩薩の因縁も分にたへざれば是を殘し、(中略)唯我が國の人の耳近きを先とし、(中略)道のほとりのあだ言」であるとする。彼に眞に用のあるのは、このやうなものである。この「道のほとりのあだ言」と言ひ捨てゝゐる中には、しかし、實は無名抄の中で和泉式部の歌の優劣を評して「たとへば道のほとりになほざりに見つけたりとも、黄金はたからなるべし。いみじく巧みに作りたてたれど櫛針のたぐひは更にたからとするに足らず」と言ひ、又別の條で「歌は名にながれたる歌よみならねど、ことわり

を先として耳近き道なれば、あやしのもの心の心にもおのづから善惡はきこゆるなり」と言ふに通ずるもので、そこにおのづから彼が「情あると直すなはなるとを愛」する心を言つてゐるものといふことができる。而もこのやうな「情あると直なる」清らかに美しい志が些かも満たさるなき時代に墮して、もはや「生活」として抱かれることなく、「生活」を厭離逸出して唯「發心」といふが如きことに於てのみ漸く守られ、又併しそれは生活を厭離したからとて宗教へ入つてそれによつて救はれるには宗教も眞に救ひとなり得ないのである。この、生活に對しても宗教に對しても不信の中に、唯ひそかに己が「短き心」をいとほしみつゝ、誰人も顧みず何もかも満してくれようとしなほ寂しい清らかな直ほな心を己ひとりで併し厳しく守つてゐる、その決心。それ故この發心の物語は之を「しのびに座右におく」と言ひ、又「いはば雲をとり風を結べるが如し」とも言ひ、「誰人か是を用ゐん」と言ひ、「人信ぜよともあらねば」とも言つてゐる。

このやうな決心は一體何人のものであらうか。もとより世俗の決心ではないが、又決し

て佛教的決心でもない。唯人生の情あると直ほなるとを誰にも益して熱く愛する人、詩人の純潔な決心といふよりほかない。

而も度々比較するが、西行の「撰集抄」のやうに未だ安んじて佛教説話を綴ることも出来ず、又後代に於て同じ方丈の庵に侘びつつも尙ほ「形」の生成を見つめ得た茶人達のやうにもなく、唯此の何處へ行き何を求めやうもない狭い堺に侘びてゐる、詩人の極まりなく清く磨ききつた消息を、歴々と此の説話集の中に讀むことができるのである。そしてこの極まれる決心の境涯の中に、そこにひとり自ら不逞に生をはぐくみ、文學藝能の新生を養ひ、遂に近世日本文化の源たらんとしてゐる光榮ある運命の、不可思議なる風光をわれわれは「方丈記」の中に見るのである。「方丈記」は又正にかゝる詩人の養生を消息する、日本詩學のシリーズの一卷であつた。それは決して牽強の言ではない。

一二 方 丈

發心集が一方には世を厭離し一方には當然赴くべき往生への願ひを逡巡して、詩人の決心のみ緊く守つてゐたやうに、方丈記も亦それと同じ詩人の消息を語つてゐる。即ち先づ世に對しては次のやうに述べられてゐる。

世にしたがへば身くるし。又したがはねば狂せるに似たり。いづれの所をしめていかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらもところをやすむべき。

そして遂に世と背きつづけた生涯の閱歷を述べて「わが身(中略)つゐにあととむることを得ず、三十餘にして更に我が心と一の庵を結ぶ。是をありし住居にならぶるに十分が一也。(中略)五十の春を迎へて家を出て世をそむけり。(中略)爰に六十の露消え方に及びて更に末葉のやどりを結べることあり。(中略)是を中比の住家にならぶれば又百分が一に及ばず。とかくいふ程に齡は歳々にかたぶき柄は折々に狭し」と、かくて遂に「唯我身一つ」の「一身を宿す」方丈庵へ押し狭め切つたことを述懐し、その閑居のさまを縷々と記してゐる。それは當然現世への消極的な厭離穢土の態度とか、従つて或は欣求往生の修行と考へられ

易い。しかるに方丈記のその末尾に至つて、長明は不圖そのことについて己の境涯を省みた末、次のやうに己を問ひ責める。

一期の月影かたぶきて餘算の山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はむとす。何のわざをかかこたむとする。佛の教へ給ふ趣は事にふれて執心なかれとなり。今草庵を受ずるも閑寂に着するも障りなるべし。いかに要なき樂みをのべて、あたら時を過さむ。しづかなる曉このことはりを思ひつづけて、みづから心に問ひて言はく、世をのがれて山林にまじはるは心を修めて道を行はむとなり。しかるを汝姿は聖人に似て心は濁にしめり。住家は則ち淨名居士の跡をけがせりといへども保つ所はわづかに周梨槃特が行にだに及ばず。若しこれ貧賤の報のみづから惱ますか、將又妄心のいたりて狂はせるか。……

しかるに次の答は注目に値する。

その時、心更に答ふる事なし。唯傍に舌根をやとひて、不請の阿彌陀佛、兩三遍申し

て、やみぬ。

これが實に方丈記の結語である。自嘲を何か忿怒めいた不貞腐れた放言を以て投げ返して筆を止めてゐるのである。嘗て俊成が天台止觀に己れの運命を托して安堵してゐたのと比して長明の決心の激越さが偲ばれる。彼は佛教的往生によつて己のいのちが眞に救はれるとは信じてゐない。そしてもつと己のいのちそのものをいとほしみ、この形なき決心の中に熱くひとり何かを信じてゐる。それを若し説明しようとして、世の方から評すれば厭離穢土欣求淨土の態度といふことにならうし、佛教の方から言へば未練の妄心と評されるであらう。そして又所謂総合的な判断とかいふものからは、之を矛盾的態度とか、或は好意的に、人間的弱さとかと評されるであらう。長明はそんな行届いた推論に對して唯彼の詩心の情熱を憤然とかがやかしてみせるだけで、それ以上の辯解は之を爲してゐない。

彼が若い青春の日からいちはやく誘はれがちだつた戀、和歌、管絃等の「すき」に於て常に誘はれてゐるものは、實用的及び論理的な何ものにもなく、實用や論理の上と底と

にある、も一つの直な情のことわりであつた。長明は方丈の庵の座右に和歌管絃の抄物と往生要集をそなへてゐたと記してゐるが、その往生要集は一般に厭離穢土欣求淨土のすすめにも最も効果的に出来てゐたが、更にその本文に立入つて「極樂の證據」や「正修念佛」、「助念の方法」「別時念佛」更に「念佛の利益」「念佛の證據」等の章に進めば、それが合理的に説いてあればあるだけ不信の臭味が溢れて来て、「問答料簡」などに至ると、その不信の自問自答のやうなものの痛烈さが却つて興味を以て讀まれる位である。長明の念佛が、往生要集のそれに比して「若し念佛ものうく讀經まめならぬ時はみづからやすみみづから怠る。さまたぐる人もなく又耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども獨り居れば口業を修めつべし。かならず禁戒を守るとしもなくとも、境界なければ何につけてか破らむ」といふ態のものであれば、もはや往生要集の所説も要なきものであり、又「觀察門」あたりの比類なく豊麗多彩な空想の極致も、彼の胸中一片の「情と直」とをいとほしむ心に對して多くの慰めにもなり得る筈はなかつた。寧ろ往生要集を傍に置いて之と比し益々己の

狭い「短い心」をいたはる資料になり得たかもしれない。發心集の序文の冒頭には、往生要集の「助念の方法」中の「常爲心師、不師於心」といふ句を引いてゐるが、それが遂に長明が「自心をはか」つて發心の趣旨を語るに及んでは前引の序文のやうなことに落ちてゐるのである。

それでは彼がこの方丈の閑居に於て爲してゐる所は何か。今少しくその文章によつて追つてみたい。結論的に言へば、世にも佛教にも身の置く所なき程に押し詰めたその一點地に於て、彼はその庵を「いま身のため、むすべり、人のために作らず」といひ、又「絲竹花月を友と」して「情あると直なる」純眞な生を、「ひとり」「養ふばかり」の、「養生」と言つてゐる。即ち奇抜な言葉のやうだが正しく詩人の「養生」説であるといふことができ。そのことを更に述べたい。

長明は方丈記の冒頭「行く川のながれは絶えずしてしかもとの水にあらず」より始めて、世の「跡なき」様と成り果ててゐることを、自ら經驗した天災地變、遷都、世情等に

觸れて滔々と筆に走らせて記しつけてゐるが、併しその歎きは世のために歎くのではなくなつてゐる。寧ろ世の人はそのやうな災厄の後「皆味氣なき事を述べて些か心の濁も薄らぐか」と見し程に、月日重なり年経にし後は、言葉にかけて言ひ出づる人だになし」といふに至つては、傷心はそのやうな人々にはなくて、唯詩人一人の上にあるのみである。長明はそれを傷心して言ふ、「すべて世のありにくき事、我身と住家とのはかなくあだなるさま又かくの如し」と。遂に歎けるは詩人である。「若し己が身數ならずして權門の傍に居る者は深く喜ぶ事あれども大きに樂しむに能はず。なげき切なる時も聲をあげて泣く事なし。」しかし世人はこのやうな卑屈してしまつた精神に自ら傷心はしない。そして競つて權門に「へつらひつつ出で入」る事に安んじてゐるとも言へる。「世に従へば身くるし」とは世人のことではなく、却つてこのやうな、生の卑屈した世への詩人の堪へがたい告白である。而もこのやうな世から出離して閑適の生活を營めば、己一人の心は安らかなるべきに却つて世の人の爲ぬ憂悶をここで述べてゐる。このやうな感受は世人の顧みも關知もし

ないところで、詩人の一人でひそかにしてゐることである。歎き憂悶すべきを歎かずなつた世を傍觀するに堪へず己一人に痛烈に感覺して歎いてゐる。而もその切なる歎きや行動は却つて世人の、健常ぶつた、驚かうとしない生活に同じない故に、「狂せるに似」てゐる。又「狂せるに似たり」と自ら自嘲的に激越して傷心してゐるのが詩人である。「いづれの所をしめて如何なるわざをしてか、暫くも此身を宿し、たまゆらも心をやすむべき！」われわれは今の代の永井荷風の激越を想起することもできるであらう。

彼はこのやうにして遂に「わが心と」己れを驅つて次第に狭く小さく、遂に己れの住處無さへ到達する。彼は「おのづから短き運を覺りぬ」と告白する。この不運は唯世に不遇であつたといふ事情によるのではなく、まことは、彼が何を信じようとせず、何を信じようとしたかにかかつてゐる。かくて此の痛烈な運命を負うて幾度かの出離的行動の後「六十の露消え方に及て、更に日野山の奥に跡を隠し」た方丈庵は、今や車二輛を以て運ぶ「ほかに更に他の用途いら」ざる、はかない營みであつた。否それは既に世の營みといふべく

もない「假の庵」となつてゐるのである。方丈記に記したその「假の庵のありやう」は、東に三尺餘の庇をさして柴折りくぶるよすがとす。南に竹の簀の子を敷き、その西に闕伽棚を作り、北に寄せて障子を隔てて阿彌陀の繪像を安置し傍に普賢をおき、前に法華經を置けり。云々」と何くれとしつらへ事をしてゐて、彼が最も氣取つて記してゐるに拘らず、まことは要なき「住家」のまねごとみたいなすさびにすぎないものである。この庵の有様を記した文章が偶然か古來の傳來の間に於て殆ど收拾つきかねるほど非常に異同の甚しい部分であるが、それには後の佛教者流などの傳寫間になした改竄もあるとしても尙ほ解き難い程である。併しそれは別とするも、或は長明自身此のしつらへは氣取りだけあつて整頓秩序のつかない、仕様のないものではなかつたか。もし掛けられた阿彌陀の繪像とその位置、或は普賢、不動の繪像、法華經等の教理的關係等に矛盾があるとして論證を試みるのも一つの方法ではあらうが、遂に何か教説に合するやうに想定し替へ、或は又世捨人が和歌管絃の書や折琴繼琵琶を具へてゐることを審しんで之も矛盾として、従つて頭の一隅

で几帳面な修道者を想像するために、考證によつて是等を整理し、或は抹殺するならば、それはうまく成功しつつ結果としては此の詩人を方丈庵から追放してしまふことにならう。しかしこの庵主は、念佛もの倦く讀經まめならぬも障りとせず松風流水にたくへてひとり詠歌彈琴する詩人であつたのである。

さてこのやうに世にも要なく又念佛もの倦く、つれづれと佗びた假の宿の、爲様ことないひとりの住家の中に、そして有りとしもなく有るその人の生活の中に、われわれは次に述べるやうなかなかな齏めきを不圖見つけることができるのである。

彼がこの庵にも既に五年を経て「軒に朽葉深く土居に苔むせ」る頃、事の便りに又しても都の轉變を仄聞いたりした時の感懐に、

たゞ假の庵のみのどけくして恐れなし。程狭しといへども夜臥す床より晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。寄居蟲は小さき貝を好む。是よく身をしれるによりてなり。睢鳩は荒磯に居る。すなはち人を恐るるが故なり。我又かくの如し。身をしり世をし

れらば、願はず交らず、唯しづかなるを望みとし愁へなきをたのしみとす。

この消極の「しづか」の底に詩人の祕密がひそんでゐる。そこにひそかに生の更生が準備されつつあるのである。即ち彼が「恐れなし」「愁へなし」「不足なし」「交らず」といふ中に、「身をしり、世をしる」といふことを言ひ放つてゐることは、先づ注意されなければならぬ。此の「しり」方は所謂客觀的認識などでなく其の身にひしとひびいて捉へてゐることである。すべての「世」をも此一身（これ以上小さくも狭くもなり得ない迄問ひつめてきた）に於て、「しづか」に知られて來たことである。「しづか」とはさういふ覺知が最も無礙純潔に働いてゐる境涯である。この正しい覺知は更に詩人によつて己れ身づから確められて行く。

すべて世の人の住家を作るならひ必ずしも身のためにせず。

「必ずしも身のためにせず」とは警醒である。世の人が己が身のために營んでゐるつもりで利慾に走りつつ實は、何らそれはその「身のために」してゐることになつてゐない。利己

的であつても己を眞に養ふものではない。

われ今身のためにむすべり。

これは利己であらうか。否、眞に生を養ふ人の絶對絶命の眞言である。希臘の神殿の柱に彫りつけられてあつたといふ「汝自身を知れ」とか、デカルトの「我思ふ故に我あり」に等しい覺知であり、而もそれ以上に、生を熱くいとほしみ育むところあふれんばかりである。而して何故に「人のために作らざる」か。それは「伴ふべき人もなく頼むべき奴もなき」故である。生を養ふことを忘れ果てたる人々のために何の「宿」ぞ。詩人は唯「情あると直なるとをば」此の庵の中、己の中にひそかに育まうとしてゐる。今や此のえうなき假の庵こそ人間の生を養ふ家であつて、世の人の徒らに眷屬親朋或は「財寶牛馬のためにさへ之を作る」といふが如き、その爲めにするところ實の如くにして實は果てしなくえうなき營みである。少くとも正しく生の養ひに直なるもの甚だ薄いと云はねばならない。

それ人の友とある者は富めるを貴みねむごろなるを先とす。必ずしも情あると直なる

とをば愛せず。ただ絲竹花月を友とせむにはしかず。人の奴たる者は賞罰甚しく恩顧厚きを先とす。更にはぐくみあはれぶと、やすくしづかなるとをば願はず。

言ひ換れば詩人自身こそ情あると直なるとをば愛し、はぐくみあはれぶと安く閑なるとをば願ふ者として、自ら任ずるのである。

長明は、此の境涯から、徐ろに此のやうな養生者の營みを述べる。

唯我身を奴とするには如かず。いかが我身を奴とせんとするならば、若し爲すべき事あれば則ち己が身を使ふ。たゆからずしもあらねど人を従へ人を顧みるよりはやすし。若し歩くべき事あればみづから歩む。苦しといへども馬鞍牛車と心をなやますには若かず。今一心を分ちて二の用をなす。手の奴足の乗物よく我心にかなへり。心身の苦しみを知らば苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。使ふとても度々過ぐさず。ものうしとても心を動かす事なし。いかに況や常に歩き常にはたらくは是養生なるべし。なむぞいたづらに休みをらん。

一身を慵懶無能にまで追ひ詰めて最小限の生を閑居した詩人が、其のわづかに其の一身を養ふ、その閑なる養生の中に、或る「はたらき」をおのづから見つけてきてゐる。それは尙ほ「たゆく」、唯わづかなる己の用を足すのみのはたらきに過ぎないが、無礙にして自在である。少くとも己と己との間に信用がある。(嘗て己が身と心との隔隙離反に信を置き得ずになやんだ青春の日の長明を想起せよ。)長明はやうやく長く求めてやまなかつた情あると直なるとの願ひを何ものにも妨げらるることなく己の中に見つけ出して、おのづから、心すなほに、孤居の中にもかすかに心あたたまるを覺えたのである。「何ぞいたづらに休みをらん」とは初々しいばかりの更生であらう。

それは未だ己一身、その僅かに起居の振舞を出でないが、己を養ふいとほしみに熱く満ちつつあるものを感じしめられる。厭離反撥し續けて迫め來つて僅かに残つた生のかげらのやうになつた中に、生のいきづきを聴きとり、それを大事にするために己が手足を使ひ、衣食と住家とをいつくしんでゐる養生である。一本によれば藥草を植ゑましたといふ。

衣食のたぐひ又同じ。藤の衣麻の衾、得るに従ひて肌を隠し、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。人に交らざれば姿を耻る悔もなし。糧乏しければ疎かなれども哺をあまくす。すべて斯様のたのしみ富める人に對して言ふにはあらず。唯わが身一つにとりて昔と今とをなぞらふるばかりなり。(中略)今さびしき住居一間の庵、みづからは是を愛す。(中略)もし、此の言へる事を疑はば魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば其心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば其心を知らず。閑居の氣味もまた同じ。住まずして誰か覺らむ。

この己一身の中に熱い信用を抱いてゐるのを、狭しとて責めてはならない。何ものをも信ぜざるに相交はり相和して行くやうな世上の欺騙の生をここまで撥つて、清く抱き守つて來た此の孤獨の中には、「それ三界はただ心一つなり」と心を愛してやまない熱い息吹きが何ものにも屈せぬ激しい勇氣を以て告げられてゐるのである。己を信用し得る以上に己が世に責任を取り得る道はない筈である。もはや他人に對して言ふことではない。唯「我身

一つにとりて」と言ふ。私は長明が此の最後の、第一義の信用に於て取戻した己の強靱さを思ふ。もはや何ものも之を傷けることはできない。

然るに此の自己信用と養生とに對して、前述のやうに、これ迄彼を導くかみえた佛教的悟達の側からは却つて彼に不信を鳴らし誹謗を放つのである。佛教は遂に彼が養はうとしてゐる生も閑居も、一切之に執するものを往生の「障り」として、此の世から彼の世へひつさらつて往生せしめねばけり、がつきにくいのである。併しこれに對する長明の頑たる拒否は既に述べた。「朝夕に西をそむかじと思へども月待つほどはえこそ向かはね」といふ若き日の述懐以來彼の詩魂は不屈なのである。彼の救ひは唯そこにのみあるのである。

然るに、長明が却つて耻るのは圓滿具足の佛陀に對してではなく長明がいみじくも書いてゐるやうに、人の中に出て乞食などすることである。彼はその草衣木草に命をつぐことを唯人に交らざればこそ耻る悔もなしと言ひ、都に出てて身の乞食となれる事を耻づと雖も云々と言つてゐる。これは又讀者の不審しき耻らひと思ふ所であらう。併しわづかに今

養ふ生を限りなくいとほしみ、そのためにはとりあへず此の衣食住を以て足れりと自足しても、併し本來生を養ふとは生の豊かなるべきを養ふものであるのが詩人の本心である故に、詩人の心には、乞食や、人間の様ならぬ牛馬の糧にひとしき衣食住は、又耻しいのである。生を養ふとは衰へたる生を新生せしめると共に之を豊かに花榮えしめねばならない。唯動物の如く衣食住して耻しとしないのではない。それは正しくは世人に對して、といふのではなく、「人」として己自ら耻づるのであるが、それ故にこそ又人に問ひて深く耻しと思ふのである。「世」の人に對してではない。ここには己の中に、又己の外に、耻づべき「人」が顧みられ、その復活があるのである。このことは重要である。唯彼はその生が満たさるなき日の故に、その時代の耻らひを、此の庵のかけに隠して撫然たる感あり、とも言ふべきか。

長明出離の後、源家長が思ひがけず會つた時、長明はそれかとも見えぬ程に瘦せ衰へてゐた。そして語るらく、世を恨めしと思はざりせばうき世の闇は晴れざりしならん、これ

ぞまことの朝恩に侍るかなと、さう述懐した事は前に記したが、その時「うき世を思ひ捨て少しのほだしにもこれが侍る」とて經袋から一挺の琵琶の撥を取出して、「これは如何にも苔の下迄同じ所に朽ち果てんするなり」と語つたといふ。家長はそれについて「猶心に入れたりしことを思ひ捨てがたき事にしていささか妨げともなる迄覺ゆらんいとをしさよ」と書き添へてゐる。上來述べ來つた所を思ひ合せて感慨惻々たるものがある。その琵琶の撥といふのは先年出離の後、後鳥羽院が長明祕藏の手習の琵琶といふを召し給うた際その撥に「斯くしつゝ峯の嵐の音のみや終に我が身を離れざるべき」掃ふべき苔の袖にも露しあれば積れる塵は今もさながら」といふ二首の和歌を書いて添へて奉つたのに對して、院の御命によつて家長が代詠して返歌を書いて返したといふ由縁の撥であつた。すなほに是ぞまことの朝恩と更生を信じつゝも實は詩人としての美しい意匠を己に與へて満たすものとはあるわけでなく、せいぜい一本の撥に心を入れてゐる程度である。それは彼のつびきならぬ「すき」を峻烈に表象してゐるものではあるが、所詮一挺の撥でしかない、

あまりに佗びしい貧寂なる表現である。「それかとも見えぬ程に瘦せ衰へ」てゐたといふ長明の姿貌そのままである。而もこの瘦せ衰へて一挺の撥を後生大事にしてゐる詩人の妄執的な願求こそ、この時代の運命であり結論であつたのである。しかし彼がこの喪失の底でひそかに生を煮た方丈の閑居の中に、微かな意匠も始まつてはゐたともいへる。例へば、庵の西の窓に「觀念のたよりなきにしもあらず」と想ひ或は「春は藤波を見る。紫雲の如くして西方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路を契る。云々」と庵にあふれて何か想ひ描かうとし、又その地より風景を觀望して古人の風雅をしのび、或はとりとめない小童を「つれづれ」の友として「遊びありく」、或は又夜の庵に獨り住む風情も心うるほすものがある。かくて「山中の景氣折につけても盡ることなし」とは、此のやうな貧寂の中に思ひ迫められた、かすかな意匠に擬したまねごとみたいものである。まことにここより生れ出でて花榮えむ「かたち」とは、彼を越え彼の時代を経て後のことであらう。彼としては未だ、

行く川のながれは絶えずして

しかももとの水にあらず

よどみにうかぶ泡沫は

かつ消えかつ結びて

久しくとまる事なし

.....

と、徒勞の中に徒勞を流して唯なげいてゐるところにその儘に、本質の美しさ、いのちの美しさがあるといふべきのみであらう。

一三 風靈の目

この「行く川のながれ」に似て同じことを、「風」といふ表現を以てしてゐること又屢々で、松風にたくへて琴を弾じた長明に、まことふさはしいものがある。

彼が青春放蕩の日に「しのばんと思ひしものを夕ぐれの風のけしきについに負けぬ」と歌ひ、和歌所を辭して出離の時「いづくより人は入りけん眞葛原秋風吹きし道よりぞ來し」と詠じ、又その出離の後かの琵琶の撥に書きつけて己を思うた「斯くしつづつ峯の嵐の音のみや終に我身を離れざるべき」といふ歌、それらが何れも「行く川のながれ」と同じ心の、形なき「風」を以て詠はれてゐて一種獨特のなげきのふかく切なるひびきをもつてゐること、明かであらう。ここに又今一首記念的な「風」の和歌がある。それは鎌倉幕府の日記「吾妻鑑」に見えるもので、建暦元年十月十三日の記事に、「鴨社氏人菊大夫長明入道法名、蓮風、雅經朝臣註、新古今和歌集撰者の一人の擧により」鎌倉に下向し將軍實朝に謁すること度度、此日幕下將軍頼朝の忌日に當り彼の法華堂に參し念誦讀經の間懷舊の涙頻りに相催し、一首の和歌を堂柱に注したといふ其の歌、「草木靡秋霜消空苔拂山風」

此の鎌倉下向の記事は長明の生涯の最後に來てその唐突さに人を驚かすのであるが、確實な事實であり、下向の途次の雅經及び從者との連歌が菟玖波集に載せられ、又歌枕名寄

に歸洛の途の和歌一首も録されてゐる。

長明の此の鎌倉下向の用件は、雅經の推舉でもあり、歌人將軍實朝との會見でもあるので、その目的は學者の説くやうに、いづれ和歌等に關するものが主であつたであらう。しかしこれによつて或は長明が鎌倉に仕へるといふやうな意味があつたかの如く推量するのは思ひ過ぎといふよりも寧ろ推考不足を便利よく補つただけであり、以前の長明ならともかく現在の長明には誣ひすぎることである。前に後鳥羽院より和歌所への再度出仕を勧め給うたのも固辭し、その出離の心境を、「これぞまことの朝恩」と拜謝したのも忘れてならぬいし、既に齡は六十歳に垂んとし、方丈記を書いたのは鎌倉下向の後とは言へ、方丈閑居の味はひも、「住まずして誰かさたらむ」と記してゐるほどである。若し實朝が和歌に關して求めたとしても、その前々年には既に實朝は定家の教を受け、定家より詠歌口傳一卷を獻じ、建保二年にはまた雅經の仲介で家傳の萬葉集を讓つてゐるし、他にも歌人が謁して歌會が催された例はある。必ずしもわざわざ長明を要しないのである。もし必要ならば、「無

名抄」の如きを獻するだけを以て足るであらう。殊に長明の風變りな閱歴は明かであり、又近年は、和歌のことで京人の間に出入するといふこともなく、新古今集の中でも何等有数の歌人となつてはゐない。唯他の人と違つて長明は束縛のない身分で鎌倉へも割に自由に行ける（といつても既に六十に近い）といふことはある。然しそれだけで實朝が長明を招聘するといふ理由は極めて乏しい。長明の鎌倉滞在は極く短いもので歸途に相模の砥上原での詠歌に「冬がれ」を歌つてゐるのを以て見ても、恐らくその年の内に歸途についたものであらうが、これは實朝に仕へることが不成立になつたために急に歸ることとなつたといふやうな事を考へなくてもいい。將軍が會つてみたいと望み、長明又それを納るればその事自身に滞在の永きは要しない。これは必ずしも長明に限つたことではあるまい。

それでは實朝は何故に長明などに會ひたがり、長明又わざわざ鎌倉まで足を伸ばしたか。勿論その間に雅經の斡旋があるわけで、初めから實朝が長明を知つて彼を求めたか、或は雅經が實朝の或る意向に對して適任として長明を推舉したのか、それは何れでもいい。し

かし長明の方から言へばたとひ和歌のことを以て召されたとしても寧ろ長明がそれを辭さうと思へば、老齡の身に長旅堪へ難しと言つただけでも斷り得た筈である。しかるに長明も實朝に會ひに行くことを承知したのである。或は「無名抄」は斯ういふ機會に着手され始めたのかもしれない。（但し「關の清水の事」には建曆元年の話を載せてゐる）或はその中の一部になつてゐる「近代歌體事」といふ歌史と當代の歌體についての記述は問答體になつてゐたりするし、俊成が式子内親王のために「古來風體抄」を執筆し、又定家も前記の如く詠歌口傳を實朝に送つたり他にも人のために執筆したりしたやうな趣旨で、或は實朝へ語るために書きつけた覺書のやうなものとこじつけられないこともあるまい。實朝に謁すること「度々に及ぶ」といふ記事があつて、而も他の歌人の場合の例のやうに歌會など催されたといふ記録はないので、同じく和歌の事を以て謁したとしても直接歌會を共にしたりするのではなく、一名「長明歌物語」とも言はれてゐる無名抄風の歌話をしたのかもしれない。しかし既にそのことのために定家の如きが實朝と關係があつてゐて特に長

明を要しないし、又長明も少くともそのやうなことだけで實朝に會ひに行くことは躊躇するであらう。權門に出入することに對するきびしい反撥心さへあつたことは方丈記にある通りでもある。私は學者がこの鎌倉下向の動機を唯和歌の事と長明の世俗の情の残つてゐるものとするだけの説には従ひ難い。少くともそれだけで長明を動かす事は無理であることはもはや説明を要しない。

私は長明の下向を實現させた發起は何といつても先づ實朝自身の方にあることを思ひ、先づ少く實朝を理解することをつとめてみたい。

實朝について概見し得ることは第一に足利義政に似て少くとも幕府的な政權の器でなかつたことである。否それ以上に、政權などにかかはるやうな材でなく、稍夢想的に、狂せるに近い所さへあるのである。唯その心情そのものは素直で詩人的熱情をもつてゐる。これは平安朝時代に關白などに置いたらそれ程にはをかしくなかつた型である。そして彼は鎌倉に擬京都擬王朝文化を企圖した。平家滅亡後の源氏の負うた運命も單に頼朝の性格や

北條氏の惡辣によるのみでなく、あのやうに殺し盡して行かなければならなかつたのは一種あの時代の亡魂的文化の象徴といつた感じがするが、實朝は特に源氏自身と北條氏との此の因業のやうな運命に挾撃をうけて、何やら或一點だけ非常に清らかで健康で熱情的であるほかは、まるで狂妄で病的で孤獨に倦みきつて、早老してしまつてゐたやうに見える。金槐和歌集にも不思議な位老人の心境を歌つた稀らしいものがある。長明が下向した時も實朝は僅か二十歳であつた。十四歳の元久二年には虎視耽々たる執權は平賀朝政を將軍に立てんと謀つて破れたが、落飾しただけで死罪にもならず北條一族(實朝の母をも含んで)の吸血的な眼は層一層實朝に憑いてゐた。遂に二十五歳の建保四年實朝は史上最も奇異なる行動を企ててゐる。それは宋人陳和卿(東大寺大佛の鑄造に當つた工人)に大船を造らしめてその船を以て渡宋して佛道に入つてしまはうとしたのである。その船は翌五年竣工して愈々進水せしめようとした所、大船のために濱から水へ浮び出させることが出來ず、遂に渡宋は實現しなかつたが、將軍として空前絶後の事で、彼の胸中の空虚の大きさと偉

怠の深き想像に餘るものがある。而もその胸中、大君を、民を、親子を心あたゝかく一筋に思ふの情あつて世をあたため己をあたためんとした念の切なるものもあつた。後に足利義政が實にこの實朝と似てゐたが、彼も諸遊藝と世情とに漸く倦厭憂悶して、後述のやうに茶によつて己をあたゝめようとし、心中に「仁念之心」あふれてゐたこと「蔭涼軒日録」に見えるが如きである。實朝が鎌倉八幡宮で最期をとげたのはその二年後であつた。

長明の事を雅經が實朝にどのやうに噂したか、何かの噂のついでに出たことにしてもいい、又長明の事を何と語つたとしてもいい、長明の印象は此の將軍の胸にかなり興味多く描かれたといふよりも、いかに通じ合ふものを感じたに相違ないことはや説明を要しない。因みに、金槐集に、相州の九十餘歳の朽法師があつて話相手に來たりしてゐることなども見え、素還法師との交情も見えてゐる。長明も亦雅經から實朝のことを何と語られたか。それは將軍といふ權門としてよりも文人將軍としてでなければならぬ。そしてその語られる中に必ずや又それほどに長明に會ひたいといふ實朝のことについて立ち入つて實

朝の實體が語られたかもしれない。併しそれだけで長明が下向を諾すると考へるのも未だ早計であらう。私がここに漸く想起するのは、長明が嘗て末季の時代を見届けるためかのやうに、京都の飢死者を四萬二千三百餘と算へたり、新都福原にあさましい世の姿を見届けるに往つてみたり（二二頁以下参照）、ふしぎな行動をしてゐた事である。それも普通に見ようと思つてしたことではなく、何か時代といふものに對して見開いてしまつてゐたやうな彼の目がふつと意志を越えて見届けてゐたことである。私は今敢て彼が將軍の衰滅を見届けるがために意識して往つたとは言はない。しかしこのやうに意識下に於て、「時代」に對して心憑かれてそれを嗅ぎ取らうとして我と自ら足を進めるといふ彼自身の運命のやうなものを、彼自身拒否し得なかつたことをここに想ひ合せるのである。そして斯う考へてみて、佐藤春夫氏の小説「鴨長明」が矢張或意味で實朝を見届けるために密偵として行くといふ一見驚くべき唐突な仕組みになつてゐることに私は別の驚きを覺えるのである。

實朝と長明の會談、老若二人、一人は老いて尙ほ事に遇へば若い日以來いつまでも同じ

激越に陥り易い詩人と、一人は若くして老成してしまつたやうな文人將軍の、共にどのやうな事を語り、互にどのやうに相手を洞見し合つたか、口に他の事を語りながらも此の二人は互に見抜くべきものを見抜いたと思はれる。將軍に謁すること度々に及ぶといふ。しかしそれだけに實朝にとつて、深く共鳴はしても、それは共鳴によつて結實するものではなく、互の徒勞の運命を見透してどうにもしやうのない退屈さへ感じたかもしれない。少しおそく生れすぎたか少し早く生れすぎたなどと語り合つて甘酸っぱいものを感じ合つたかもしれない。

長明が頼朝を追懐して「草木も木も靡きし秋の霜消えて空しき苔を拂ふ山風」と法華堂の柱に書いた歌は恐らくは後繼たる「將軍」の通例喜ばざるものであらう。懐舊之淚頻相催とは右の歌によつて史生の推量したものではないか。長明が頼朝を懐舊する縁はない筈である。唯私には右の歌が頼朝の雄心を歌ふよりも、今の將軍のおもかげを裏返しにして見せた挽歌のやうな思ひがする。「山は裂け海はあせなん世なりとも君に一心われあらめやも」

といふ實朝の發想は「太上天皇(後鳥羽院)御書下預時歌」で、院の「奥山のおどろが下も」の御製に相應通する並々ならぬ時代の發想である。しかもこのやうな發想を爲す者の悲運の時代である。長明の目が、この異常に興奮したり而も早くも倦んじて變な夢想に憑かれたりする若い將軍の面を凝乎と見詰めたであらうといふことも想像することが出来る。建保二年二月實朝が滯醉後病惱の際、彼の歸依してゐた榮西禪師が、良藥として茶一盞を進め「喫茶養生記」を添へて獻じてゐる。その中に「茶而養生之仙藥也、延齡之妙術也」とあるのを私は意深く讀むのである。長明も實朝に自己の「しづか」なる方丈閑居の養生の一端を語つたにちがひない。徒勞ではあつても。

私に更に想像を逞うせしめるならば、方丈記を書いたのは、慶保胤の「池亭記」の示唆ありとしても、それと共に又、長明が實朝と周圍とを見て、今迄見た以上に、時代の行き盡した餘りなる姿をまのあたりに見た思ひを抱き、その感慨底をつくと共に、一方には却つて自分の中にかすかに生を信じ得るやうな感懷をもつ機會ともなつたといふこともないで

あらうか。方丈記の文末には「建曆の二とせ彌生の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす」とある。

一四・ひと

われわれは長明が極まれる孤獨閑寂の中に清らかに生を養ひ、又生を養はんとしてはその貧寂を「ひと」として耻しとした中に、「ひと」を思つて「ひと」のしづかな新生をひそかに湛へてゐた時、前にも述べたやうに(第九章)一方後鳥羽院の「おどろが下」の御製を直ちに思ひ出るのである。「奥山のおどろが下も踏みわけて道ある世ぞと人にしらせむ」この御宸念の長さは、唯民を愛し給ふといつただけで足りないものがある。ここに思ひ給うてある「人」とは實はそれと言つて當てのある「人」ではない。その時代に院をして斯くの如きの御製を御發想せしめてゐるのは實に斯く告ぐべき「人」——民たるものの當てなさであること、申し上げやうもなく痛ましく畏い。長明について言へば彼がかの天災地

變や平家の暴逆等を限りなく痛み歎いた方丈記の文章の中で、彼はそれを「民の愁ついに空しからざりければ」と記してゐる。又皇政のめでたかりし日を回顧して「是民を惠み世をたすけ給ふ云々」と敍べてゐる。而も此の「人」といひ「民」と言ふ、實はそのやうに「あはれみ」「めぐ」まるべき人でありつつ、現前の世の人々は「身、他の奴やつことなり」果て素直に惠まるべき己を喪ひ、「はぐくみあはれぶといへども」それを願ふことを忘れてゐるのである。「道ある世ぞと人に知らせむ」と詠じ給うたけれどももう道などない世であり、道などに耳傾けない人であつた。「道のほとりのあだ言あだことの中に我が一念の發心を樂しむばかりにやといへり」と發心集の序文に記した長明の心には民の間にひたすら清嚴な生の聲を聴かうとした願ひがあつた。斯くの如く熱く「民」と言ひ、又院御自身道ある世ぞ、人にしらせむと想ひ給うたのは唯王者の畏い御詩心の中のみ倫理ある時代であつた。院がそこに萬葉集大の、又延喜の盛えをも凌がんとする弘大厚富の文化を御企圖遊ばされ狂瀾を既倒に廻らして維新を期し給うたものであること先に既に述べた事がある。院の高い雄たけびは院